

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第591集

古蹟
向Ⅲ遺跡第1・2次発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

2012

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

(公財) 岩手県文化振興事業団

向Ⅲ遺跡第1・2次発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に関連して平成21年度、22年度にわたって実施された遠野市向Ⅲ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。発掘調査では、縄文時代の陥し穴、平安時代の竪穴住居、中世の竪穴建物や樹立柱建物などが見つかりました。出土した遺物としては、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代早期の土器片などを始め、縄文土器・石器や古代の土器など様々な時代の遺物がみられます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、遠野市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年2月

公益財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 池田 克典

例 言

- 1 本書は、平成21・22年度に行われた東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に伴う向Ⅲ遺跡第1次・第2次の緊急発掘調査成果を収録したものである。
- 2 向Ⅲ遺跡の岩手県遺跡登録台帳遺跡番号は、MF53-1206である。遺跡略号は第1次がMKⅢ-09、第2次がMKⅢ-10である。
- 3 第1次調査区は岩手県遠野市綾織町下綾織第31地割20-1ほかに所在し、第2次調査区は岩手県遠野市綾織町下綾織第31地割102地内ほかに所在する。
- 4 発掘調査および整理作業は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時。平成23年4月1日より公益財団法人）が実施した。
- 5 第1次の発掘調査は晴山雅光・福島正和・北村忠昭、整理作業は晴山雅光がそれぞれ担当した。また、第2次の発掘調査は羽柴直人・福島正和、整理作業は福島正和がそれぞれ担当した。
- 6 発掘調査を行った総面積は、15,963㎡である。
第1次調査の面積は8,750㎡、発掘調査期間は平成21年7月13日～10月29日、整理作業期間は平成21年11月1日～平成22年3月31日である。
第2次調査の面積は7,213㎡、発掘調査期間は平成22年4月8日～6月30日、整理作業期間は平成22年11月1日～平成23年2月14日である。
- 7 本書の執筆および編集は、晴山と福島が分担して行った。
- 8 第2次発掘調査に際する基準点測量は協進測量設計株式会社に、航空写真撮影は東邦航空株式会社にそれぞれ業務委託した。また、第1次発掘調査で出土した石器等の石材の肉眼観察は花崗岩研究会へ業務委託した。
- 9 発掘調査においては、国土交通省東北地方整備局、遠野市教育委員会、近隣住民の方々のご理解とご協力をいただいた。
- 10 発掘調査および整理作業にあたり以下の方々のご教示をいただいた（敬称略・順不同）。
小向裕明・黒田篤史・澤田恭平・村田匠（岩手県遠野市教育委員会）、国生尚。
- 11 本書では、国土地理院発行「遠野」・「人首」・「土窟」・「大迫」1：50,000地図を使用した。また、遺構の土層注記における土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』2008年度版に準拠した。
- 12 発掘調査で作成した各種記録、出土した遺物および実測図、写真等の一切は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 13 本書発刊以前に現地説明会や当センターのホームページ（<http://www.echna.ne.jp/imaibun/>）等で調査成果および調査経過の一部を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業を経ている本書をもって正とする。

目 次

I 経緯と経過	
1 調査経緯	1
2 調査経過	1
II 立地と環境	
1 遺跡の位置	3
2 地理的環境	3
3 歴史的環境	4
III 調査方法	
1 発掘調査の方法	9
2 整理作業の方法	11
3 記述および記載方法	11
IV 第1次調査	
1 調査概要と基本層序	13
2 検出遺構	13
3 出土遺物	37
V 第2次調査	
1 調査概要と基本層序	43
2 検出遺構	45
3 出土遺物	84
4 K区近世・近代の墓標	88
VI 総 括	
1 旧石器・縄文時代	91
2 古 代	91
3 中 世	92
4 ま と め	92
報告書抄録	147

図版目次

第1図	遺跡の位置	5	第29図	掘立柱建物 (SB204)	49
第2図	遺跡の立地	6	第30図	掘立柱建物 (SB205)	50
第3図	周辺の地形	7	第31図	掘立柱建物 (SB206)	51
第4図	周辺の遺跡	8	第32図	掘立柱建物 (SB207)	52
第5図	第1次・第2次調査区割	9	第33図	掘立柱建物 (SB208)	53
第6図	全体平面・基本層序	10	第34図	掘立柱建物 (SB209)	54
第7図	第1次調査遺構配置	12	第35図	掘立柱建物 (SB210)	55
第8図	焼土遺構 (SF01～04)	15	第36図	掘立柱建物 (SB210) 断面	56
第9図	土坑 (SK01～04)	17	第37図	掘立柱建物 (SB211)	57
第10図	土坑 (SK05～08)	19	第38図	掘立柱建物 (SB212)	59
第11図	土坑 (SK09～12)	21	第39図	掘立柱建物 (SB213)	60
第12図	土坑 (SK13～16)	23	第40図	竪穴建物 (SI201)	61
第13図	土坑 (SK17～19)	24	第41図	竪穴住居 (SI202)	63
第14図	土坑 (SK20～22)	26	第42図	竪穴住居 (SI203)	64
第15図	土坑 (SK23・24・26・27)	28	第43図	竪穴住居 (SI204)	65
第16図	土坑 (SK29～32)	29	第44図	土坑 (SK202～205)	68
第17図	土坑 (SK33・35・36)	31	第45図	土坑 (SK211・213・214・219・220)	71
第18図	土坑 (SK37～39)	33	第46図	土坑 (SK217・224・226)	73
第19図	土坑 (SK40～43)	34	第47図	土坑 (SK221・225・227・228)	75
第20図	柱穴 (SP01～08)、掘立柱建物 (SB01・02)	36	第48図	土坑 (SK229～231)	77
第21図	溝 (SD01)	37	第49図	土坑 (SK232～237)	80
第22図	第1次調査出土遺物 (1)	39	第50図	性格不明遺構 (SX201～204)	83
第23図	第1次調査出土遺物 (2)	40	第51図	第2次調査出土遺物 (1)	84
第24図	第1次調査出土遺物 (3)	41	第52図	第2次調査出土遺物 (2)	86
第25図	第2次調査遺構配置	44	第53図	第2次調査出土遺物 (3)	87
第26図	L区掘立柱建物群	46	第54図	K区墓石拓本集	90
第27図	掘立柱建物 (SB202)	47			
第28図	掘立柱建物 (SB203)	48			

表目次

表1	周辺の遺跡	8	表4	掲載遺物一覧 (第2次調査)	88
表2	掲載遺物一覧 (第1次調査)	42	表5	K区墓石一覧	89
表3	近現代の遺構一覧 (第2次調査)	54			

写真図版目次

写真図版1	第1次調査前現況	95	写真図版28	掘立柱建物 (SB214・215)	122
写真図版2	焼土 (SF01～04)	96	写真図版29	主要柱穴断面 (SB202～209)	123
写真図版3	土坑 (SK01～04)	97	写真図版30	主要柱穴断面 (SB210～215)	124
写真図版4	土坑 (SK05～07)	98	写真図版31	竪穴建物 (SI201)	125
写真図版5	土坑 (SK08～11)	99	写真図版32	竪穴建物 (SI201)	126
写真図版6	土坑 (SK12～15)	100	写真図版33	竪穴住居 (SI202)	127
写真図版7	土坑 (SK16～19)	101	写真図版34	竪穴住居 (SI202) 付属施設	128
写真図版8	土坑 (SK20～23)	102	写真図版35	竪穴住居 (SI203)	129
写真図版9	土坑 (SK24・26・27・29)	103	写真図版36	竪穴住居 (SI203) 付属施設	130
写真図版10	土坑 (SK30～33)	104	写真図版37	竪穴住居 (SI204)	131
写真図版11	土坑 (SK35～38)	105	写真図版38	土坑 (SK202～205)	132
写真図版12	土坑 (SK39～42)	106	写真図版39	土坑 (SK206～210)	133
写真図版13	土坑 (SK43)、溝 (SD01)、 掘立柱建物 (SB01)	107	写真図版40	土坑 (SK211～214)	134
写真図版14	第1次調査出土遺物 (1)	108	写真図版41	土坑 (SK215～221)	135
写真図版15	第1次調査出土遺物 (2)	109	写真図版42	土坑 (SK222～224・226)	136
写真図版16	第1次調査出土遺物 (3)	110	写真図版43	土坑 (SK225・227～229)	137
写真図版17	第1次調査出土遺物 (4)	111	写真図版44	土坑 (SK230～232・235)	138
写真図版18	航空写真 (遠景)	112	写真図版45	土坑 (SK233・234・236・237)	139
写真図版19	航空写真 (近景)	113	写真図版46	性格不明遺構 (SX201～204)	140
写真図版20	掘立柱建物群 (1)	114	写真図版47	墓石群・墓石1～4	141
写真図版21	掘立柱建物群 (2)	115	写真図版48	墓石5～12	142
写真図版22	掘立柱建物 (SB202)	116	写真図版49	墓石13～20	143
写真図版23	掘立柱建物 (SB203・204)	117	写真図版50	第2次調査出土遺物 (1)	144
写真図版24	掘立柱建物 (SB205・207)	118	写真図版51	第2次調査出土遺物 (2)	145
写真図版25	掘立柱建物 (SB208・209)	119	写真図版52	第2次調査出土遺物 (3)	146
写真図版26	掘立柱建物 (SB210・211)	120			
写真図版27	掘立柱建物 (SB212・213)	121			

I 経緯と経過

1 調査経緯

向Ⅲ遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区域内に遺跡が存在することから、発掘調査を実施することになったものである。

東北横断自動車道は、花巻市で東北縦貫自動車道（東北道）に合流、さらに北上にて分岐し、西和賀・横手・大仙を経由して、秋田市内に至る総延長212km（岩手県内113km・供用区間45km）の高規格道路である。

本線は、釜石・大船渡港といった重要港湾や、観光資源として有数な陸中海岸国立公園の拡がる三陸地方拠点の諸都市と、先端技術産業の集中が著しい北上中部地方拠点の諸都市や花巻空港等、岩手県内中枢地域、そして秋田県を結び、岩手・秋田両県全域の産業・経済の発展を担うことを目的に策定された。遠野～東和間については、平成10年度に遠野～宮守間で整備計画が、宮守～東和間では施工命令が、それぞれ出されている。また、平成16年度には新直轄方式による整備が決定している。

向Ⅲ遺跡については、過年度において遠野市教育委員会による試掘調査の結果、当路線事業区内に埋蔵文化財包蔵地の存在が確認され、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所は協議を行い、発掘調査を財団法人岩手文化振興事業団に委託することとした。

この協議を受け、第1次調査は平成21年4月1日付けで、第2次調査は平成22年4月1日付けでそれぞれ岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、発掘調査が行われることとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

2 調査経過

(1) 第1次調査

向Ⅲ遺跡第1次の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所との委託契約に基づき、平成21年7月13日より（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

当初、新田Ⅱ遺跡と同時並行的に調査が行われたため、調査員と作業員が、新田Ⅱ遺跡発掘事務所より必要機材等を借り受け、移動する形で調査を行った。8月7日午後、現地へ必要機材等を搬入し、翌明けの10日より本格的な調査に着手した。調査に際しては、昨年度調査した向Ⅱ遺跡より基準点を引用し、航空写真撮影については、遺構の出現状況と、残土処理・湧水の都合から、実施しなかった。また、周辺水田地帯のため、用水路の保護や確認、調査区内およびその周辺に対して、近隣住人や作業従事者の安全を保つための安全対策も適宜実施した。

8月31日をもって、向Ⅲ遺跡の発掘調査を一時中断し、同一事業で緊急・優先度の高い花巻市東和町落合2区Ⅰ遺跡へ調査員・現場作業員が機材とともに9月1日に移動し、発掘調査を行った。

9月17日に落合2区Ⅰ遺跡の調査を終え、同日、向Ⅲ遺跡へ必要機材等を搬入し、発掘調査を再開した。10月20日には、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会生涯学習文化課による終了確認が現地にて行われた。10月26日には、現地公開を催し、広く一般への広報活動を

行った。この現地公開には、雨天・平日にもかかわらず、周辺住人を中心に、40名以上の参加があった。10月末には、撤収準備作業や終了確認時依頼された調査区内の埋め戻し作業を行い、10月29日には作業を終え、調査現場を撤収し、翌日30日の埋め戻し完了を確認して、調査区を岩手河川国道事務所に引き渡した。本来、予定されていた面積の約半分（西半）を終えた時点で、残りの面積は（東半）は次年度へ繰り越すこととした。

整理作業は、平成21年11月2日より埋蔵文化財センター内で行い、平成22年3月31日にすべての作業を終えた。また、この間に本書第1次調査分の執筆作業も行っている。

(晴山)

(2) 第2次調査

向Ⅲ遺跡第2次の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所との委託契約に基づき、平成22年4月8日より（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。前年度、調査を終了した西半を除き、実施した。

4月8日午後に資材を搬入し、調査体制を整えた。翌日より表土除去作業など本格的な調査を開始した。調査区全面の表土除去および遺構検出を終えた5月18日に航空写真を撮影した。それ以降は、記録をとりながら遺構の掘削作業を進めた。

遺跡の全体像が把握できた6月19日には、現地説明会を実施した。晴天にも恵まれ、市内はもとより県内外からも多くの参加があった。この説明会の参加者は90人であった。

発掘調査中、周辺水田地帯のため、用水路の保護や確認、調査区内およびその周辺に対して、近隣住民や作業従事者の安全を確保するための安全対策も適宜実施した。

6月24日には、国土交通省岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会生涯学習文化課による終了確認を現地で受けた。この中で、第1次調査区と第2次調査区の間を貫通している生活道路（市道日影新田向線）については、掘立柱建物が連続している可能性はあるものの道路工事および水路工事によって遺構は失われている可能性が高いとして、工事の際に県教委で立会を行うこととした。

6月3日、遺構の掘削作業および記録作業を終え、撤収をおこなった。その後、7月1・2日両日に、調査区の安全と周辺の水田や水路等の保全のため重機による簡便な埋め戻し作業をおこなった。この埋め戻し作業をもって調査区を岩手河川国道事務所に引き渡した。



整理作業は、平成22年11月1日より埋蔵文化財センター内で行い、平成23年3月31日にすべての作業を終えた。また、この間に本書第2次調査分の執筆作業と第1次との合冊に係る編集作業も行っている。

(福島)

II 立地と環境

1 遺跡の位置

向Ⅲ遺跡第1次調査区は、岩手県遠野市綾織町下綾織第31地割20-1ほか、第2次調査区は下綾織第31地割102地内に所在する。遠野市は、岩手県の北上高地中央部よりやや南に位置する。ここは、早池峰山を中心とする北上高地の山塊が連なり、遠野市内東から西に向かって猿ヶ石川が流れる。遠野市の人口は、平成20年10月時点において、30,225人、市域面積825.62km²である。人口密度は344人/km²で、15歳以上の産業別就業者数は、第一次産業が3,771人、第二次産業が4,680人、第三次産業が7,618人である。平成の大合併により、旧遠野市は宮守村と平成17年10月に合併が行われ、これにより誕生した新遠野市は、北は宮古市、西を花巻市（東和町・大迫町）と接し、東の釜石市や上閉伊郡大槌町、南の気仙郡住田町や奥州市江刺区の市町村と境を接することとなった。

遠野市街中心部は、盆地の中であり、四方を険しい峠によって囲まれ、地形的に遮断されている。しかしながら、古くから陸上交通の要衝として、沿岸部と内陸部を結ぶ東西街道の重要拠点であることは、近世に宿場町として栄えたことから想像ができる。近世の遠野は、八戸より移封された遠野南部家一万三千石の城下町であり、現在でも地名・地割を多く残している。遠野市の主要産業は、農業・林業・畜産業であり、近年、特産品として、国内ビール用のホップ生産や、競技用馬としての馬産が行われ、全国でも有数の産地となっている。また、第三次産業である観光の分野においても、観光資源である柳田国男の「遠野物語」の発祥地として、「民話のふるさと」というコピーとともに全国的に有名な地域であり、「日本の原風景」を求め、全国各地から観光客が多く訪れている。特に、2010年は、「遠野物語」発刊100周年にあたり、市内各地で様々なイベントが盛んに催された。

今回調査をおこなった向Ⅲ遺跡は、JR釜石線遠野駅を中心とする市街地より西へ約6km、JR釜石線いわて二日町より猿ヶ石川を挟んで約1.5km、南に位置する。現況は、猿ヶ石川の南岸、北向きの舌状に張り出した緩斜面に造成された水田として土地利用されており、遺跡周辺には、民家が散在している。

2 地理的環境

岩手県は、西側から奥羽山脈、北上川流域の北上盆地、東側の北上高地、リアス式海岸として有名な三陸海岸を有する沿岸地域となっている。遠野市は、先述の通り、北上高地の中央部にあり、比較的標高の高い盆地になっており、寒暖の差が激しく、生活環境としては厳しい地域である。

北上高地は紡錘形の山地帯を形成し、南北に広がる。山系の最高峰は、標高1,917mの早池峰山で、東西に1,400-1,800m級の山々を従え、連峰を形成している。早池峰山の南方には標高1,645mの薬師岳が位置し、起伏の激しい地域がみられる。遠野盆地は、この薬師岳を源流にもつ猿ヶ石川や早瀬川などによって開析された谷底平野である。この地帯は、北上山系の花崗岩分布域となっている。

遺跡の立地する綾織地区は、猿ヶ石川の谷底平野と、それを取り囲む中起伏山地からなる。また、綾織地区北部では、大起伏地もみられる。綾織町下綾織は、猿ヶ石川の南岸に位置し、北岸に位置する上綾織地区より平野部は少なく、洪積段丘の張り出しが著しい。

向Ⅲ遺跡は、遺跡の東と西を、南から北へ猿ヶ石川に注ぐ沢地形である谷底平野に挟まれた中起伏

の砂礫段丘にあり、背面丘陵地よりの土砂堆積物を含んでいるものとみられる。

3 歴史的環境

向Ⅲ遺跡の所在する遠野市（旧遠野市として旧宮守村を含まない）では、縄文時代～近現代に至る数多くの遺跡が確認されている。確認されている遺跡について、時代順に記述していく。

縄文時代早期から前期の遺跡では、早期の代表的な遺跡として九重沢遺跡がある。早期前葉から前期前葉にかけての遺構・遺物が調査によって確認され、特に尖底土器、貝殻・沈線文土器、表裏縄文土器などが出土している。また、寒風Ⅰ遺跡でも早期から前期の遺構・遺物が確認されている。

縄文時代前期になると確認できる遺構・遺物の数が増加する。向Ⅲ遺跡の東約2kmに位置する綾織新田遺跡は、縄文時代前期前葉から中葉を中心とした集落遺跡であることが発掘調査によって明らかになった。この綾織新田遺跡の集落は、大型竪穴住居群が、規則的に配置された状況が認められ、現在、国指定遺跡（平成14年12月19日指定）として、保存されている。

縄文時代中期では、複式炉を有する竪穴住居が集落として検出された張山遺跡が有名である。また、今回の向Ⅲ遺跡と同じ事業で調査された新田Ⅱ遺跡では中期の環状集落がみられた。

縄文時代後期では、竪穴住居や掘立柱建物など検出された甲子遺跡があげられる。

奈良・平安時代の遺跡としては、高瀬Ⅰ遺跡・高瀬Ⅱ遺跡や、蓬田遺跡などがある。高瀬Ⅰ遺跡・高瀬Ⅱ遺跡では、竪穴住居のほか掘立柱建物が確認されている。竪穴住居からは墨書土器が出土しており、その中には「物部」や「地子稲不得」と解釈される文字も含まれる。また、集落に接して、円形の周溝をともなう墳墓も確認されている。この遺跡の集落はこの地域の拠点集落である。

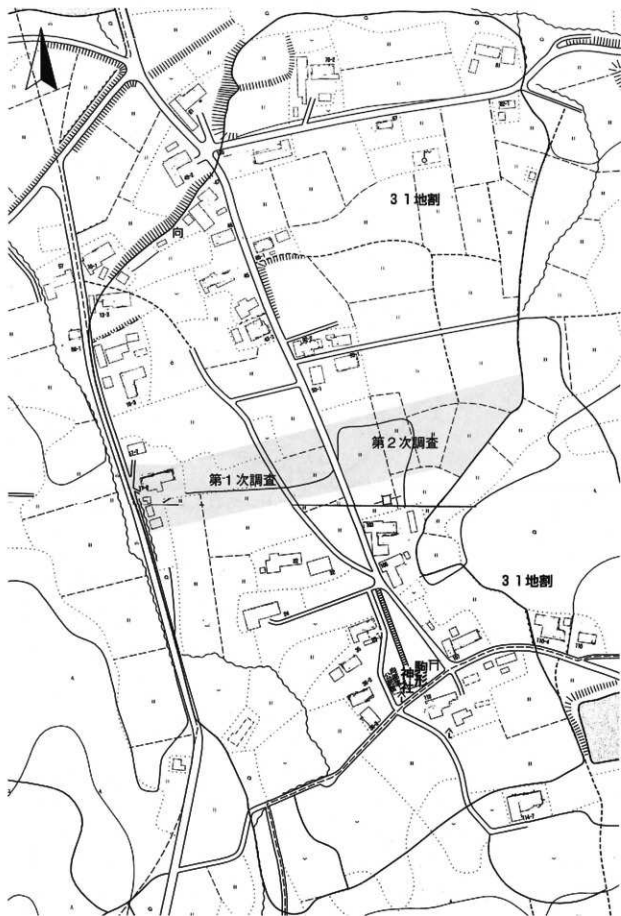
中世では、篠館跡で、大小様々な曲輪や切岸、土塁、堅堀など山城の縄張りを構成する遺構が検出されている。出土物には中国産陶磁器や武器・武具類がみられる。

近世では、甲子遺跡において近世墓が12基まとまってみつかっており、これらからは、様々な副葬品をともない、人骨も出土している。また、向Ⅱ遺跡では掘立柱建物を有する屋敷跡と20基以上の近世墓が調査された。

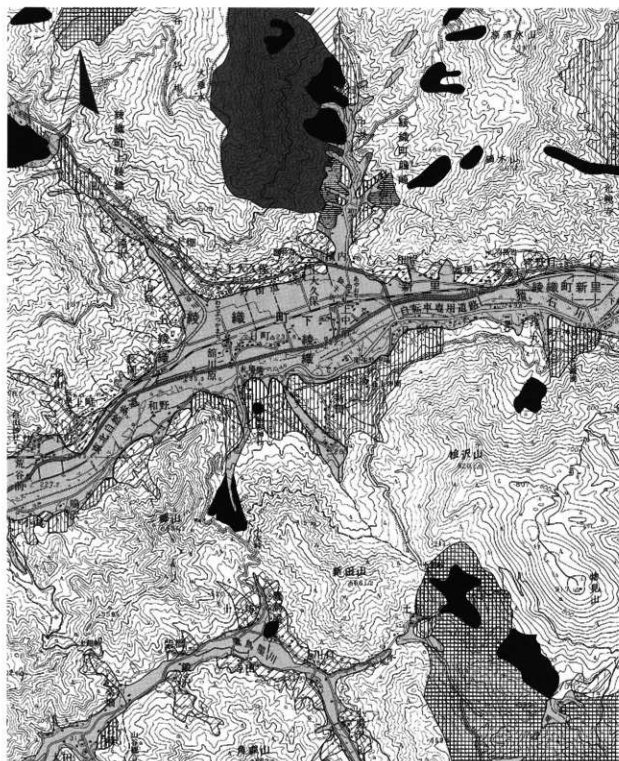
（福島）



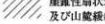
引用・参考文献

- ・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発刊調査報告書
- 1982 岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第43集『寒風遺跡発掘調査報告書』
- 1992 岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第155集『高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 2000 岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第353集『篠館跡発掘調査報告書』
- 2004 岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第435集『九重沢遺跡発掘調査報告書』
- 2010 岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第549集『向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 2011 岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第572集『新田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- ・遠野市教育委員会発刊調査報告書
- 1991 遠野市埋蔵文化財調査報告書第3集『蓬田遺跡』
- 1991 遠野市埋蔵文化財調査報告書第3集『高瀬Ⅱ遺跡』
- 1997 遠野市埋蔵文化財調査報告書第10集『寒風Ⅰ遺跡』
- 1998 遠野市埋蔵文化財調査報告書第11集『甲子遺跡』
- 2001 遠野市埋蔵文化財調査報告書第12集『向Ⅱ・向Ⅲ・深沢野・新田Ⅱ・間木野遺跡』
- 遠野市計画道路埋蔵文化財試掘調査委託事業報告 —
- 2002 遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集『新田Ⅱ遺跡』

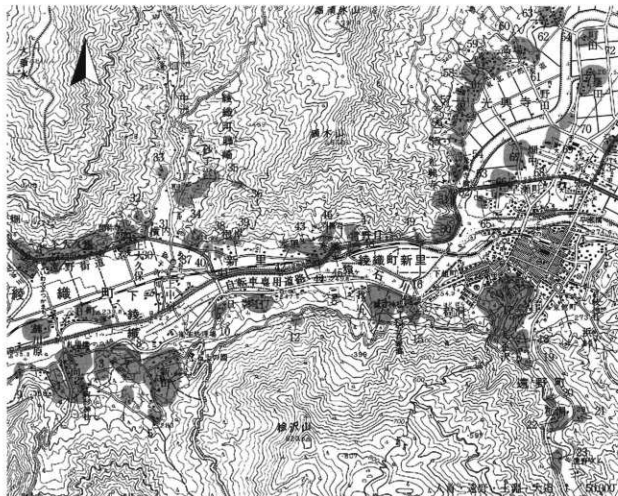


第2図 遺跡の立地



- | | | |
|---|---|---|
|  |  |  |
| 大起伏山地 | 中起伏山地 | 小起伏山地 |
|  |  |  |
| 山麓地及び他の緩斜面 | 砂礫段丘 | 谷底平野 |
|  |  |  |
| 扇状地 | 層状性扇状地
及び山麓緩斜面 | 扇状地及び麓斜面
他の緩斜面部 |
|  | | |
| 向II遺跡 | | |

第3図 周辺の地形



第4回 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代
1	向Ⅱ	散布地	縄文・古代・近世
2	向Ⅲ	散布地	
3	深沢野Ⅰ	集落跡	縄文
4	深沢野Ⅲ	散布地	
5	深沢野Ⅱ	散布地	
6	新田	散布地	縄文
7	新田Ⅱ	散布地	縄文・平安
8	柳四王元懸敷	集落跡	平安
9	向	散布地	縄文
10	熊野沢	散布地	
11	日影	散布地	
12	西風館	城館跡	中世
13	新里岡木野	散布地	縄文・古代
14	新里新渡	散布地	縄文
15	新里愛宕夷	集落跡	縄文
16	新里五層夜場	散布地	縄文
17	馬倉城	城館跡	中世～近世
18	九重沢Ⅱ	散布地	
19	九重沢	散布地	縄文
20	前川	散布地	縄文
21	前川	散布地	縄文
22	夫婦石輪高野	集落跡	縄文
23	ノ川	散布地	縄文
24	谷内(上野)前	城館跡	中世
25	浜子塚	散布地	縄文

No.	遺跡名	種別	時代
26	田中	散布地	縄文
27	大久保Ⅲ	散布地	古代
28	大久保Ⅱ	散布地	古代
29	大久保	散布地	縄文・平安
30	横内Ⅲ	散布地	縄文・古代
31	横内Ⅱ	散布地	縄文
32	横内Ⅰ	散布地	縄文
33	砂子沢Ⅰ	散布地	縄文
34	砂子沢Ⅱ	散布地	縄文
35	聖	散形跡	古代 中世
36	ミササギ観音岩	洞穴	縄文
37	西門館(ミササギ館)	城館	中世
38	米迫Ⅲ	散布地	古代
39	米迫Ⅱ	散布地	古代
40	米迫Ⅰ	散布地	古代
41	米迫Ⅳ	散布地	古代
42	寒風Ⅱ	散布地	縄文
43	寒風Ⅲ	散布地	縄文
44	寒風Ⅰ	散布地	縄文
45	寒風Ⅳ	散布地	縄文
46	寒風Ⅴ	散布地	縄文
47	宮野Ⅰ	散布地	縄文
48	宮野Ⅱ	散布地	縄文
49	上野野目	散形跡	古代・近世
50	角舟館	城館	中世

No.	遺跡名	種別	時代
51	光興寺館	城館跡	中世
52	天神Ⅲ	散布地	縄文
53	天神Ⅱ	散布地	縄文
54	天神Ⅳ	散布地	縄文
55	天神Ⅰ	散布地	縄文
56	金ヶ沢Ⅱ	集落跡	縄文
57	金ヶ沢Ⅰ	集落跡	縄文
58	藤田城(藤堂館)	城館跡	中世
59	上ノ山	散布地	縄文・古代
60	高地	散布地	古代
61	米館	城館跡	
62	宮代Ⅰ	散布地	縄文
63	宮代Ⅱ	散布地	縄文
64	宮代Ⅲ	散布地	縄文
65	下藤Ⅱ	散布地	縄文
66	下藤Ⅰ	散布地	
67	大櫛	集落跡	縄文・古代
68	畑中	散布地	古代
69	藤原Ⅱ	散布地	古代
70	藤原Ⅰ	散布地	古代
71	湯田	散布地	縄文・奈良・中世
72	明田	散布地	
73	横ヶ崎	集落跡	縄文・古代

Ⅲ 調査方法

1 発掘調査の方法

調査区に隣接する南側の上段水田面と調査区を挟んで下段水田面は、調査中も作付けが行われており、調査区内を縦断するように水路が流れている。その水路を確保しつつ、流れが止まることのないよう手当てを行いながら調査を進めた。その後、地形や土地利用の違いによって、調査区を小区画に分け、その区画ごとに、西側から順次重機と人力でトレンチ掘削を行い、表土や盛土の層厚や、遺構の広がりについて確認した。

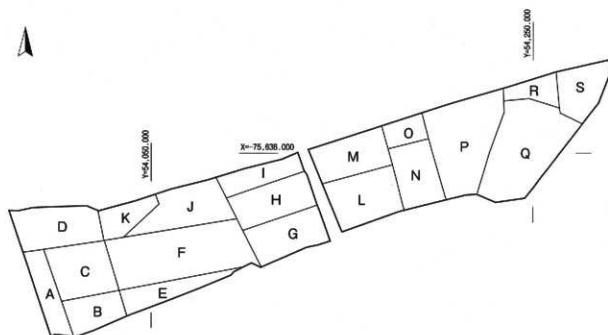
調査区内は、現況田面の区画を踏襲してA～S区までの区画名称を付与して調査した（第5図参照）。遺跡中央を縦断する市道を挟んで西側に位置する第1次調査区はA～K区が該当し、東側に位置する第2次調査区はL～S区に細分して調査を行った。

トレンチ掘削により遺構が検出されず、水田造成で切り土されているブロックについては、トレンチ掘削の間隔を狭め、遺構がないことを確認した。掘削によって生じた残土は、この遺構の無い区画に仮置きし、調査終了後埋め戻しを行った。

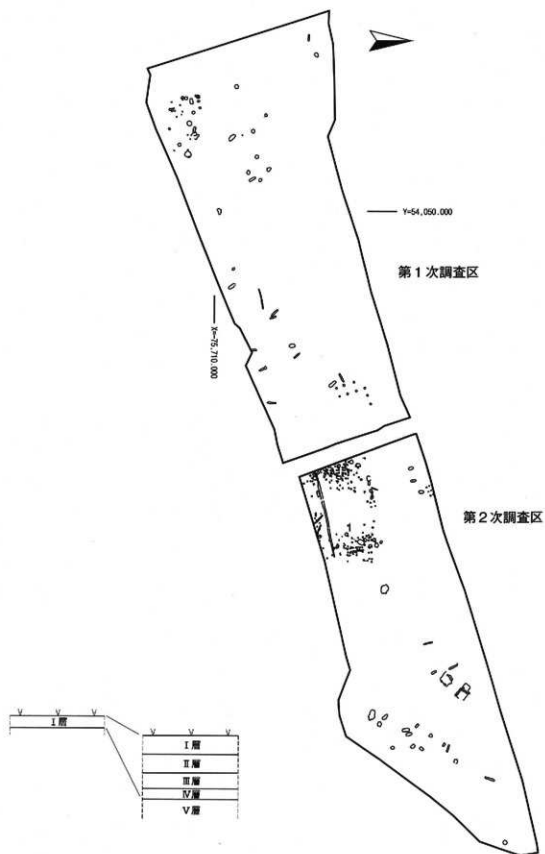
遺構が確認された区画では、重機による全面表土除去後、人力による遺構検出作業を行った。検出した遺構の掘削は、主に2分法と4分法によって行い、遺物の取り上げについては、層位ごとに分けるよう努めた。

調査に際して、遺跡名および調査年次は略号（MKⅢ-09・MKⅢ-10）を用い、調査で記録したもののすべてが、この略号によって管理されている。

遺構実測は、電子平板による測量を行い、遺構平面図・断面図を作成した。また、遺構の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラによる撮影を基本とし、6×7cm判モノクロによる撮影を補助的に用いた。撮影に際しては、撮影カードの記入・写し込みを行い、撮影写真の整理に活用した。



第5図 第1次・第2次調査区割



第6図 全体平面・基本層序

2 整理作業の方法

発掘調査終了後の整理作業は、当センターの室内で行った。発掘調査時に点検を経た遺構の実測データを基に作図し、図版としての体裁を整えた。また、遺構発掘時に撮影した写真は、デジタル写真データは台帳を作成し、データ毎フォルダ整理を行った。また、ネガフィルムについては、それぞれアルバム整理を行った。本書に掲載する遺構写真は選択した後、デジタル写真加工により、図版用版下を作成した。

洗浄および注記を行った遺物は、接合作業を行った。これらの内、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影を行った。選択基準は、実測可能な残存状況の良いもの原則とし、土器類の破片については、特徴から時期や土器型式が分かるもの、口縁部のあるものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での作業を基本とした。原寸で行った実測図は、縮尺を整えトレースを行い、図版用の版下を作成した。また、縄文土器表面や銭貨等は湿拓により拓本とした。遺物の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いて当センター内で行い、撮影したデータは編集し、写真図版として本書に掲載した。

すべての処理が終了した遺物は、本書掲載遺物と、不掲載遺物とに分け、所定の場所へ収納した。本書の原稿執筆は、各担当者が分担して行い、表現方法や名称については、担当者で協議を行い全体の中で可能な限り統一を図った。

3 記述および記載方法

(1) 遺 構

遺構名は略号を用いて表現した。遺構略号は遺構種別によって分け、遺構種別ごと検出順に遺構番号を付した。遺構番号は第1次調査では01から、第2次調査では201から降順として付与し、調査年次を区別した。遺構略号は以下の通りである。

SI・・・堅穴建物および堅穴住居、SB・・・掘立柱建物、SD・・・溝、SF・・・焼土、SK・・・土坑、SP・・・柱穴（掘立柱建物および単独の柱穴）、SX・・・性格不明遺構。

上記の遺構名以外に、大型の遺構に付属する施設についても略号を用いた。これら略号については以下の通りである。

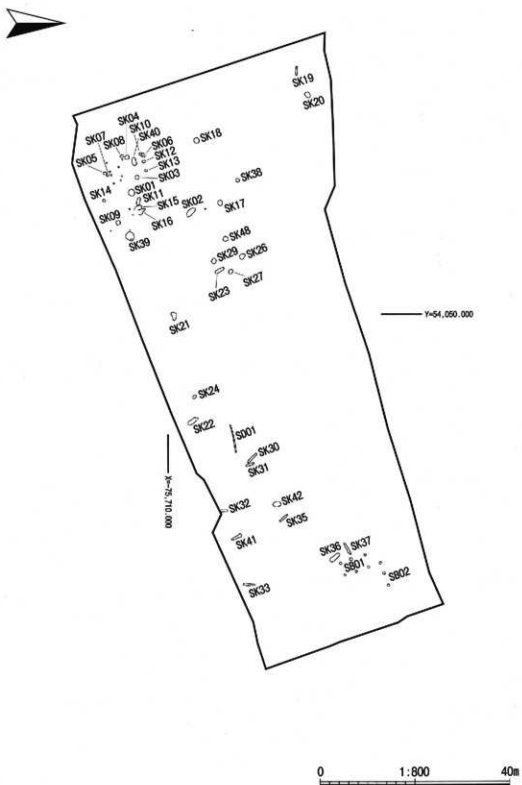
SI00-FO・・・堅穴住居内のカマド、SI00-PO・・・堅穴住居内の柱穴。

遺構に関する記述については、平面規模を「m」単位で、深さを「cm」単位でそれぞれ表現した。遺構平面図における平面位置を示す方法として、グリッドは設けず、国土座標による表記を行った。平面図上に付した座標の表記は、国土座標X系のもので、「X」・「Y」それぞれの数値を示している。遺構断面図に示した基準高は、すべて海拔標高値である。断面図上では「m」単位で付記したが、この単位については省略した。

(2) 遺 物

遺物の掲載番号は、第1・2次を通じて通し番号とし、本文・観察表・実測図・写真図版どれも同一番号によって記載した。また、掲載した遺物の一覧は表によって記載している。

遺物実測図は、土器・礫石器を1/3、陶磁器・剥片石器・石製品を1/2、銭貨は原寸を基準として掲載した。写真図版に掲載した遺物の縮尺は不定だが、種別ごとの縮尺はおおむね統一して掲載した。



第7図 第1次調査遺構配置

IV 第 1 次 調 査

1 調査概要と基本層序

調査区は、南から北に張り出す段丘上にあり、南北に流れる沢の谷筋から谷筋までを東西に、遺跡の範囲を貫く形で伸びている。標高は約250mで、現況は、緩斜面を切り盛りして造られた水田である。西端は、谷による急斜面にあたり、道路による削平も加わって、遺構はみられない。また、調査区北西には、現代の住居跡による、攪乱が見られる。すぐ南側には、高圧電線が通っており、調査区内の南西は、以前の鉄塔による支脚跡や、溝跡によって攪乱されている。

調査区の北側は、標高が一段低くなっているが、水田の造成により、従来の地形が大きく改変され、地山部分まで、大きく削平されている部分が多く、遺構は検出されなかった。

表土除去後に旧地形を見ると、調査区の中央にも、南北に浅い緩やかな沢跡のような地形がみられ、雨天などには、湧水し、水が溜まる状況がみられた。

調査区全体にわたり、遺物が希薄で、遺構の時代を決定する材料に乏しいが、基本層序や、埋土の様相から、東側では、比較的新しい時代の掘立柱建物跡が、西側では、縄文時代が中心と思われる比較的古い時代の土坑や陥し穴などが検出された。

基本層序は、大別すると、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が水田造成時の盛土、Ⅲ層が黒色土層、Ⅳ層が暗褐色土・漸移層、Ⅴ層が地山・褐色ローム層である。詳細は、以下の通りである。

Ⅰ層	表土	7.5YR3/2	粘りなし	しまり疎	シルト(水田)
Ⅱ層	盛土	7.5YR3/2	粘りあり	しまり密	クレイ (粘土ブロックを多量に含む)
Ⅲ層	黒色土	10YR2/2	粘りなし	しまり中	シルト
Ⅳ層	暗褐色土	10YR3/3	粘りなし	しまり中	シルト
Ⅴ層	褐色土	7.5YR5/6	粘りあり	しまり密	クレイ

Ⅰ・Ⅱ層は、現代の造成・耕作に伴うもので、薄いところで50cm、厚いところで2mを超える。Ⅲ層は、シルトを基調とする黒ボク土の自然堆積層で、基本的に遺物を含まない。Ⅳ層では、縄文土器や石器が僅かにみられる。

2 検 出 遺 構

検出遺構および出土遺物は、調査区内で最も標高の高い南西の区画でやや集中してみられた。

それ以外の地点では、土坑や陥し穴などが散在してみられた。検出された遺構は、焼土遺構、土坑、フラスコ状土坑、陥し穴、溝跡、柱穴状土坑、掘立柱建物跡である。出土した遺物は、縄文土器片・石鏃・石匙等の剥片石器、礫石器、陶磁器類のほか、鉄製品や銭貨である。

なお、土坑の内、SK25・28・34は欠番となっている。

(1) 焼土遺構

SF01焼土 (第8図、写真図版2)

〔位置〕B区南東に位置する。

〔検出状況〕V層上面、褐色土地山面で検出した。

〔形態・規模〕長く不整形な平面で、長軸0.41m、短軸0.18m、厚さ32.1cmである。

〔埋土〕断面より2地点での焼成や現地性ではない可能性もある。

SF02焼土 (第8図、写真図版2)

〔位置〕B区中央北に位置し、SK11と重複している。

〔検出状況〕V層上面、褐色土地山面で検出した。

〔形態・規模〕長楕円形基調だが、不整形である。長軸0.49m、短軸0.14m、厚さ18.0cmである。

〔埋土〕焼土の下位に暗褐色土層がみられる。

〔重複関係〕SK11との重複関係にあるが、焼土下層の埋土や、断面の様相から、土坑より新しいと思われる。また、現地性ではない可能性も否定できない。

SF03焼土 (第8図、写真図版2)

〔位置〕B区、鉄塔跡(北東)にかかる。

〔検出状況〕褐色粘土地山層、鉄塔跡に攪乱されており残部を検出した。

〔形態・規模〕平面楕円形基調である。長軸0.31m、短軸0.22m、厚さ6.0cmである。

〔埋土〕一部暗褐色土の上に位置している部分がみられ、多少攪乱などから動いている可能性がある。

SF04焼土 (第8図、写真図版2)

〔位置〕B区東に位置する。

〔検出状況〕褐色地山層の下から検出した。

〔形態・規模〕平面楕円形である。長軸0.372m、短軸0.31m、厚さ6.4cmである。

〔埋土〕水田造成による切土の面にあり、現地性の可能性は高いが時期については不明である。

(2) 土坑

SK01土坑 (第9図、写真図版3)

〔位置〕B区北側、ほぼ中央に位置する。

〔検出状況〕埋土中央黒色土の円形プランで明確に検出した。

〔形態・規模〕平面円形、直径1.69m、深さ53.5cmである。

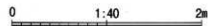
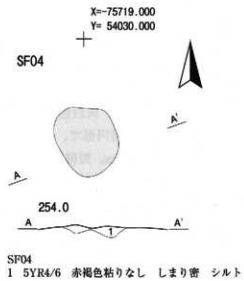
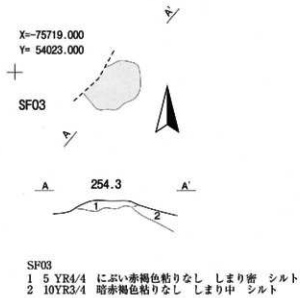
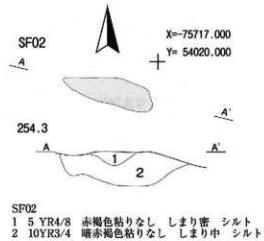
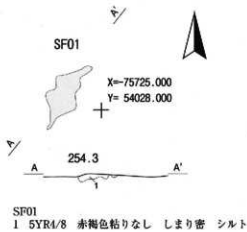
〔埋土〕礫(10cm大)を中央部の下層に数個含む。

〔壁面・底面〕円筒状で平底である。

SK02土坑 (第9図、写真図版3)

〔位置〕C区南東に位置する。

〔検出状況〕明確な黒色土楕円形プランで検出した。形状から陥し穴であるとみられる。



第8図 焼土遺構 (SF01-04)

〔形態・規模〕平面長楕円形を呈し、長軸2.98m、短軸1.3m、深さ64.0cmである。

〔埋土〕褐色土ブロックを含む。

〔壁面・底面〕尖底、湾曲、すり鉢状の底である。

〔出土遺物〕土器片が出土した。

SK03土坑（第9図、写真図版3）

〔位置〕B区北西に位置する。

〔検出状況〕暗褐色土（IV層下位）で黒色土円形プランとして検出した。

〔形態・規模〕円形で平底、浅皿状の土坑である。規模は直径1.05m、深さ18.8cmである。

〔埋土〕黒色土に粘土ブロックを含む。

〔壁面・底面〕垂直に立ち上がる壁、締った床面である。

〔出土遺物〕縄文土器深鉢の底部片、口縁部片（2個体）が出土した。

SK04土坑（第9図、写真図版3）

〔位置〕B区西端に位置する。

〔検出状況〕褐色土層（V層上位）で中央粘土塊にドーナツ状の黒色土を検出した。

〔形態・規模〕平面円形で平底、浅鉢形の土坑である。規模は直径1.17m、深さ21.6cmである。

〔埋土〕埋土中央6～7割に粘土塊が占め、黒色土には炭化粒がわずかにみられる。

〔壁面・底面〕床面に木の根の攪乱がみられる。

〔出土遺物〕土器片が1点出土した。

SK05土坑（第10図、写真図版4）

〔位置〕B区南西に位置する。

〔検出状況〕褐色土層、灰白色の楕円形プランを検出した。

〔形態・規模〕平面楕円形で、フラスコ状の土坑である。規模は開口部の長軸0.93m、短軸0.74mである。底面の長軸1.59m、短軸1.28m、深さは59.4cmである。

〔埋土〕上層に灰白色の砂質土が多く見られ、細かな層状に堆積しており、下層には石を含む。

〔重複関係〕SK07と重複しており、これに切られている。

〔壁面・底面〕床面中央が凸状に湾曲し、中心から非対象のフラスコ状になる。

SK06土坑（第10図、写真図版4）

〔位置〕B区北西に位置する。

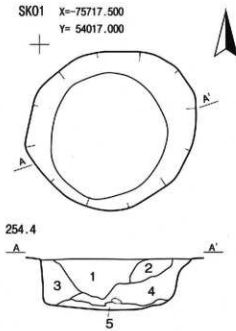
〔検出状況〕中央に粘土ブロックを含む黒色土プランを検出した。

〔形態・規模〕平面円形基調と思われるが、北側削平されており全体形は不明である。規模は直径1.17m、深さ25.8cmである。

〔埋土〕黒色土に褐色粘土ブロックが混在し、中央・上層は黒色土の割合が多い。

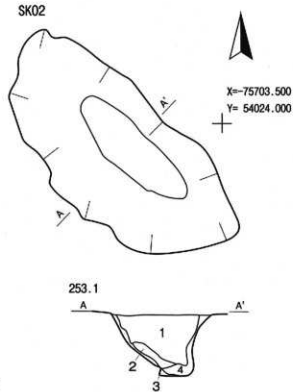
〔壁面・底面〕底面に焼土ブロックや礫がみられる。円形・平底を呈する土坑である。

〔出土遺物〕磨消のある縄文土器片、剥片石器が出土した。また、周辺からは時期差のある土器片が混在して出土しており、出土した遺物と遺構との関連は不明である。



SK01

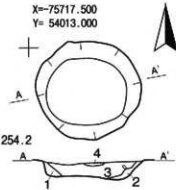
- 1 10YR17/1 黒色粘りなし しまり中 シルト
- 2 10YR 3/4 暗褐色粘りなし しまりやや密 サンド
- 3 10YR 3/3 暗褐色粘りややあり しまり密 クレイ
炭酸粒1~2mmを1%含む
- 4 10YR 3/3 暗褐色粘りなし しまり密
- 5 10YR 3/4 暗褐色粘りややあり しまり密 クレイ
炭化ブロック1~2cmをわずかに含む



SK02

- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまりやや疎 シルト
暗褐色のブロックを20%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまりやや疎 シルト
褐色のブロックを30%含む
- 3 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
- 4 10YR4/6 褐色粘りあり しまり密 クレイ

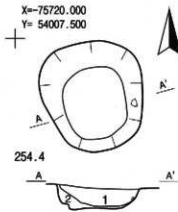
SK03



SK03

- 1 10YR4/6 褐色粘りあり しまり密 クレイ
黒色土ブロックを含む
- 2 10YR4/1 褐灰色粘りあり しまり密 クレイ
黒色土粒をわずかに含む
- 3 10YR3/2 黒褐色粘りなし しまり疎 シルト
粘土粒・炭化粒を10~20%含む
- 4 10YR4/6 褐色粘りあり しまり密 クレイ

SK04



SK04

- 1 7.5YR5/8 明褐色粘りあり しまり極密 クレイ
粘土ブロック5~10mmを20%含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロック2~3cm・炭化粒をわずかに含む
- 3 7.5YR4/4 褐色粘りややあり しまり密 クレイ
黒色土粒を30%含む

0 1:40 2m

第9図 土坑 (SK01~04)

SK07土坑（第10図、写真図版4）

〔位置〕 B区南西に位置する。

〔検出状況〕 SK05の調査中に検出した。

〔形態・規模〕 平面長楕円形で、長軸1.32m、短軸0.61m、深さ83.6cmである。

〔埋土〕 礫を僅かに含む黒褐色土を主体とする。

〔重複関係〕 SK05と重複し、埋土の相異、検出面の様相、SK05の調査所見からSK05に切られている可能性が高い。

〔壁面・底面〕 尖底で、傾斜のある斜面から陥し穴状にも見える。

SK08土坑（第10図、写真図版5）

〔位置〕 B区西端、SK04の南西に位置する。

〔検出状況〕 暗褐色土に黒色土が混在する不整形プランで検出した。

〔形態・規模〕 平面楕円形基調で、長軸0.91m、短軸0.74m、深さ13.5cmである。

〔埋土〕 暗褐色土に黒色土が混在するが、基本的に単層の堆積である。

〔壁面・底面〕 平底で浅い椀形である。

SK09土坑（第11図、写真図版5）

〔位置〕 B区南東、鉄塔跡攪乱の南西に位置する。

〔検出状況〕 暗褐色土、不整形プランで検出した。

〔形態・規模〕 平面隅丸方形～長方形で、長軸1.14m、短軸1.08m、最深部の深さは28.0cmである。

〔埋土〕 中央部に黒色土、周辺部（壁・底付近）に暗褐色土がみられる。

〔壁面・底面〕 底面中央部には窪みが認められる。

SK10土坑（第11図、写真図版5）

〔位置〕 B区北西角、SK06の北に位置する。

〔検出状況〕 暗褐色土、不整形プランで検出した。

〔形態・規模〕 平面円形で浅い小規模の土坑である。残存する部分の直径は0.75mで深さ21.2cmである。

〔埋土〕 上層に黒色土が混在する層、下層に暗褐色土の2層に堆積している。

〔重複関係〕 SK06と重複関係にあり、これに切られる。

〔壁面・底面〕 丸底である。

〔出土遺物〕 土器片が2片出土した。

SK11土坑（第11図、写真図版5）

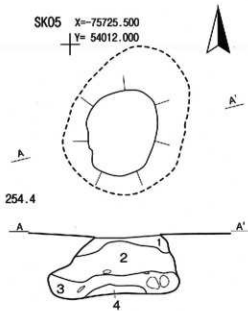
〔位置〕 B区北に位置する。

〔検出状況〕 褐色地山面で、楕円形黒色土プランで検出した。

〔形態・規模〕 検出面からは浅く、深さは12.0cmである。一方、平面は長楕円形で長軸2.07m、短軸0.82mである。

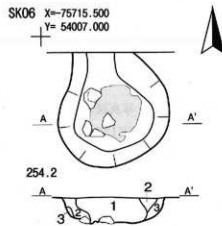
〔埋土〕 褐色粘土ブロックを含む黒色土の単層である。

〔重複関係〕 土坑の北西上端から壁面にかけて、SF02がみられる。埋土の関係などから、これに



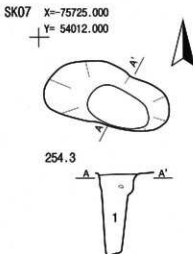
SK05

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘りなし しまり密 シルト
灰白色の粒を僅かに含む
- 2 10YR5/4 にふい黄褐色粘りなし しまり中 サンド
小石5~10cmを下位に僅かに含む
- 3 7.5YR4/4 褐色粘りややあり しまり中 シルト
炭化粒1~5mmを僅かに含む
- 4 10YR5/6 黄褐色粘りなし しまり密 クレイ



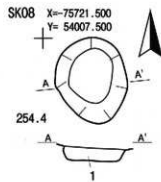
SK06

- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり疎 シルト
炭化粒・焼土粒を僅かに含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐色粘りややあり しまり中 シルト
- 3 7.5YR4/4 褐色粘りあり しまり密 クレイ



SK07

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘りなし しまり密 シルト
礫を僅かに含む



SK08

- 1 10YR2/3 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロック・粒を多量に含む

0 1:40 2m

切られていると思われる。

〔壁面・底面〕長楕円形の平面からは陥し穴状にも見えるが、広くゆるやかな丸底や、現況極めて浅いことから、用途は不明である。

〔出土遺物〕剥片石器が出土した。

SK12土坑（第11図、写真図版6）

〔位置〕B区北西、SK13の西に位置する。

〔検出状況〕暗褐色土下層検出面で、黒色土不整形プランで検出した。

〔形態・規模〕平面楕円形で、長軸0.95m、短軸0.67m、深さ25.0cmである。

〔埋土〕褐色粘土ブロックを含む黒色土の単層である。

〔壁面・底面〕浅い碗形をした土坑である。

SK13土坑（第12図、写真図版6）

〔位置〕B区北西、SK12の東に位置する。

〔検出状況〕暗褐色土下層検出面において黒色土不整形プランで検出した。

〔形態・規模〕平面楕円形で、長軸0.73m、短軸0.53mである。深さは最深部で29.3cmである。

〔埋土〕褐色粘土粒を含む黒褐色土の単層である。

〔壁面・底面〕垂直に切り立った壁面と、しっかりと締った平底である。

〔出土遺物〕埋土上位より土器片が1点出土した。

SK14土坑（第12図、写真図版6）

〔位置〕B区南トレンチ（攪乱）の北に位置する。

〔検出状況〕水田造成による切土（褐色粘土層の下）面にて、暗褐色上楕円形プランで検出した。

〔形態・規模〕平面楕円形で、砂礫層までの掘り込みがみられる。開口部の長軸0.79m、短軸0.61mであり、底面の長軸0.92mと開口部よりも底面が広がっている。深さは中心部で74.9cmを測る。

〔埋土〕層状に堆積するが、褐色粘土層を埋め戻したような暗褐色土が基調である。

〔壁面・底面〕壁面中央に石があり、緩やかに湾曲し、底面に広がりがみられる。平坦な底で、筒状に深く掘り込まれており、柱穴状にもみえる。

SK15土坑（第12図、写真図版6）

〔位置〕B区北東に位置し、鉄塔跡（北東角）に攪乱されている。

〔検出状況〕褐色粘土ブロックが混在する不整形黒色土プランで検出した。鉄塔跡（攪乱）の壁面より断面にて遺構を確認した。

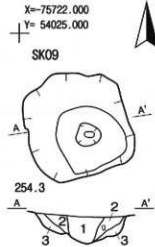
〔形態・規模〕不整な平面形態で、楕円形に近い。残存する長軸2.14m、短軸1.18m、深さ12.5cmである。

〔埋土〕中心に黒色土、壁や底付近では褐色粘土ブロックを多く含む。

〔重複関係〕SK16と接しており、埋土や出土遺物より、SK16より新しいと考えられる。

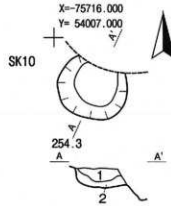
〔壁面・底面〕多少凹凸はみられるが平底で、壁面は垂直方向に立ちあがる。

〔出土遺物〕補修孔のある縄文土器片および剥片石器2点が出土した。



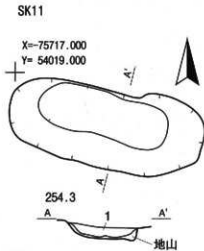
SK09

- 1 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり疎 シルト
粘土ブロックを僅かに含む
- 2 10YR4/6 褐色粘りなし しまり中 シルト
- 3 10YR5/6 黄褐色粘りあり しまり密 クレイ



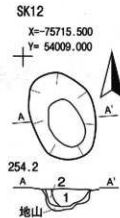
SK10

- 1 10YR3/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
炭化粒を僅かに含む
- 2 10YR4/4 褐色粘りややあり しまり密 クレイ



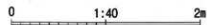
SK11

- 1 7.5YR2/2 黒褐色粘りなし しまり疎 シルト
粘土粒・炭化粒を僅かに含む



SK12

- 1 7.5YR3/2 黒褐色粘りなし しまり疎 シルト
炭化粒を僅かに含む
- 2 7.5YR4/4 褐色粘りあり しまり密 クレイ
黒色土ブロックを含む



第11図 土坑 (SK09~12)

SK16土坑（第12図、写真図版7）

〔位置〕 B区北東に位置し、鉄塔跡（北東角）に擾乱されている。

〔検出状況〕 黒褐色土と暗褐色土が混在する長く不整形なプランで検出した。

〔形態・規模〕 鉄塔跡に南半分が削平されているが、上端部は南北方向に長い楕円形で、下端部はそれと直交するように東西に長い楕円形を呈し、深く掘り込まれている。残存値であるが長軸1.96mであり、短軸はもっとも広がった箇所では1.52mである。深さは2.86cmを測るが、最深部はさらに深くなっている。

〔埋土〕 上位に黒色土のブロックがみられるが、基本的に暗褐色土の単層に思われる。

〔重複関係〕 SK15と接しており、埋土や出土遺物よりSK15より古い。

〔壁面・底面〕 楕円形の底部は尖底で、壁面は急傾斜で掘り込まれており、陥し穴状にみえる。

〔出土遺物〕 表裏に縄文のある土器片が下位より出土した。

SK17土坑（第13図、写真図版7）

〔位置〕 C区北東に位置する。

〔検出状況〕 水田造成で削平された褐色粘土層で、円形暗褐色円形プランで検出した。

〔形態・規模〕 円形の上端に対して、底面が長楕円形で、深く掘り込まれている。南北長1.261m、東西長1.47m、深さは66.2cmである。

〔埋土〕 暗褐色土の下位に黒色土がみられ、自然堆積ではない堆積をしている。

〔壁面・底面〕 底面の中央に凹部があり、急な深い掘り込みであることから陥し穴と思われる。

SK18土坑（第13図、写真図版7）

〔位置〕 C区北西に位置する。

〔検出状況〕 水田造成で削平された褐色粘土層で、円形暗褐色円形プランで検出した。

〔形態・規模〕 平面はほぼ円形で、直径1.36m、深さ73.8cmを測る。

〔埋土〕 黒色土を含む暗褐色土の単層である。

〔壁面・底面〕 底面狭く、湾曲しており、すり鉢状の形状をしている。

SK19土坑（第13図、写真図版7）

〔位置〕 D区西端に位置する。

〔検出状況〕 褐色粘土地山面で、黒色土の長楕円形プランで検出した。

〔形態・規模〕 平面は極端な長楕円形で、長軸2.49m、短軸0.50mである。深さは中心部で69.0cmを測る。

〔埋土〕 底付近に黒色土の層があり、不自然な堆積である。

〔重複関係〕 上端、検出面付近では、現代の住居跡の擾乱を多く受けている。

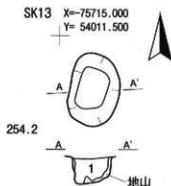
〔壁面・底面〕 狭く細長い底面およびほぼ垂直に立ち上がる壁面から陥し穴と思われる。

SK20土坑（第14図、写真図版8）

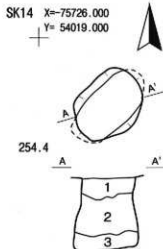
〔位置〕 D区東側に位置する。

〔検出状況〕 褐色粘土地山面で、黒色土円形プランで検出した。

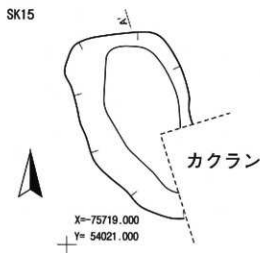
〔形態・規模〕 平面楕円形で、長軸1.68m、短軸1.25m、深さ77.0cmである。



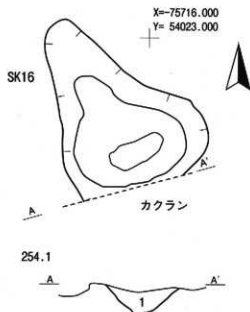
- SK13
1 7.5YR3/2 黒褐色粘りなし しまり疎 シルト
炭化粒を上位に僅かに含む 粘土粒を疎に含む



- SK14
1 10YR 3/4 暗褐色粘りなし しまり密 クレイ
2 7.5YR4/4 褐色粘りあり しまり無密 クレイ
3 7.5YR4/3 褐色粘りなし しまり密 シルト



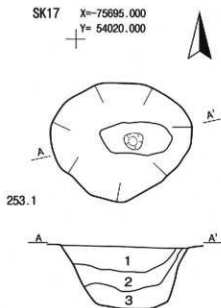
- SK15
1 10YR 2/2 黒褐色粘りなし しまり疎 シルト
炭化粒を僅かに含む
2 7.5YR3/2 黒褐色粘りややあり しまり中 シルト
3 10YR 3/4 暗褐色粘りなし しまり疎 シルト
粘土ブロックを多量に含む
4 7.5YR4/4 褐色粘りあり しまり密 クレイ



- SK16
1 7.5YR2/2 黒褐色粘りなし しまり密 シルト
粘土ブロックを僅かに含む

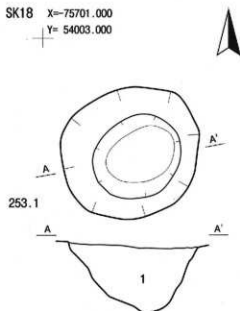


第12図 土坑 (SK13-16)



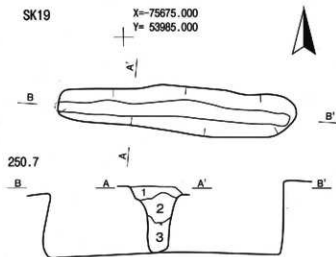
SK17

- 1 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロックを含む
2 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
粘上粒を僅かに含む
3 7.5YR4/4 褐色粘りあり しまり密 クレイ



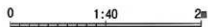
SK18

- 1 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
上位に黒色土・下位に粘土ブロックを含む



SK19

- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
2 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
3 7.5YR5/6 明褐色粘りあり しまり密 クレイ



第13図 土坑 (SK17~19)

〔埋土〕中心に黒色土、壁面や底面付近では黒色土と褐色粘土が層状に堆積している。

〔重複関係〕土坑の南側は、現代の住居跡の攪乱を受けている。

〔壁面・底面〕平底、筒状の壁、ピーカー状の土坑である。

SK21土坑（第14図、写真図版8）

〔位置〕E区西側、電柱の北に位置する。

〔検出状況〕黒色土、楕円形プランで検出した。

〔形態・規模〕弧状にやや湾曲した不整形楕円形を呈し、検出面からの掘り込みは浅い。長軸2.25m、短軸1.27m、深さ51.0cmである。

〔埋土〕上層は黒色土、下層は暗褐色土の2層である。

〔壁面・底面〕丸底で、緩やかな立ち上がりの壁面をもつ陥し穴状の土坑である。

SK22土坑（第14図、写真図版8）

〔位置〕E区東端、F区南境に接する。

〔検出状況〕黒色土、長楕円形プランで検出した。

〔形態・規模〕平面は極端な長楕円形で、断面形がY字状を呈している。長軸3.08m、短軸1.06m、深さ127.0cmを測る。

〔埋土〕上層に黒色土、下層に暗褐色土の2層で、自然堆積に見える。

〔壁面・底面〕狭い平底で、壁面は遺構底面から中位までは垂直に立ち上がる陥し穴である。

SK23土坑（第15図、写真図版8）

〔位置〕F区西側に位置する。

〔検出状況〕黒色土、長楕円形プランで検出した。

〔形態・規模〕平面長楕円形で、断面形V字状を呈する。長軸2.72m、短軸0.83m、深さ74.1cmを測る。

〔埋土〕上層に黒色土、下層に暗褐色土の2層からなる埋土である。

〔壁面・底面〕狭い底面で、壁面は急な傾斜で立ち上がる陥し穴である。

SK24土坑（第15図、写真図版9）

〔位置〕F区南境に位置する。

〔検出状況〕現代の水田用水路（攪乱）の下、暗褐色円形プランで検出した。

〔形態・規模〕平面楕円形で深く掘り込まれていることが判明した。長軸1.09m、短軸0.73m、深さ66.8cmを測る。

〔埋土〕基本的に暗褐色土の単層の埋土である。

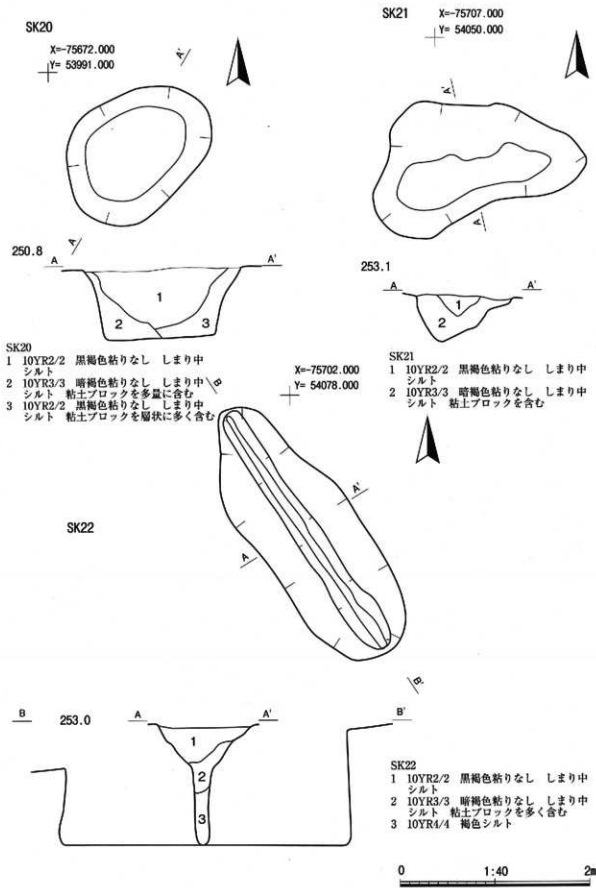
〔重複関係〕現水田用水路の攪乱で、遺構上端の形状に誤差がある。

〔壁面・底面〕平底で、ほぼ垂直に切り立った壁面をもつ土坑である。陥し穴の可能性も考えられる。

SK26土坑（第15図、写真図版9）

〔位置〕F区北西隅に位置する。

〔検出状況〕黒色土と褐色土混在の不整形プランで検出した。



第14図 土坑 (SK20~22)

[形態・規模] 平面楕円形基調で、長軸1.63m、短軸1.24m、深さ52.4cmである。

[埋土] 基本的に黒色土の単層だが、壁面付近で木の根や杭などの攪乱がみられる。

[壁面・底面] 狭い丸底で湧出して緩やかに立ち上がる浅鉢状の土坑である。

SK27土坑 (第15図、写真図版9)

[位置] F区北西に位置する。

[検出状況] 黒色土、円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面円～楕円形で、長軸1.30m、短軸1.06m、深さ26.5cmである。

[埋土] 黒色土の単層である。

[壁面・底面] 丸底で浅い碗形を呈する。

SK29土坑 (第16図、写真図版9)

[位置] F区西端に位置する。

[検出状況] 黒色土不整形プランで検出した。

[形態・規模] 不整形で、南北1.26m、東西1.54m、最深部の深さ39.4cmである。

[埋土] 黒色土と暗褐色土の2層からなる。

[壁面・底面] 杭(攪乱)もあり、床面、壁面とも凹凸がみられ不整形であるが、本来はすり鉢状の土坑であったと考えられる。

SK30土坑 (第16図、写真図版10)

[位置] F区東側、SK31西周辺に位置する。

[検出状況] 暗褐色土、長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面は極端な長楕円形で、断面形がV字状を呈する。長軸3.37m、短軸0.59m、深さ81.2cmを測る。

[埋土] 褐色土と暗褐色土が層状に堆積するが、自然堆積ではないと考えられる。

[壁面・底面] 狭い底面で、壁面は急な傾斜で立ち上がる。

SK31土坑 (第16図、写真図版10)

[位置] F区東側、SK30東周辺に位置する。

[検出状況] 暗褐色土、長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面は極端な長楕円形で、断面形がY字状を呈する陥し穴である。長軸2.42m、短軸0.54m、深さ65.2cmを測る。

[埋土] 褐色土と暗褐色土が層状に堆積する。自然堆積ではない。

[壁面・底面] 狭く細長い底面で、壁面は、垂直に立ち上がる。

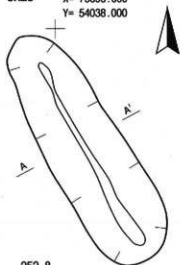
SK32土坑 (第16図、写真図版10)

[位置] F区南東隅に位置する。遺構南半は調査区外へ続く。

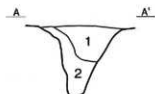
[検出状況] 暗褐色土、長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面は極端な長楕円形で、断面形がY字状を呈する陥し穴である。査区内で検出した長軸は1.72mである。短軸は0.62m、深さ93.6cmを測る。

SK23 X=-75695.000
Y= 54038.000



252.8

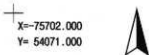


SK23

- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロックを僅かに含む
- 2 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
大きな粘土ブロックを多量に含む

SK24

X=-75702.000
Y= 54071.000



252.8

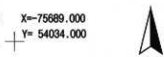


地山

SK24

- 1 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土粒を僅かに含む

SK26 X=-75689.000
Y= 54034.000



252.6

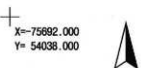


SK26

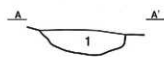
- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
下位に粘土ブロックを多量に含む
- 2 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土粒を多量に含む
- 3 7.5YR5/6 明褐色粘りあり しまり密 クレイ
一つの粘土の塊り
- 4 粘土ブロック層

SK27

X=-75692.000
Y= 54038.000



252.7

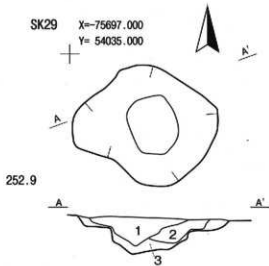


SK27

- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
底に粘土粒を含む

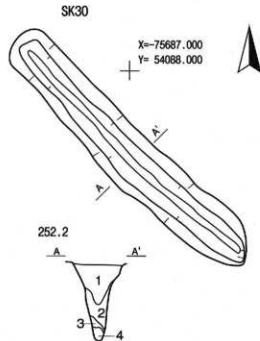
0 1:40 2m

第15図 土坑 (SK23・24・26・27)



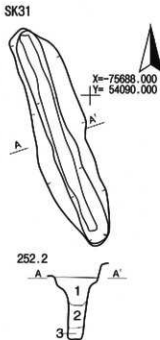
SK29

- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロックを僅かに含む
- 2 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
下位にしまった粘土ブロックを含む
- 3 粘土ブロック層



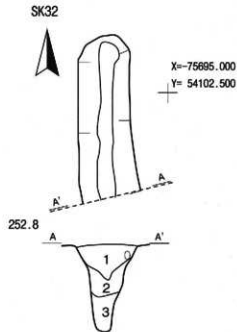
SK30

- 1 10YR 3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
- 2 10YR 2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロックを含む
- 3 7.5YR5/6 明褐色粘りあり しまり密 クレイ
- 4 10YR 3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト



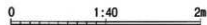
SK31

- 1 10YR 2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロックを僅かに含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色粘りあり しまり密 クレイ
- 3 10YR 2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト



SK32

- 1 10YR 3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
- 2 10YR 3/4 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
粘土ブロックを多く含む
- 3 7.5YR5/6 明褐色粘りあり しまり密 クレイ



第16図 土坑 (SK29-32)

[埋土] 褐色土と暗褐色土が層状に堆積する。

[壁面・底面] 湧水顕著で底面は不確実な部分もあるが、狭く平底で、壁面は、垂直に立ち上がる。

SK33土坑（第17図、写真図版10）

[位置] G区中央、調査区南境に位置する。

[検出状況] 黒色土、長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 長楕円形で、断面形がV字状であり陥し穴である可能性が高い。長軸3.18m、短軸3.17m、深さ78.3cmを測る。

[埋土] 褐色土・暗褐色土と黒色土が層状に堆積するが、自然堆積ではないと考えられる。

[壁面・底面] 上部、水田造成で削平されているが、しっかりとした深さを残し、垂直な壁面を持つ。底面の湧水が顕著である。

SK35土坑（第17図、写真図版11）

[位置] G区北西隅、市道付近に位置する。

[検出状況] 黒色土、長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面は極端な長楕円形で、検出した他の陥し穴と比較すると検出面からの深さは浅い。長軸2.76m、短軸0.54m、深さ59.5cmを測る。

[埋土] 褐色土・暗褐色土と黒色土が層状に堆積する。

[壁面・底面] 壁面・底面とも砂礫層がはつきりと出ており、湧水が顕著である。

SK36土坑（第17図、写真図版11）

[位置] H区中央に位置する。

[検出状況] 黒色土、長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面は極端な長楕円形で、検出した他の陥し穴から比較すると、幅が広く断面形がY字状である。長軸3.11m、短軸1.03m、深さ102.7cmを測る。

[埋土] 褐色土・暗褐色土と黒色土が細かく層状に堆積する。

[壁面・底面] 壁面・底面とも砂礫層がはつきりと出ており、湧水が顕著である。

SK37土坑（第18図、写真図版11）

[位置] H区中央に位置する。

[検出状況] 暗褐色土、長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面は極端な長楕円形で、断面形がV字状を呈する陥し穴である。長軸3.49m、短軸0.60m、深さ69.7cmを測る。

[埋土] 褐色土と暗褐色土が層状に堆積する。

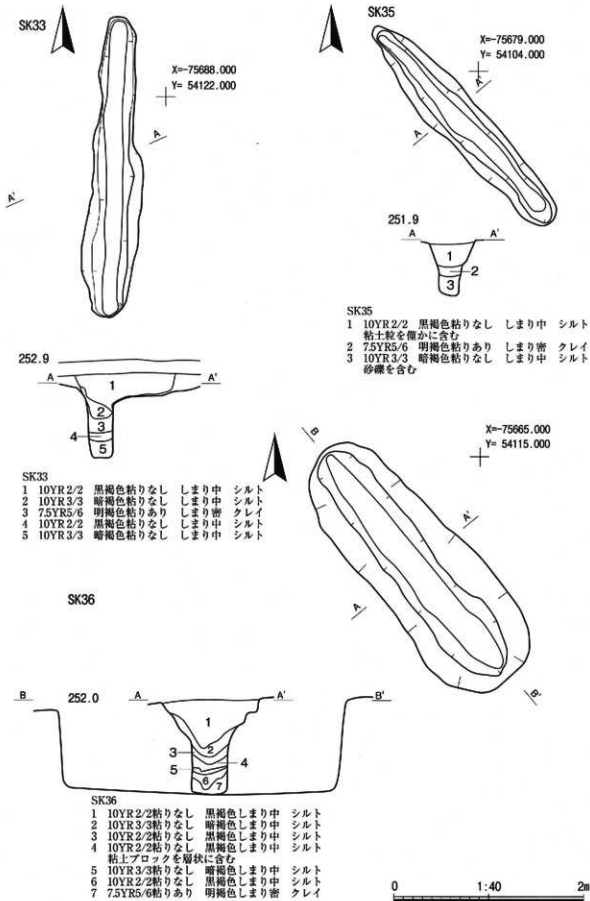
[壁面・底面] 底面中央に凹部がみられるが、湧水が激しく、流れ込みの可能性もある。

SK38土坑（第18図、写真図版11）

[位置] C区北西に位置する。

[検出状況] 黒色土の円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面円形で、長軸0.96m、短軸0.90m、深さ19.5cmである。



第17図 土坑 (SK33・35・36)

[埋土] 黒色土の単層で、下位に礫を含む。

[壁面・底面] 丸底、浅い碗形を呈する。

SK39土坑 (第18図、写真図版12)

[位置] B区東側、SF04と重複する。

[検出状況] 褐色土層下、暗褐色土方形プランで検出した。

[形態・規模] 平面隅丸五角形を呈する。長軸2.31m、短軸2.06m、深さ56.1cmを測る。

[埋土] 暗褐色土の単層である。

[重複関係] 検出面、埋土上位の東部分には、SF04が存在し、これより古い。

[壁面・底面] 底は平底で締まっており、やや斜めに立ち上がる壁面を持つ。

[出土遺物] 石匙1点、土器片2点が出土した。

SK40土坑 (第19図、写真図版12)

[位置] B区北西に位置する。

[検出状況] 褐色粘土層下、暗褐色土楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面楕円形で、長軸2.15m、短軸1.10m、深さ87.8cmである。

[埋土] 中心部に暗褐色土、底面・壁面付近では褐色粘土を含む2層が堆積する。

[壁面・底面] 底面は丸底で狭く、壁面は急な傾斜をもって立ち上がる。形状から陥し穴にも見える。

SK41土坑 (第19図、写真図版12)

[位置] G区南東隅、調査区内を横断する市道部分南側に位置する。

[検出状況] 暗褐色土長楕円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面長楕円形で、断面形がY字状を呈する陥し穴である。長軸2.95m、短軸0.56m、深さ67.7cmである。

[埋土] 褐色土と暗褐色土が層状に堆積する。

[壁面・底面] 狭く細長い底面で、壁面は、垂直に立ち上がる。

SK42土坑 (第19図、写真図版12)

[位置] G区南西、調査区内を横断する市道部分南側に位置する。

[検出状況] 暗褐色土に円形プランで検出した。

[形態・規模] 平面楕円形で、長軸2.07m、短軸1.27m、深さ78.3cmを測る。残存する平面形態は楕円形だが、本来は長方形であった可能性も考えられる。

[埋土] 暗褐色土の単層だが、砂礫を含む。

[壁面・底面] 壁面、底面とも砂礫がみられ、湧水が多く確認が難しいが、平底であると思われる。

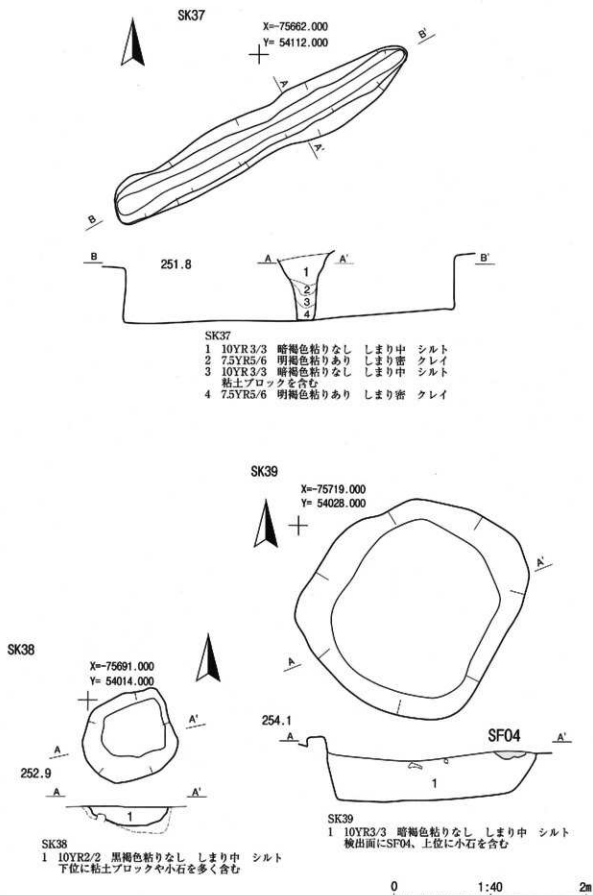
SK43土坑 (第19図、写真図版13)

[位置] F区東に位置する。

[検出状況] 黒色土、不整形プランで検出した。

[形態・規模] 平面円形基準測で、東西長1.25m、南北長1.42m、深さ30.9cmを測る。

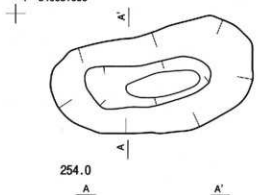
[埋土] 褐色粘土ブロックを含む黒色土の単層である。



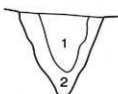
第18図 土坑 (SK37~39)

SK40

X=-75718.000
Y= 54008.000



254.0

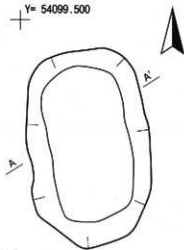


SK40

- 1 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
2 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
褐色粘土ブロックを多量に含む

SK42

X=-75680.000
Y= 54099.500



251.9

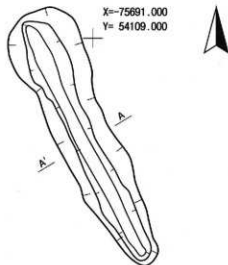


SK42

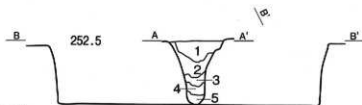
- 1 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト

SK41

X=-75691.000
Y= 54109.000



252.5

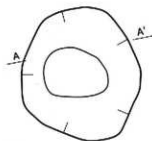


SK41

- 1 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
2 7.5YR5/6 明褐色粘りあり しまり密 クレイ
3 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト
4 7.5YR5/6 明褐色粘りあり しまり密 クレイ
5 10YR3/3 暗褐色粘りなし しまり中 シルト

SK43

X=-75693.500
Y= 54029.000



252.9



SK43

- 1 10YR2/2 黒褐色粘りなし しまり中 シルト

0 1:40 2m

第19図 土坑 (SK40~43)

〔壁面・底面〕丸底で、緩やかな立ち上がりの浅鉢状の土坑である。

(3) 柱 穴

SP01～08柱穴（第20図）

〔位置〕B区南西、SK05の北側に位置する。

〔検出状況〕黒色で円形のもの、暗褐色で円形のもの2通りで検出した。

〔形態・規模〕いずれも円形で浅く、小型の柱穴である。

〔埋土〕SP04が暗褐色土単層の埋土で、それ以外は黒色土に粘土ブロックを含む単層の埋土である。

〔壁面・底面〕平底、筒状の形状である。

〔出土遺物〕SP02埋土より刺突のある土器片1点が出土した。

(4) 掘立柱建物

SB01掘立柱建物（第20図、写真図版13）

〔位置〕H区北側に位置する。

〔検出状況〕各柱穴とも暗褐色土の円形プランで検出した。

〔形態・規模〕柱穴は計6個で構成されており、梁行1間×桁行2間の配置である。いずれの柱穴も数cmの深さが残るのみであり、かなり削平を受けているものと考えられる。建物の平面規模は梁行3.34m、桁行6.80mを測る。

〔埋土〕いずれの柱穴も暗褐色土の単層である。

SB02掘立柱建物（第20図）

〔位置〕H区北境に位置する。

〔検出状況〕各柱穴とも暗褐色土の円形プランで検出した。

〔形態・規模〕柱穴は3個が一列に並び、掘立柱建物跡として棟が建つ配置であると推測される。検出面からは浅く小型の柱穴である。この列を構成する以外の柱穴は削平のため失われたのか確認することができなかった。

〔埋土〕暗褐色土の単層である。

(5) 溝

SD01溝（第21図、写真図版13）

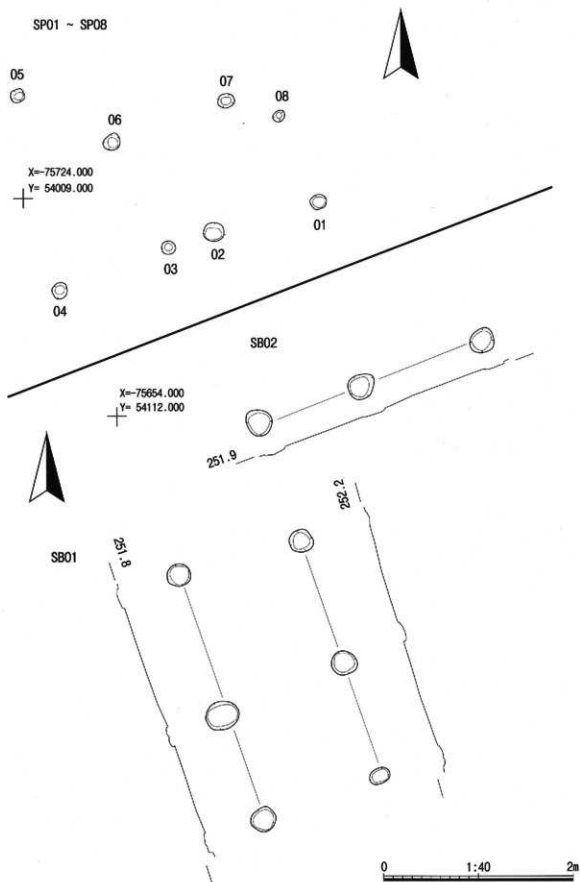
〔位置〕F区東に位置する。

〔検出状況〕褐色粘土層上面、暗褐色の帯状プランで検出した。

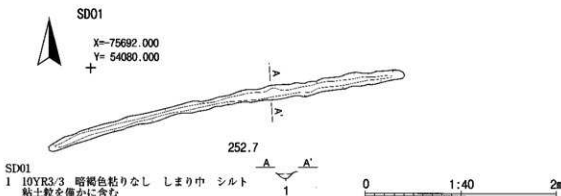
〔形態・規模〕東西、直線状に延びる溝で、検出面からは浅い。長さは直線距離で7.56m、幅は部分によって異なり一定ではないが、最大幅を有する箇所0.28mを測る。深さも一定ではないが、最深部で15.0cmを測る。

〔埋土〕暗褐色土の単層である。

〔壁面・底面〕場所によって異なるが、底面はおおむね丸みを帯びる。人工的な掘削かどうか判断できない。



第20図 柱穴 (SP01-08)、掘立柱建物 (SB01・02)



第21図 溝 (SD01)

3 出土遺物

(1) 遺構内出土遺物

第1次調査では、土坑などの遺構から縄文土器片や石器などの遺物が出土した。時期不明の小破片が大半を占めるが、その特徴が明瞭なものを選抜して掲載した。

SK03から縄文土器が出土している。粗製深鉢の口縁部や、磨り消した痕跡のある深鉢の底部、熬り糸を施した深鉢の底部など様々である。1は水平で肥厚気味の口縁部片である。2は体部に縄文が施され、底部付近の体部下半は縄文が調整によって消されている。3は体部が熬糸文で覆われた深鉢である。体部はほぼ垂直に直立する。縄文時代中期～後期に属するものと考えられる。

SK06からは、沈線区画による磨消のみられる縄文土器片(4)と、不定形の剥片石器(5)が出土している。4は微細な破片だが、縄文時代中期の深鉢片であると考えられる。5は頁岩製であり、後期旧石器時代のナイフ形石器であると考えられる。

SK11からは不定形の剥片石器(6)が出土している。頁岩製であるが、器種および時期は不明である。

SK15からは補修孔のある縄文土器体部片(7)と不定形剥片石器(8・9)が出土している。7の地文は羽状縄文となっており、胎土には繊維が多く含まれている。これら特徴から縄文時代前期初頭から前葉に属するものと考えられる。8・9は頁岩製であるが、器種および時期は不明である。

SK16からは、口唇に刻みのある縄文土器の口縁部片(10)と体部片(11)が埋土の下位より出土している。10は内外面に縄文が施された表裏縄文である。

SK39からは、縦長の石匙(12)と石皿の破片(13)が出土している。

SP02からは、磨り消しによって文様区画された内区に棒状工具による刺突文が多数施された土器片(13)が出土している。文様のあり方から縄文時代中期後葉の深鉢であると考えられる。

(2) 遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物として、縄文土器片、剥片石器、磨製石器、表探での近世と思われる銭貨が出土している。縄文土器片は、縄文時代早期から前期にかけての土器片、中期・後期から晩期にかけての土器片など、断続的に幅広い時期の遺物が出土している。点数は少ないものの、時期に幅がみられることから、大まかに時期区分ごと以下の通り分類した。

第Ⅰ群土器（縄文時代早期～前期）

第Ⅱ群土器（縄文時代中期）

第Ⅲ群土器（縄文時代後期～晩期）

第Ⅳ群土器（時期不明の粗製土器）

第Ⅰ群土器（縄文時代早期～前期）

胎土に繊維のみられるもの（15・20・22）や、羽状縄文がみられるもの（21・22）、土器片形状から、尖底と思われるもの（18）、平行沈線の区画に爪形のような刺突列が施されたもの（19）、縄文に浅く細い平行沈線を無数にほどこしたもの（16）、網目状鬚糸文（単軸糸条体）が施されたもの（24）、など、多種多様な土器片がみられる。19は縄文時代早期中葉に位置付けられている蛇王洞Ⅱ式に相当する貝殻・沈線土器の口縁部であると考えられる。破片であるため全体形は不明ながらも出土土器のうちもっとも古い時期の土器である。

第Ⅱ群土器（縄文時代中期）

縄文に隆線が施されたもの（27）や、沈線により磨り消しがみられるもの（28）がある。

第Ⅲ群土器（縄文時代後期～晩期）

隆線に刺突列を施したもの（26）、沈線で区画されたもの（29）や、2対の平行沈線が施されたもの（30）がある。26は文様から縄文時代後期の土器であると考えられる。30は台付浅鉢の脚台部分であると考えられる。

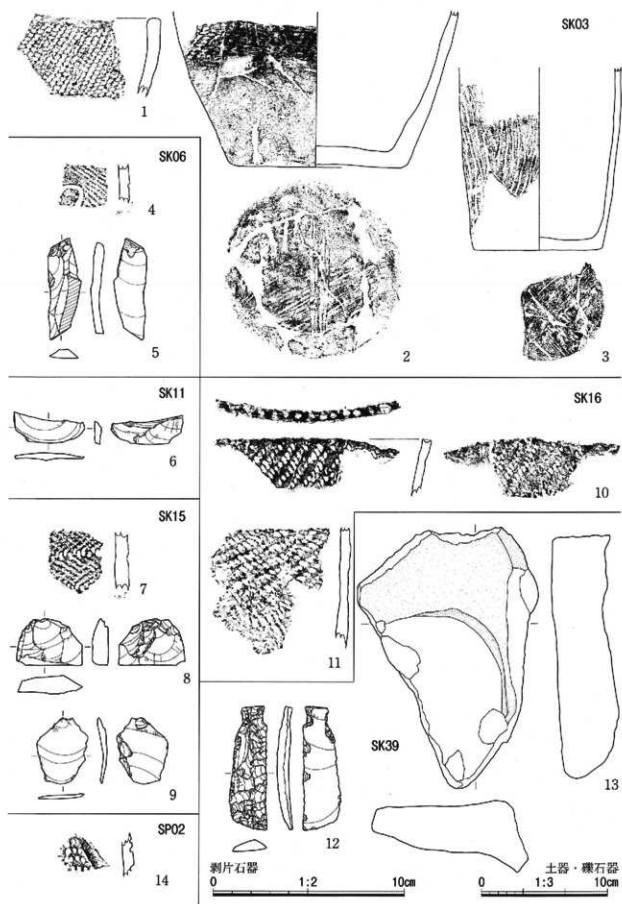
第Ⅳ群土器（時期不明の粗製土器）

口縁部を磨り消している深鉢と思われる土器片や、外面に煤痕のあるもの（32）、網代痕のある底部土器片などがあげられる。

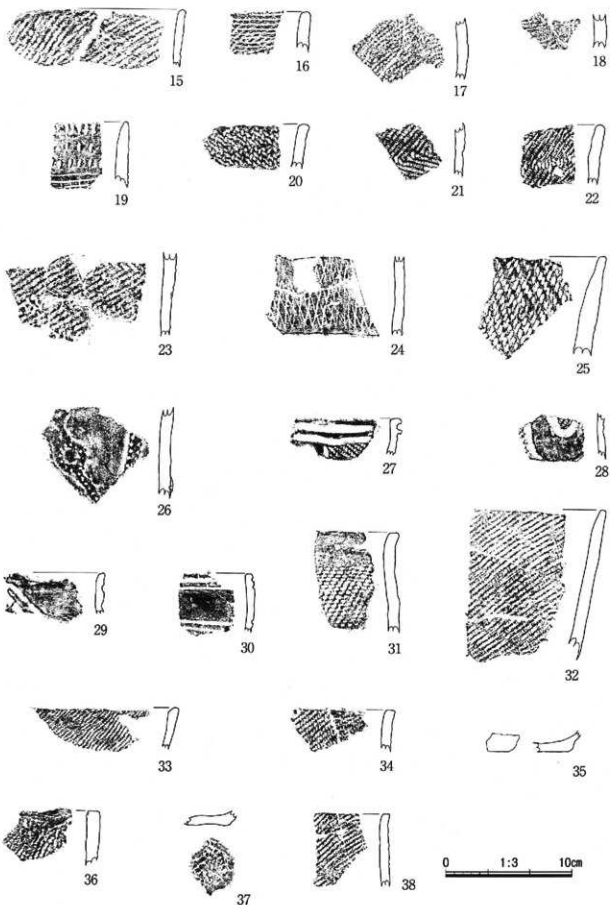
石器（旧石器時代～縄文時代）

石器は、石鏃や石匙の定形剥片石器や、不定形の剥片石器などが出土している。

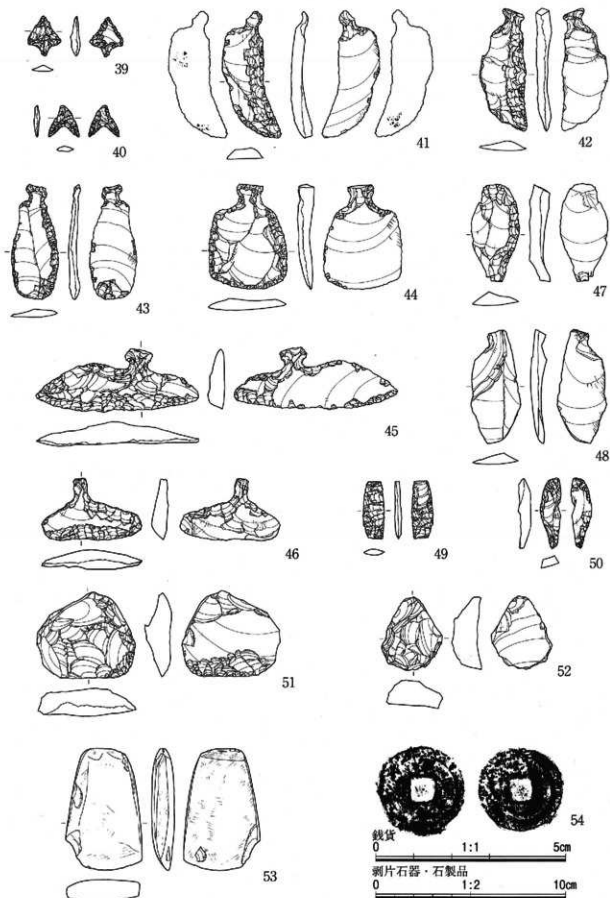
（晴山）



第22図 第1次調査出土遺物 (1)



第23圖 第1次調査出土遺物(2)



第24図 第1次調査出土遺物(3)

表2 掲載遺物一覧(第1次調査)

発掘地	種別	器種	出土遺構・出土地点	寸法 (cm)			分期	備考	実測NO
				口径/長さ	器高/幅	底径/厚さ			
1	縄文土器(口縁)	深鉢	SK03	-	6.4	-	IV	R.L縄文 平口	3
2	縄文土器(底部)	深鉢	SK03	-	12.4	14.0	IV	R.L縄文 底ナテ	1
3	縄文土器(底部)	深鉢	SK03	-	14.5	10.0	I	燃り糸文	2
4	縄文土器(体部)	深鉢	SK06	-	6.3	-	III	L.R縄文 沈腔 磨消	4
5	割片石器	不定	SK06 埋上/下層	5.35	1.75	0.7	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	49
6	割片石器	不定	SK11	1.6	3.75	0.4	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	50
7	縄文土器(体部)	深鉢	SK15	-	4.7	-	I	L.R縄文 増修孔	5
8	割片石器	不定	SK15	(2.5)	(3.45)	1.0	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	51
9	割片石器	不定	SK15	3.5	2.7	0.5	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	52
10	縄文土器(口縁)	深鉢	SK16	-	4.4	-	I	赤土縄文 円形割片	6
11	縄文土器(体部)	深鉢	SK16	-	9.6	-	IV	R.L縄文 内底蓋	7
12	割片石器	石匙	SK39	6.55	2.0	0.85	-	板長 頁岩・北上山地・古生代後期	53
13	礫石器	石皿	SK39	(20.7)	(14.3)	(5.7)	-	破片	54
14	縄文土器(体部)	深鉢	SP02	-	3.5	-	II	刺突文	8
15	縄文土器(L縁)	深鉢	B区西側・IV層下位	-	4.5	-	I	平口 内面横線痕	11
16	縄文土器(口縁)	深鉢	B区中央・IV層下位	-	3.2	-	I	平行沈線	16
17	縄文土器(体部)	深鉢	B区中央・IV層上位	-	4.7	-	I	L.R 磨減	15
18	縄文土器(口縁)	深鉢	B区・II層	-	2.6	-	I	縄文 磨減(実底?)	20
19	縄文土器(口縁)	深鉢	C区北西・IV層下位	-	5.1	-	I	口唇割片 平行刺突・貝殻沈線文土器	26
20	縄文土器(口縁)	深鉢	B区西側・IV層下位	-	3.6	-	I	縄文治縁 内面横線痕	30
21	縄文土器(体部)	深鉢	B区中央・IV層上位	-	4.4	-	I	羽状縄文	12
22	縄文土器(L縁)	深鉢	B区中央・IV層上位	-	4.9	-	I	粘附 内面横線痕	14
23	縄文土器(体部)	深鉢	B区北西・IV層下位	-	6.7	-	I	L.R縄文	18
24	縄文土器(体部)	深鉢	C区北側・IV層下位	-	6.3	-	I	単輪納全体(網目状割片文)	25
25	縄文土器(口縁)	深鉢	C区中央・IV層下位	-	7.9	-	I	R.L 内面指圧痕	28
26	縄文土器(底部)	深鉢	B区東側・IV層下位	-	7.2	-	I	隆輪に刺突列	9
27	縄文土器(口縁)	深鉢	B区西側・IV層下位	-	2.9	-	II	平口 沈腔 R.L縄文	22
28	縄文土器(口縁)	深鉢	E区東側・IV層下位	-	4.1	-	II	縄文 沈腔区画	31
29	縄文土器(口縁)	深鉢	B区中央・IV層上位	-	4.0	-	III	区画沈腔 嵌状口縁	17
30	縄文土器(脚台)	台付浅鉢	B区中央・IV層上位	-	4.6	-	III	平行沈線 2条付	13
31	縄文土器(L縁)	深鉢	E区風物水廻上	-	7.8	-	IV	R.L 口縁磨消	32
32	縄文土器(口縁)	深鉢	B区鉄棒・覆丸上	-	11.9	-	IV	L.R縄文 外面磨減	10
33	縄文土器(口縁)	深鉢	B区南東・IV層下位	-	3.3	-	IV	平口 L.R縄文(細)	19
34	縄文土器(口縁)	深鉢	B区・III層	-	3.4	-	IV	平口 L.R縄文	21
35	縄文土器(底部)	深鉢	B区西側・IV層下位	-	1.7	-	IV	磨減	23
36	縄文土器(口縁)	深鉢	B区西側・IV層下位	-	4.3	-	IV	縄文 磨減 厚手	24
37	縄文土器(底部)	深鉢	C区北側・IV層下位	-	1.2	-	IV	内底蓋 新代痕 磨減	27
38	縄文土器(L縁)	深鉢	C区中央・IV層下位	-	5.7	-	IV	平口 L.R縄文	29
39	割片石器	石鏃	F区東	2.1	1.25	0.5	-	有茎	33
40	割片石器	石鏃	B区南・覆丸	(1.65)	1.6	0.3	-	無茎	34
41	割片石器	石鏃	B区東・暗褐色土	6.7	3.1	1.1	-	板長 頁岩・北上山地・古生代後期	35
42	割片石器	石鏃	B区東・黒褐色土	6.5	2.5	0.8	-	板長 頁岩・北上山地・古生代後期	36
43	割片石器	石匙	B区東・IV層	6.1	2.5	0.6	-	板長 頁岩・北上山地・古生代後期	37
44	割片石器	石匙	B区北西・IV層	5.55	4.15	0.9	-	平形 頁岩・北上山地・古生代後期	38
45	割片石器	石鏃	B区東・IV層	3.3	8.6	1.3	-	板長 頁岩・北上山地・古生代後期	39
46	割片石器	石匙	B区東・IV層	3.25	5.3	1.05	-	板長 凝灰岩・奥羽山脈・新生代新第三紀	40
47	割片石器	不定	B区南東・IV層	5.15	2.55	1.1	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	41
48	割片石器	不定	B区中央・IV層	6.0	2.65	0.9	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	42
49	割片石器	不定	B区東・IV層	3.05	1.1	0.4	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	43
50	割片石器	不定	B区中央・IV層	3.7	1.1	0.7	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	44
51	割片石器	不定	B区中央・IV層	4.55	3.2	1.5	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	45
52	割片石器	不定	D区北東・IV層	3.9	3.2	1.6	-	柱貫貫岩・奥羽山脈・新生代新第三紀	46
53	磨製石器	石斧	F区 西・III層	6.45	(4.05)	1.2	-	頁岩・北上山地・古生代 後期	47
54	瓦葺	網紋	D区表坪	2.30	2.25	0.05	-	寛永通宝	48

V 第 2 次 調 査

1 調査概要と基本層序

調査区は第1次調査区の東側に位置する。調査区を旧田面の区割りに応じてそれぞれ西から順にL～S区と小区割りして調査をおこなった。調査区は東西に長く、旧地形は東に向け徐々に低くなっている。なお、調査区東端は沢地形に面しており、調査区外にあっては現況においても一定の流水が認められる。調査区は近現代に水田造成のため切り土や盛り土によって段が形成されており、この段は水田区画となっている。

ここでは、調査区の各小区について遺構の検出状況を概観し、次節の各遺構についての詳述の一助としたい。

もっとも西側高位に位置するL区では、柱穴を多数検出し、13棟の掘立柱建物を想定した。また、縄文時代の陥し穴や土坑も同一面で検出した。このL区では溝状の陥し穴4基、その他の土坑7基を検出した。

M区は、L区北に位置し、L区から連続する地形面であるが、検出面は削平のためL区よりも0.8m低く平坦である。M区で検出した遺構は、中世のものと考えられる竪穴建物1棟と縄文時代の土坑3基である。土坑はいずれも陥し穴であるとみられる。

N区は性格不明遺構1基を検出したのみで、さらに北に位置するO区ではまったく遺構が認められなかった。

P区は、調査区ほぼ中央に位置する。遺構は北東に集中してみられる。ここでは、古代の竪穴住居を3棟検出した。また、縄文時代の陥し穴を4基検出し、うち3基は溝状のものである。

Q区はP区の東に位置し、縄文時代の陥し穴4基と土坑を検出した。東端部は沢地形の始まりとなっており、縄文時代～古代にかけての遺物が若干量出土した。

R区では縄文時代の陥し穴1基を検出したが、S区では遺構はまったく認められなかった。

基本層序は、大別するとⅠ層が表土、Ⅱ層が黒色土層、Ⅲ層が漸移層、Ⅳ層が黄褐色ローム層、Ⅴ層が砂質土～礫層である。ⅠおよびⅡ層は遺物を包含するが、Ⅲ層以下においては遺物が認められない。

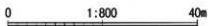
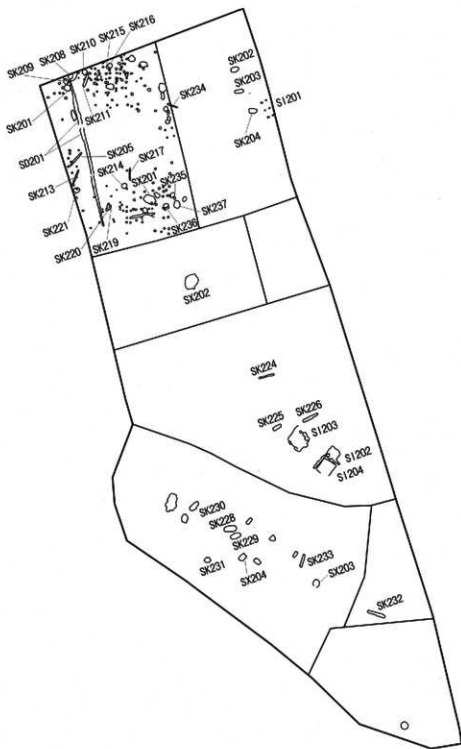
Ⅰ層は近現代の造成、耕作に伴うものも含め、層厚20～140cmであり、暗褐色を呈するシルトを基調とする。

Ⅱ層は調査区のもっとも低位に当たるQ区とS区の東端部にかけて認められるのみで、調査区の大半で水田造成等によって失われているとみられる。

Ⅲ層はⅡ層よりもより明度の高い色調の自然堆積層である。より低位の削平が及んでいないエリアにしか存在していない。

Ⅳ層は大半のエリアで遺構検出面となっている。上面が削平されている箇所も多く、水田造成によって失われた遺構も少なからず存在したものと想定される。

Ⅴ層はもっとも削平の著しいL区南半、M区南半、Q・R区西端部でⅠ層直下において露出している。本来高位であった部分を切り土によって削平された結果とみられる。



第25図 第2次調査遺構配置

2 検出遺構

前節で概述したとおり、各小区において遺構を検出したが、ここではこれら遺構について詳述することとする。なお、ここでは調査区割を超越した遺構種別のまとめりの記載とする。

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物は今回の調査では13棟を検出した。いずれもL区で集中してみられる。なお、SB201は欠番としたためSB202～214がこれら掘立柱建物に該当する。これら掘立柱建物はL区東側に位置する一群とL区西側に位置する一群に分かれる。

SB202掘立柱建物（第27図、写真図版21・22・29）

〔位置〕 L区西側に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において10個の柱穴（SP330・327・324・397・389・363・367・267・266・272）を検出した。

〔重複関係〕 想定されるその他の掘立柱建物とは重複していないが、単体の柱穴SP382とSP348と重複しており、それぞれSP397とSP389がこれらに切られている。

〔軸角〕 ほぼ正方位の南北を長軸とする南北棟である。

〔形態・規模〕 平面形態は桁行4間、梁行1間の長方形建物であり、梁間は2間分の長さを有する。平面規模は桁行8.89m、梁行4.85mを測る。柱間はほぼ等間隔となっており整然と並ぶ。

〔柱穴〕 もっとも深いSP367で検出面から35cmの深さである。その他の柱穴は30cmよりも浅い。各柱穴の底面標高は若干の高低差があり、建物北東に位置するSP367とSP363はやや低い傾向である。いずれの柱穴も柱痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB203掘立柱建物（第28図、写真図版23・29）

〔位置〕 L区西端に位置する。

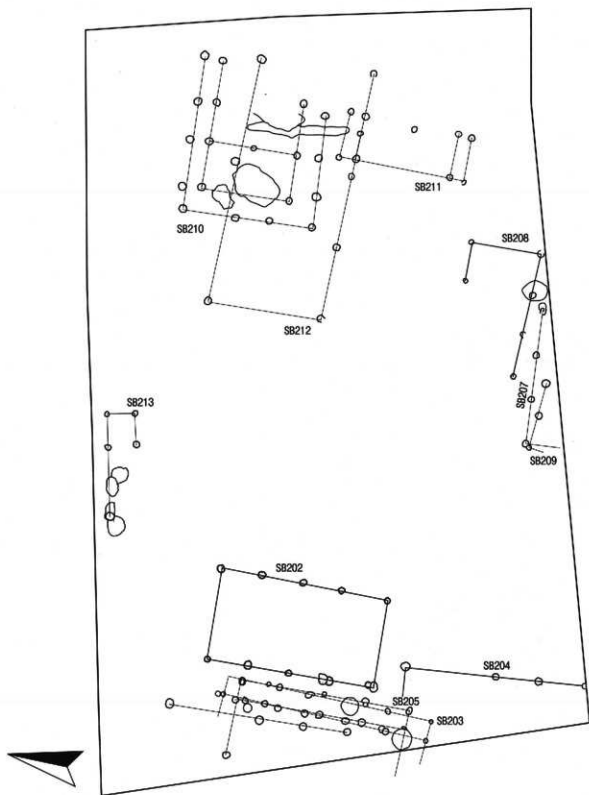
〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において10個の柱穴（SP310・319・374・338・343・422・320・398・345・347）を検出した。平面プランの一部のみの検出で、大半は調査区外へと続く。

〔重複関係〕 SB204・205・206・214・215の各掘立柱建物と平面プランにおいて重複している。重複する掘立柱建物を構成する柱穴と直接切り合い関係が認められないため先後関係は不明である。

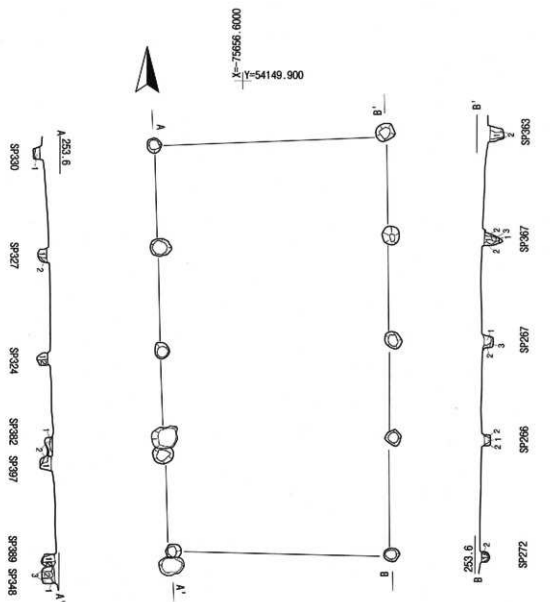
〔軸角〕 ほぼ正方位の南北を長軸とする南北棟である。

〔形態・規模〕 桁行5間の平面長方形の建物であるが、梁行は調査区外へと続いているため不明である。身舎には約半間分の下屋が付属すると思われる。平面規模は桁行10.92m、身舎と下屋との間隔は南端部で1.06mを測る。柱間はほぼ等間隔となっており整然と並ぶが、欠失している柱穴も存在する。

〔柱穴〕 もっとも深いSP338で検出面から54.6cmの深さである。一方、下屋部分を構成する柱穴は直径が小さく掘り込みも浅い。また、同時に身舎南北隅柱も小規模である。各柱穴の底面標高は若干の高低差があり、建物身舎南東に位置するSP343とSP338はやや低い傾向である。身舎の柱穴には柱痕

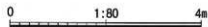


第26圖 L区獨立柱建物群



SB202

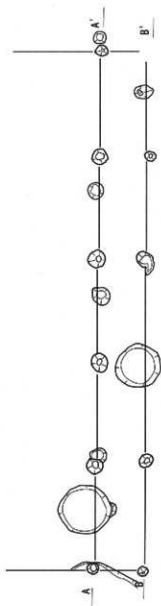
- 1 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)
- 2 10YR7/8 黄褐色シルト (1のBL痕状に含む)
- 3 10YR7/8 黄褐色シルト (1のBL微量に含む)



第27図 掘立柱建物 (SB202)

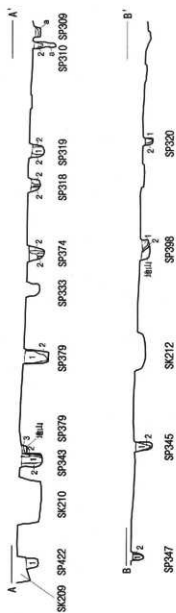


X=75656.800
Y=54146.000



SB203

- 1 10YR2/1 黒色シルト (aのBL少量含む)
 2 10YR4/4 褐色シルト (aのBL塵状に含む)
 3 10YR3/3 暗褐色シルト (中粒砂泥)
 a 10YR7/8 黄橙色シルト



第28図 掘立柱建物 (SB203)

跡が認められる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【時期】出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB204掘立柱建物（第29図、写真図版23・29）

【位置】L区南西隅に位置する。

【検出状況】I層直下のIV層上面において4個の柱穴（SP391・205・202・431）を検出した。建物平面プランの一部のみの検出で、大半は調査区外へと続く。

【重複関係】SB203・205の各掘立柱建物と平面プランにおいて重複している。重複する掘立柱建物を構成する柱穴と直接切り合い関係が認められないため先後関係は不明である。

【軸角】ほぼ正方位の南北を長軸とする南北棟であると考えられる。

【形態・規模】桁行3間以上の平面長方形の建物であると推定される。梁行は調査区外へと続いているため不明である。調査区内で検出できた平面規模は桁行9.54mを測る。

【柱穴】もっとも深いSP205で検出面から30.6cmの深さである。その他の柱穴は削平を受けているため浅い。SP205には柱痕跡が認められる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

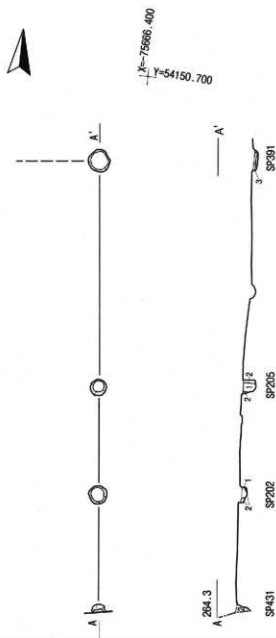
【時期】出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB205掘立柱建物（第30図、写真図版24・29）

【位置】L区西端に位置する。

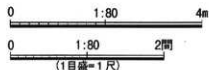
【検出状況】I層直下のIV層上面において11個の柱穴（SP305・311・318・333・339・344・328・321・429・342・346）を検出した。建物平面プランの一部のみの検出で、大半は調査区外へと続く。

【重複関係】SB203・204・206・214・215の各掘立柱建物と平面プランにおいて重複している。

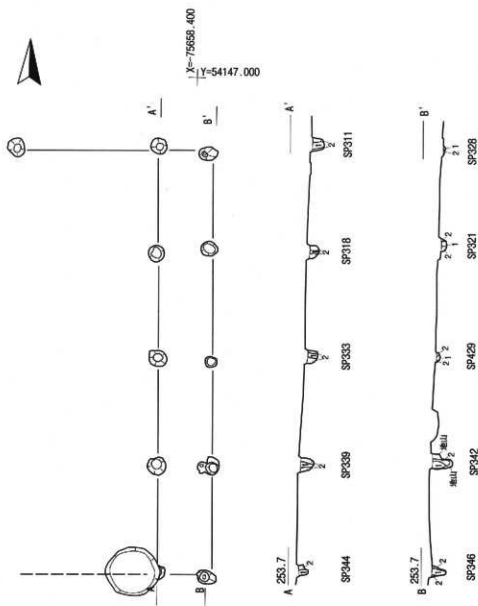


SB204

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト (aのBL微量含む)
- 2 10YR7/8 黄橙色シルト (bのBL斑状に多量含む)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト (aのBL斑状に多量含む)
- a 10YR7/8 黄橙色シルト
- b 10YR1.7/1 黒色シルト

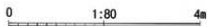


第29図 掘立柱建物 (SB204)



SB205

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト (aのBL数値含む)
- 2 10YR7/8 黄褐色シルト (bのBL形状に多量含む)
- a 10YR7/8 黄褐色シルト
- b 10YR1.7/1 黒色シルト



第30図 掘立柱建物 (SB205)

重複する掘立柱建物を構成する柱穴と直接切り合い関係が認められないため先後関係は不明である。

【軸角】ほぼ正方位の南北を長軸とする南北棟である。

【形態・規模】桁行5間の平面長方形の建物である。梁行は調査区外へと続いているため不明であるが、調査区際に梁間を構成すると考えられるSP305が存在することから梁行き2間以上の身舎であった可能性が高い。また、身舎には約半間分の下屋が付属すると思われる。平面規模は身舎の桁行6.73m、身舎と下屋との間隔は南端部で1.22mを測る。柱間はほぼ等間隔となっており整然と並ぶ。

【柱穴】もっとも深いSP339で検出面から38.8cmの深さである。一方、下屋部分を構成する柱穴は、SP342を除いて掘り込みも浅い。各柱穴の底面標高は若干の高低差がある。また、身舎の柱穴はすべて柱痕跡が認められる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【時期】出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB206掘立柱建物（第31図、写真図版29）

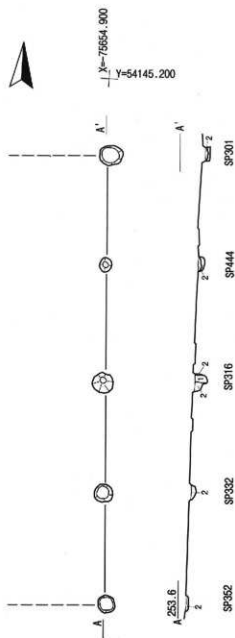
【位置】L区西端に位置する。

【検出状況】1層下下のIV層上面において5個の柱穴（SP301・444・316・332）を検出した。建物平面プランの一部のみの検出で、大半は調査区外へと続く。

【重複関係】SB203・205・214・215の各掘立柱建物と平面プランにおいて重複している。重複する掘立柱建物を構成する柱穴と直接切り合い関係が認められないため先後関係は不明である。

【軸角】ほぼ正方位の南北を長軸とする南北棟であると考えられる。

【形態・規模】桁行4間の平面長方形の建物であると推定される。梁行は調査区外へと続いているため不明であるが、梁間に柱穴がみられないため梁間1間の建物である可能性が高い。調



SB206

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (aのBL斑状に少量含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト (aのBL多量含む)
- a 10YR7/8 黄褐色シルト

0 1:80 4m

0 1:80 2間
(1目盛=1尺)

第31図 掘立柱建物 (SB206)

査区内で検出できた平面規模は桁行9.51mを測る。

〔柱穴〕もっとも深いSP316で検出面から31.4cmの深さである。その他の柱穴の掘り込みは削平を受けているため浅い。SP316には唯一柱痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB207掘立柱建物（第32図、写真図版24・29）

〔位置〕L区南端に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において4個の柱穴（SP214・218・221・224）を検出した。建物平面プランの一部のみの検出で、大半は調査区外へと続く。

〔重複関係〕SB209と平面プランにおいて重複している。SP214は、重複するSB209-SP213に直接切られており、SB209が新しい建物である。

〔軸角〕ほぼ正方位の東西を長軸とする東西棟であると考えられる。

〔形態・規模〕桁行3間以上の平面長方形の建物であると推定される。梁行は調査区外へと続いているため不明である。調査区内で検出できた平面規模は桁行7.09mを測る。柱間はほぼ等間隔となっており整然と並ぶ。

〔柱穴〕もっとも深いSP224で検出面から40.8cmの深さである。SP225に切られているSP224以外はすべて柱痕跡が認められる。

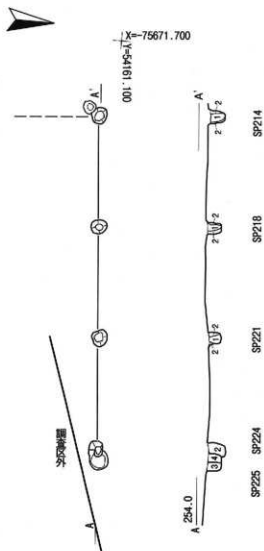
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB208掘立柱建物（第33図、写真図版25・29）

〔位置〕L区南端に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において6個の柱穴（SP232・408・257・226・213・220）



SB207

- | | | |
|---|---------|----------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色シルト (aのBL腐状に多量含む) |
| 2 | 10YR5/6 | 黄褐色シルト (bのBL少量含む) |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色シルト (aのBL腐状に少量含む) |
| 4 | 10YR5/6 | 黄褐色シルト (bのBL多量含む) |
| a | 10YR5/6 | 黄褐色シルト |
| b | 10YR3/2 | 黒褐色シルト |



第32図 掘立柱建物 (SB207)

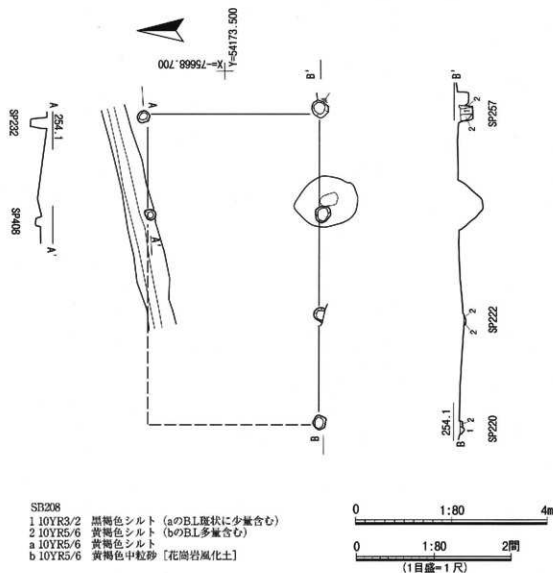
を検出した。建物平面プランの一部のみの検出で、大半は調査区外へと続く。

〔重複関係〕縄文時代の土坑（SK221・213）と重複しているが、これらを切っている。また、近現代の溝（SD01）とSP408が重複しており、この柱穴は溝によって上半部が切られている。その他の掘立柱建物とは重複はみられないが、SB207・209と近接している。

〔軸角〕ほぼ正方位の東西を長軸とする東西棟であると考えられる。

〔形態・規模〕桁行3間以上の平面長方形の建物であると推定される。梁行は1間で、おおむね2間分の柱間である。平面規模は桁行6.69m、梁行3.69mを測る。柱間はほぼ等間隔となっており整然と並ぶが、削平等により欠失している柱穴も存在するものと考えられる。また、建物西側は検出面そのものが大幅に削平されていることを考えると、建物自体もさらに西側へ延びていた可能性も十分に考えられる。

〔柱穴〕もっとも深いSP232で検出面から34.4cmの深さである。SP257には柱痕跡が認められる。



第33図 掘立柱建物 (SB208)

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB209掘立柱建物（第34図、写真図版25・29）

〔位置〕 L区南端に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において3個の柱穴（SP213・216・219）を検出した。建物平面プランのごく一部のみを検出で、大半は調査区外へと続く。

〔重複関係〕 SB207と平面プランにおいて重複している。SP213は、重複するSB207-SP214を直接切っており、SB207がより古い建物である。

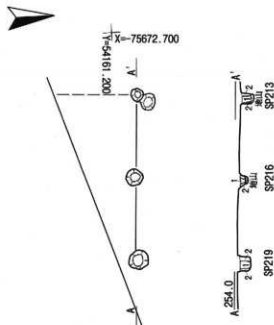
〔軸角〕 ほぼ正方位の軸角を有するが、長軸方向が不明であるため東西棟であるか南北棟であるかは定かではない。

〔形態・規模〕 桁行方向と梁行方向が不明である。検出した3個の柱穴間距離が他の掘立柱建物よりもやや狭いため、この柱列が梁行方向である可能性が考えられる。調査区内で検出できた平面規模は3個の柱列方向が3.51mを測る。柱間はほぼ等間隔となっており整然と並ぶ。

〔柱穴〕 もっとも深いSP219で検出面から26.8cmの深さである。3個の柱穴にはすべて柱痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。



SB210掘立柱建物（第35・36図、写真図版26・30）

〔位置〕 L区東端に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において19個の柱穴（SP254・251・405・411・253・250・436・286・275・434・441・285・276・435・442・293・260・259・257）を検出した。建物平面プラン東側の一部は、近代以降の水田造成や水田用水路等によって失われている。

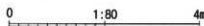
〔重複関係〕 SB212と平面プランにおいて重複している。重複する掘立柱建物（SB212）を構成する柱穴と直接切り合い関係が認められないため先後関係は不明である。また、SB211とは重複はみられないが、比較的近接する。

〔軸角〕 ほぼ正方位の東西方向を長軸とする東西棟であると考えられる。

〔形態・規模〕 身舎とそれに付属する下屋が少

SB209

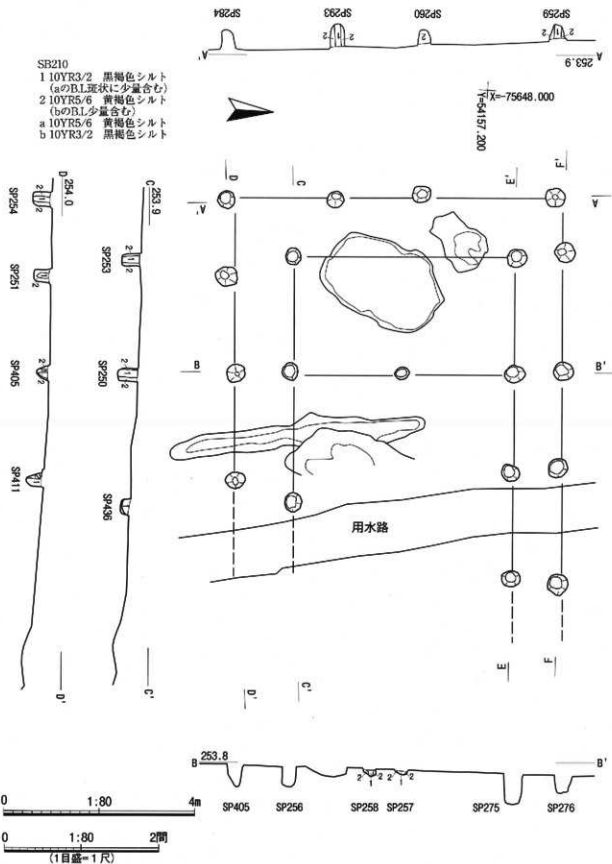
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (aのB.L.夾状に少量含む)
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト (bのB.L.少量含む)
- a 10YR5/6 黄褐色シルト
- b 10YR3/2 黒褐色シルト



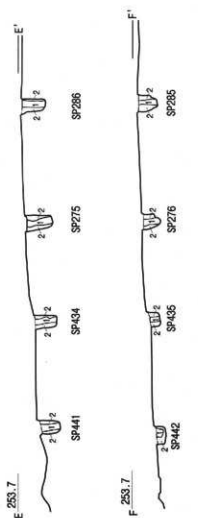
第34図 掘立柱建物 (SB209)

SB210

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト
(aのB.L.斑状に少量含む)
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト
(bのB.L.少量含む)
- a 10YR5/6 黄褐色シルト
- b 10YR3/2 黒褐色シルト

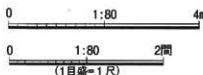


第35図 掘立柱建物 (SB210)



SB210

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト
(aのB.L.環状に少量含む)
2 10YR5/6 黄褐色シルト
(bのB.L.少量含む)
a 10YR5/6 黄褐色シルト
b 10YR3/2 黒褐色シルト



第36図 掘立柱建物 (SB210) 断面

なくとも3方に取り付く平面長方形の形態である。身舎は桁行3間以上、梁行1間であるが、梁間は約2間分の間隔が認められる。残存する桁行6.76m、西側の梁行4.69mをそれぞれ測る。また、身舎内部には間柱に相当すると考えられる柱穴1個 (SP259) を検出した。この柱穴は他の柱穴よりも浅く小規模であるが、柱筋が通るため身舎内部区画が想定される柱穴である。下屋は約半間分が付属しており、残存している下屋全体の平面規模は北側桁行方向8.19m、東側梁行方向6.80mを測る。下屋の梁間には2個の柱穴 (SP260・293) が存在しており、特殊な趣である。身舎の柱間はほぼ等間隔となっており整然と並ぶが、一方で下屋の柱間は一定ではない。また、柱筋においても下屋部分は軸線に不整部分が認められる。この不整部分は、桁行方向となる東西の柱列において顕著に認められる。

〔柱穴〕大半の柱穴規模はほぼ等しいが、身舎内部に位置するSP259はやや小規模である。もっとも深いSP275で検出面から57.4cmの深さである。大半の柱穴には柱痕跡が認められ、他の掘立柱建物の柱穴よりも顕著である点で特徴的である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB211掘立柱建物 (第37図、写真図版26・30)

〔位置〕L区東端に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において9個の柱穴 (SP432・231・234・271・240・406・438・416・431) を検出した。建物平面プラン東側部分は、近代以降の水田造成や水田用水路等によって失われている。

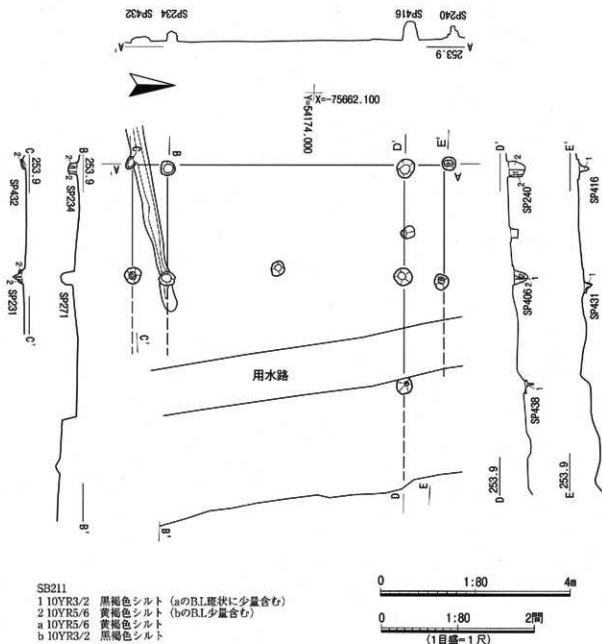
〔重複関係〕SB212と平面プランにおいて重複している。重複する掘立柱建物 (SB212) を構成する柱穴と直接切り合い関係が認められないため先後関係は不明である。また、SB210とは

重複はみられないが、比較的近接する。

〔軸角〕 ほぼ正方位の東西方向を長軸とする東西棟であると考えられる。

〔形態・規模〕 身舎とそれに付属する下屋が少なくとも南側と北側の2方に取り付く平面長方形の形態である。身舎は桁行2間以上、梁行1間であるが、梁間は約2間分の間隔が認められる。この身舎の桁行は残存する2間分で4.54m、梁行4.69mをそれぞれ測る。また、身舎内部には間柱に相当する可能性がある柱穴1個（SP237）を検出した。身舎内部区画が想定される柱穴である。下屋は約半間分が付属しており、残存している下屋全体の平面規模は北側桁行方向2.47m、東側梁行方向6.69mを測る。身舎および下屋の柱間はほぼ等間隔となっており比較的整然と並ぶ。

〔柱穴〕 身舎の柱穴規模はそれぞれほぼ等しいが、下屋部分はやや径が小さく浅い傾向である。もっ



第37図 掘立柱建物 (SB211)

とも深いSP240で検出面から38.4cmの深さである。身舎の柱穴には柱痕跡が認められるが、下屋部分の柱穴には顕著ではない。下屋部分はあくまでも付属施設として身舎とは柱構造が若干異なるようである。用水路や水田造成に伴う切り段の削平等により欠失している柱穴も存在するものと考えられるが、建物自体東側へ延びているものとみられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB212 掘立柱建物（第38図、写真図版27・30）

〔位置〕 L区東端に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において7個の柱穴（SP270・256・248・239・278・394・298）を検出した。建物平面プラン東側の一部は、近代以降の水田造成や水田用水路等によって失われている。

〔重複関係〕 SB210・211と平面プランにおいて重複している。重複する掘立柱建物（SB212）を構成する柱穴と直接切り合い関係が認められないため先後関係は不明である。

〔軸角〕 ほほ正方位の東西を長軸とする東西棟であると考えられる。

〔形態・規模〕 桁行4間の平面長方形の建物であると推定される。梁行は1間で、おおむね2間分の柱間である。平面規模は桁行13.1m、梁行5.99mを測る。柱間はほほ等間隔となっており整然と並ぶが、削平等により欠失している柱穴も存在するものと考えられる。

〔柱穴〕 もっとも深いSP239で検出面から21.1cmの深さである。SP270・298には柱痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。

SB213 掘立柱建物（第39図、写真図版27・30）

〔位置〕 L区北端中央に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において5個の柱穴（SP378・294・292・379・429）を検出した。建物平面プランの大半、特に主体となる北側は、近代以降の大規模な水田造成等によって失われている。

〔重複関係〕 他の掘立柱建物とは重複していないが、近世以降と考えられる土坑類と重複している。該当する柱穴はいずれにも切られている。

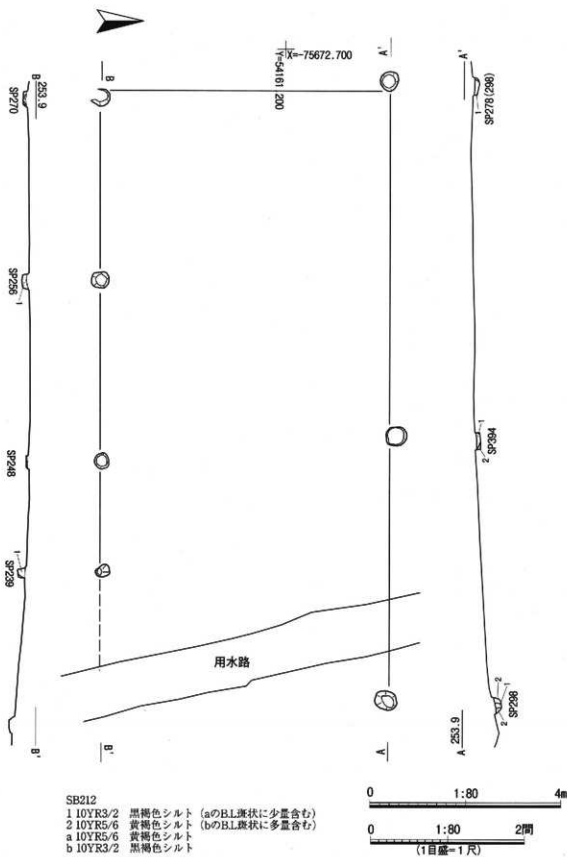
〔軸角〕 長軸方向は不明である。

〔形態・規模〕 柱間はほほ等間隔となっており整然と並ぶが、削平等により欠失している柱穴も存在するものと考えられる。

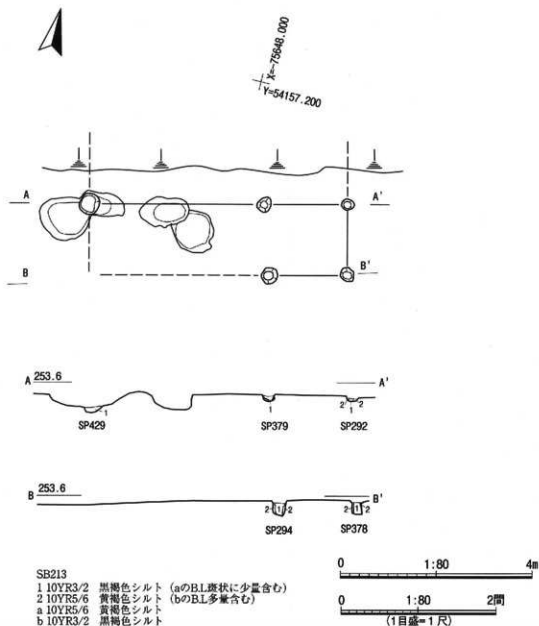
〔柱穴〕 もっとも深いSP294で検出面から28.9cmの深さである。SP294・378には柱痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世以降の建物である可能性が高い。他の掘立柱建物の主軸が正方位に乗っているにも関わらず、この建物はやや軸が振っているためやや時期差がある可能性が考えられる。



第38図 掘立柱建物 (SB212)



第39図 掘立柱建物 (SB213)

(2) 竪穴建物・竪穴住居

S1201竪穴建物 (第40図、写真図版31・32)

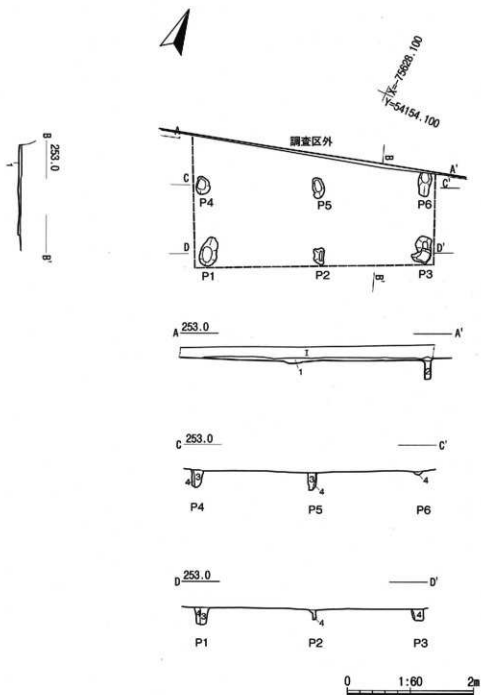
〔位置〕 M区北端中央調査区境に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒色土の方形プランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕 長軸方向は不明であるが、ほぼ正方位の主軸であると考えられる。

〔形態・規模〕 大半が調査区外へと続くが、おおむね平面方形と考えられる。東西辺3.99m、残存する南北長1.52mを測る。削平のため壁はほとんど残存しておらず、竪穴そのものの深さは約3cmであ



S1201

- | | | |
|---|-----------|----------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1 | 黒色シルト (地山BL、炭化物、焼土BL多量に含む) |
| 2 | 10YR1.7/1 | 黒色シルト (地山BL、炭化物少量含む) |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色シルト (炭化物、焼土BL少量含む) |
| 4 | 10YR7/8 | 黄褐色シルト (炭化物、焼土、1のBL産状に含む) |

第40図 竪穴建物 (S1201)

る。

〔埋土〕炭化物、焼土粒を多く含む黒色シルトである。遺物は含まない。

〔床面〕固く締まった面を検出した。おおむね平滑であるが、堀方による細かな凹凸が認められる。

〔柱穴〕P1～6の6個で構成される。いずれも整然と並ぶが、規模は小さい。柱穴埋土は堅穴部の埴土と同様炭化物や焼土ブロックを含む黒色シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から中世の堅穴建物である可能性が高い。

SI202堅穴住居（第41図、写真図版33・34）

〔位置〕P区北東に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色土の方形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構位とは重複していないが、SI204とは非常に近接しているため両者の同時併存は考えられない。

〔軸角〕主軸は北東方向を指向する。

〔形態・規模〕おおむね平面方形を呈し、東西長2.62m、南北長2.48mを測る。堅穴そのものの深さは約20cmである。

〔埋土〕炭化物、焼土粒を多く含む黒色シルトである。遺物は土師器片を含む。また、住居北西側に炭化材が顕著にみられ、上屋等が消失した結果を示すものと考えられる。

〔床面〕締まりの弱い面を検出した。凹凸が著しく平滑ではない。

〔カマド〕カマドは住居北東側で1基検出した。長さ1.31mの煙道を有し、突端には平面円形の煙出しが掘り込まれている。燃焼部は床面をやや掘り窪めた椀形の施設で、焼土化した平面馬蹄形の袖部によって囲まれている。

〔土坑〕床面では2基の土坑を検出した。いずれも床面を掘り込んだものであるとみられるが、床面機能時のものかどうかは不明である。

〔出土遺物〕埋土および床面より平安時代であるとみられる土師器が出土した。

〔時期〕出土遺物および遺構の特徴から平安時代（9世紀頃）の堅穴住居である可能性が高い。

SI203堅穴住居（第42図、写真図版35・36）

〔位置〕P区北東に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色土の方形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構位とは重複していない。北西側は擾乱著しく残存状況は良くない。また、遠野市教育委員会の試掘調査によって、この北西側は調査されていた。

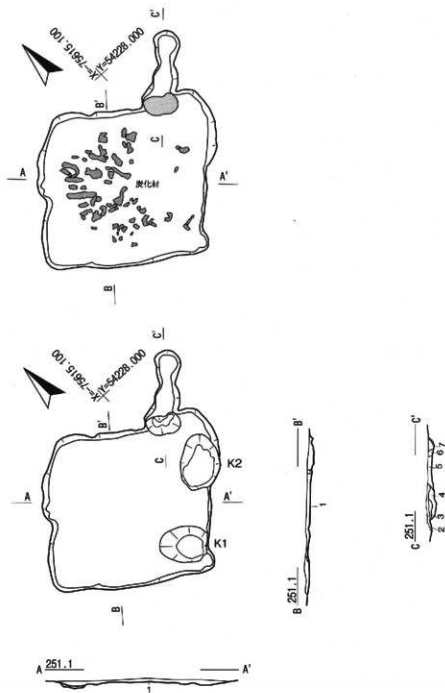
〔軸角〕主軸は北東方向を指向する。

〔形態・規模〕おおむね平面方形を呈し、東西長3.70m、残存する南北長3.72mを測る。堅穴そのものの深さは約20cmである。

〔埋土〕炭化物、焼土粒を多く含む黒色シルトである。遺物は土師器片を含む。

〔床面〕比較的固く締まった面を検出し、ほぼ平滑である。

〔土坑〕住居プラン内で2基の土坑を検出した。いずれも住居埋土上から切り込まれており、住居プランから外へ突出していることから、住居埋没後に作られた遺構であるものとみられる。

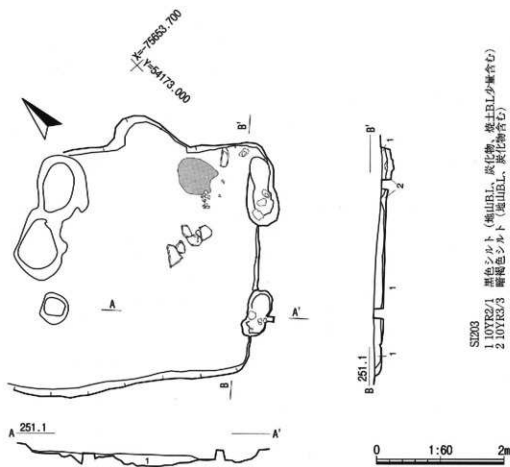


SI202

- 1 10YR17/1 黒色シルト (炭化物、機土BL多量を含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物多く含む)
- 3 5YR4/4 赤褐色シルト
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト (炭化物含む)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト

0 1:60 2m

第41図 竪穴住居 (SI202)



第42図 竪穴住居 (S1203)

〔出土遺物〕 埋土および床面より平安時代であるとみられる土師器が出土した。

〔時期〕 出土遺物および遺構の特徴から平安時代（9世紀頃）の竪穴住居である可能性が高い。

S1204竪穴住居（第43図、写真図版37）

〔位置〕 P区北東に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒色と黄褐色ブロック土で構成された方形プランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構位とは重複していないが、S1202と近接する。遺構東側は、1条の現代水田畦きよによって切られている。

〔軸角〕 主軸は南東方向を指向する。

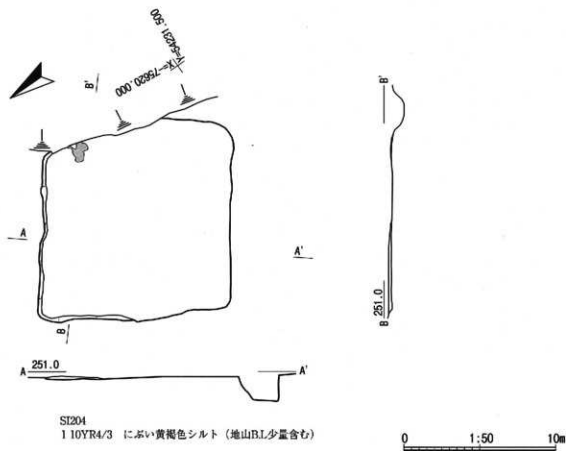
〔形態・規模〕 おおむね平面方形を呈し、東西長2.97m、残存する南北長3.17mを測る。削平著しく、大半が床面のみの検出で、竪穴住居そのものの深さは約2cmである。

〔埋土〕 炭化物を少量含む黒色シルトである。遺物は土師器片を含む。

〔床面〕 比較的固く締まった面を検出し、ほぼ平滑である。北東隅近くに焼土を1基検出した。

〔出土遺物〕 埋土および床面より平安時代であるとみられる土師器が出土した。

〔時期〕 出土遺物および遺構の特徴から平安時代（9世紀頃）の竪穴住居である可能性が高い。



第43図 竪穴住居 (SI204)

(3) 土 坑

SK202土坑 (第41図、写真図版38)

[位置] M区北側に位置する。

[検出状況] I層直下のIV層上面において黒色の楕円形プランを検出した。

[重複関係] 他の遺構とは重複していないが、SK203が比較的近在する。

[軸角] 長軸は北西方向を指向する。

[形態・規模] 遺構上面は楕円形を呈するが、底面は明瞭なコーナーを有する長方形である。本来長方形の土坑として掘り込まれたものとみられる。長軸1.70m、短軸1.04m、深さは62.5cmである。

[埋土] 最上層は黒色シルトであり、十和田中堰火山灰と考えられる微細なブロックがわずかに認められる。最下層は地山に酷似しており、遺構上壁の崩落土が埋没最初期に堆積したものと考えられる。

[底面] ほぼ平滑であるが、湧水著しい。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[時期] 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、火山灰の存在から少なくとも縄文時代前期には埋没していた可能性が考えられる。また、遺構上壁の崩落土が埋没最初期に堆積

した状況から埋め戻されることなく活用された土坑であると考えられ、規模や形態も加味すると陥し穴である可能性が高い。

SK203土坑（第44図、写真図版38）

〔位置〕M区北側に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、SK202・204が比較的近在し、これらの中間に位置する。

〔軸角〕長軸はほぼ北方向を指向するが、やや西側に振れている。

〔形態・規模〕遺構上部および底面ともに明瞭なコーナーを有する長方形である。長軸1.89m、短軸0.73m、深さは70.1cmである。

〔埋土〕最上層は黒色シルトであり、十和田中環火山灰と考えられる微細なブロックがわずかに認められる。下層は水平な自然堆積層である。

〔底面〕ほぼ平滑であるが、湧水著しい。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、火山灰の存在から少なくとも縄文時代前期には埋没していた可能性が考えられる。規模や形態から近在する土坑と同様に陥し穴である可能性が高い。

SK204土坑（第44図、写真図版38）

〔位置〕M区北側に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、SK203が比較的近在する。

〔軸角〕長軸はほぼ北方向を指向する。

〔形態・規模〕遺構上部は隅丸方形あるいは楕円形を呈するが、底面は長方形である。長軸1.67m、短軸0.98m、深さは60.1cmである。

〔埋土〕最上層は黒色シルトである。最下層は地山に酷似している。

〔底面〕平滑であるが、湧水著しい。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、近在する土坑類と諸特徴に共通性が認められることから縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK205土坑（第44図、写真図版38）

〔位置〕L区南端中央に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒褐色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、SK213が比較的近在する。

〔軸角〕長軸は北西方向を指向する。

〔形態・規模〕溝状の平面形態を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸3.63m、短軸0.37m、深さは79.4cmを測る。

〔埋土〕最上層および最下層に黒褐色シルトが堆積しているが、その他の層は地山に酷似している。

〔底面〕ほぼ平滑である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK211土坑（第45図、写真図版40）

〔位置〕L区南端中央に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕SB205の柱穴（SP346）と重複しており、これに切られている。

〔軸角〕長軸はほぼ西方向を指向するがやや北へ振れている。

〔形態・規模〕溝状の平面形態を呈する。壁は遺構上部まではほぼ垂直に立ち上がり、上端は幅が広がるロート状である。長軸2.68m、短軸0.59m、深さは90.3cmを測る。

〔埋土〕最上層および最下層に黒色シルトが堆積しているが、その他の層は地山に酷似している土に地山ブロックが混じる。

〔底面〕ほぼ平滑である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK213土坑（第45図、写真図版40）

〔位置〕L区南端中央に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒褐色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕SB207の柱穴（SP225）、SB208の柱穴（SP222）とそれぞれ重複しており、これに切られている。

〔軸角〕長軸はほぼ西方向を指向するがやや北へ振れている。

〔形態・規模〕溝状の平面形態を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸3.41m、短軸0.28m、深さは48.8cmを測る。

〔埋土〕最上層および最下層に黒褐色シルトが堆積しているが、その他の層は地山に酷似している層と黒褐色土の互層である。

〔底面〕ほぼ平滑である。底面は堅致な花崗岩風化層の基盤である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK214土坑（第45図、写真図版40）

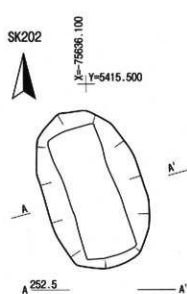
〔位置〕L区北東側に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒褐色の円形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕長軸はほぼ北方向を指向する。

〔形態・規模〕やや不整な楕円形を呈する。長軸1.12m、短軸0.96m、深さは53.3cmを測る。

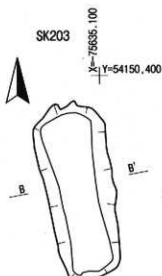


A 252.5

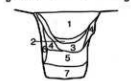


SK202

- 1 10YR2/1 黒色シルト (締まり強、火山灰BL混)
 2 10YR3/3 暗褐色シルト (やや粘質)
 3 10YR2/3 黒褐色シルト (粗粒砂混)
 4 10YR4/4 褐色シルト (やや粘質、湯水顯著)

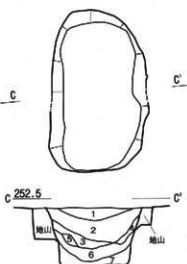
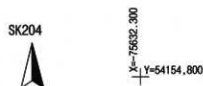


B 252.5



SK203

- 1 10YR2/1 黒色シルト
 (やや粘質、火山灰BLのような混入物あり)
 2 10YR2/3 黒褐色シルト (微粒砂少量混、締まりなし)
 3 10YR3/3 暗褐色シルト (やや粘質、締まりなし)
 4 10YR3/4 暗褐色シルト (中粒砂少量混)
 5 10YR3/2 黒褐色シルト (やや粘質)
 6 10YR2/1 黒色シルト (締まりなし、腐植土?)
 7 10YR3/4 暗褐色シルト (花崗岩風化粗粒砂混)

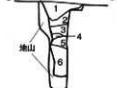


SK204

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト (粗粒砂少量混)
 2 10YR3/3 暗褐色シルト (中粒砂混)
 3 10YR3/2 黒褐色シルト (やや粘質)
 4 10YR4/4 褐色粘質シルト (締まりなし)
 5 10YR4/4 褐色粘質シルト (中粒砂混)
 6 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (中粒砂混)
 7 10YR4/4 褐色粘質シルト (粗粒砂少量混、締まりなし)



D 254.0



SK205

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (やや粘質)
 2 10YR4/4 褐色粘質シルト (中粒砂混)
 3 10YR4/6 褐色シルト (中粒砂混)
 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト (粗粒砂混)
 5 10YR6/2 灰黄褐色シルト (粗粒砂混)
 6 10YR2/2 黒褐色シルト (粗粒砂少量混)

0 1:40 2m

第44図 土坑 (SK202-205)

〔埋土〕最上層が黒褐色シルトであるほかは比較的明るい色調の堆積土である。最下層は地山に酷似しており判別が難しいが、地山よりもやや粘質傾向である。

〔底面〕北東に向けやや下る底面を有する。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、M区に位置する陥し穴類と埋土に共通性が認められることから縄文時代の土坑である可能性が高いが、性格は不明である。

SK217土坑（第46図、写真図版41）

〔位置〕L区中央やや東寄りに位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において褐色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕長軸はほぼ西方向を指向する。

〔形態・規模〕溝状の平面形態を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸2.70m、短軸0.17m、深さは49.8cmを測る。

〔埋土〕明るい色調の堆積土と暗い色調の堆積土が互層となっており、最下層は地山の花崗岩風化層起源の堆積土である。

〔底面〕ほぼ平滑である。底面は堅致な花崗岩風化層の基盤である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK219土坑（第45図、写真図版41）

〔位置〕L区東側に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黄褐色の半円形プランを検出した。

〔重複関係〕SK220と重複しており、これに切られている。

〔軸角〕ほぼ正方位を指向するが、軸角は不明である。

〔形態・規模〕やや不整な円形を呈する。東西長0.99m、南北長0.87m、深さは28.0cmを測る。

〔埋土〕最上層はSK220に切られている。全体的に明るい色調の堆積土であるが、埋土中に少量の炭化物が認められる。

〔底面〕丸みを帯びている。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、M区に位置する陥し穴類と埋土に共通性が認められることから縄文時代の土坑である可能性が高いが、性格は不明である。

SK220土坑（第45図、写真図版41）

〔位置〕L区東側に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒褐色の楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕SK119と重複しており、これを切っている。

〔軸角〕長軸はほぼ東西を指向する。

〔形態・規模〕やや不整な楕円形を呈する。長軸1.70m、短軸0.55m、深さは20.4cmを測る。

〔埋土〕 黒褐色シルトの単層である。

〔底面〕 丸みを帯びており、SK219最底面まで及ばない。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であり、同時に性格も不明である。断定はできないが、埋土の様子から縄文時代の可能性が考えられる。

SK221土坑（第47図、写真図版41）

〔位置〕 L区南端に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒褐色の楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕 SB208の柱穴（SP226）と重複しており、これに切られている。

〔軸角〕 長軸はほぼ北方向を指向するが、やや西に振れる。

〔形態・規模〕 やや不整な楕円形を呈する。長軸1.32m、短軸1.04m、深さは52.2cmを測る。

〔埋土〕 最上層が黒褐色シルトであるほかは比較的明るい色調の堆積土である。最下層は地山に酷似しており判別が難しいが、地山よりもやや粘質傾向である。

〔底面〕 丸みを帯びており、平坦な部分はほとんどみられない。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、M区に位置する陥し穴類やSK214と埋土に共通性が認められることから縄文時代の土坑である可能性が高いが、性格は不明である。

SK224土坑（第46図、写真図版42）

〔位置〕 P区ほぼ中央に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複しておらず、近在する遺構もみられない。

〔軸角〕 長軸はほぼ北方向を指向するが、やや西に振れている。

〔形態・規模〕 溝状の平面形態を呈し、南北の両側壁は垂直、東西の両側壁はV字形に立ち上がる。

長軸3.30m、短軸0.31m、深さは60.3cmを測る。

〔埋土〕 明るい色調の堆積土と暗い色調の堆積土が互層となっており、最下層は地山起源の堆積土である。

〔底面〕 ほぼ平滑であるが非常に狭い幅である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK225土坑（第47図、写真図版43）

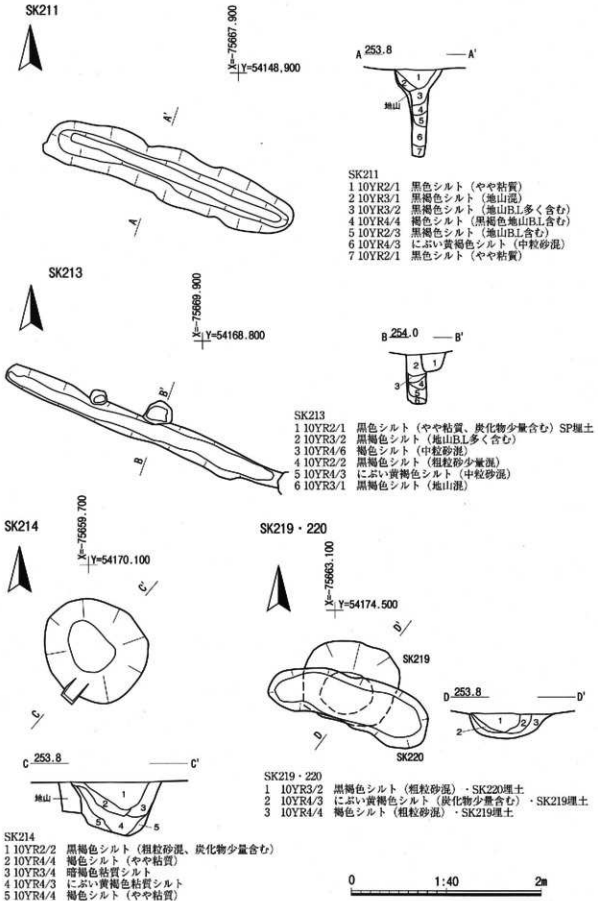
〔位置〕 M区北側に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒色の楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕 長軸はほぼ北西方向を指向する。

〔形態・規模〕 平面長方形である。長軸1.95m、短軸0.74m、深さは68.5cmである。



第45図 土坑 (SK211・213・214・219・220)

〔埋土〕最上層はやや粘質の黒色シルトである。埋土中位は地山ブロックを含む堆積層である。

〔底面〕ほぼ平滑であるが、西側に向けやや傾斜する。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK226土坑（第46図、写真図版42）

〔位置〕P区東側に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕長軸はほぼ北方向を指向するが、やや西に振れている。

〔形態・規模〕溝状の平面形態を呈し、南北の両側壁は垂直、東西の両側壁はV字形に立ち上がる。

長軸3.36m、短軸0.66m、深さは69.2cmを測る。

〔埋土〕明るい色調の堆積土と暗い色調の堆積土が互層となっており、最下層は地山起源の堆積土である。

〔底面〕ほぼ平滑であるが非常に狭い幅である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK227土坑（第47図、写真図版43）

〔位置〕P区北東に位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒褐色の不整な溝状プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕長軸はほぼ北西方向を指向する。

〔形態・規模〕溝状の平面形態を呈する。長軸3.57m、短軸0.35m、深さは46.4cmを測る。

〔埋土〕明るい色調の堆積土と暗い色調の堆積土が互層となっており、最下層は地山の花崗岩風化層起源の堆積土である。

〔底面〕細かな凹凸が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK228土坑（第47図、写真図版43）

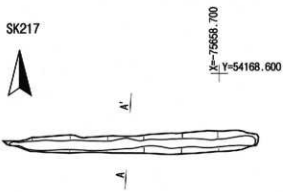
〔位置〕Q区中央やや南寄りに位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の楕円形のプランを検出した。

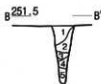
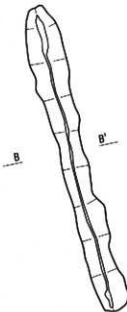
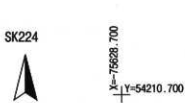
〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、SK229が比較的近在する。

〔軸角〕長軸はほぼ北方向を指向する。

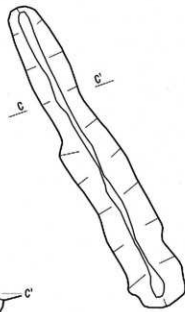
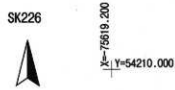
〔形態・規模〕楕円形～隅丸長方形の平面形態を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、中位で外に開く。長軸2.65m、短軸1.30m、深さは67.7cmを測る。



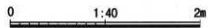
- SK217
- 1 10YR4/4 褐色シルト (粗粒砂微量混)
 - 2 10YR4/6 褐色シルト (中粒砂混)
 - 3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト (粗粒砂多く混)
 - 4 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)
 - 5 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (締まりなし)
 - 6 10YR6/2 灰黄褐色シルト質砂 (締まりなし)



- SK224
- 1 10YR2/1 黒色シルト
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
 - 4 10YR3/1 黒褐色シルト (中粒砂混)
 - 5 10YR4/4 褐色シルト (中粒砂混)



- SK226
- 1 10YR2/1 黒色シルト (中粒砂混)
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト (粗粒砂混)
 - 3 10YR2/1 黒色シルト (地山B.L含む)
 - 4 10YR2/2 黒褐色シルト (やや粘質)
 - 5 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)



第46図 土坑 (SK217・224・226)

〔埋土〕最上層および最下層に黒褐色シルトが堆積しているが、その他の層は地山に酷似している。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK229土坑（第48図、写真図版43）

〔位置〕Q区中央やや南寄りに位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の不整な楕円形のプランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、SK228が比較的近在する。

〔軸角〕長軸はほぼ北西方向を指向する。

〔形態・規模〕隅丸長方形の平面形態を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、中位で外に開く。長軸2.23m、短軸1.14m、深さは70.2cmを測る。

〔埋土〕最上層に黒色シルトが堆積しているが、その他の層は黒褐色～暗褐色シルトを主体とする。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK230土坑（第48図、写真図版43）

〔位置〕Q区中央やや南寄りに位置する。

〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の不整な楕円形のプランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕長軸はほぼ北西方向を指向する。

〔形態・規模〕隅丸長方形の平面形態を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、中位で外に開く。長軸2.32m、短軸1.14m、深さは79.8cmを測る。

〔埋土〕最上層に黒色粘質シルトが堆積しているが、その他の層は黒褐色～暗褐色シルトを主体とする。最下層は開口部の崩落土であると考えられる。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK231土坑（第48図、写真図版44）

〔位置〕Q区東側に位置する。

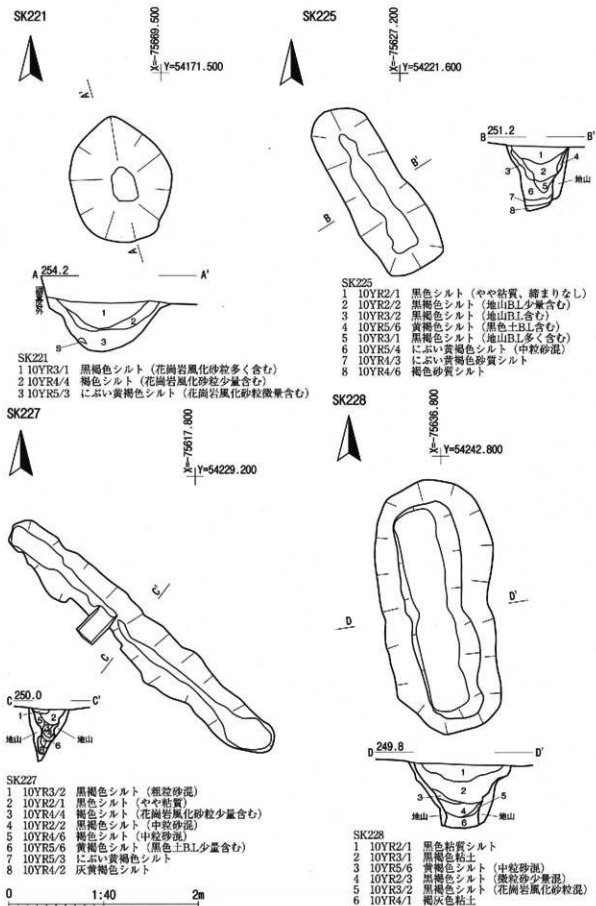
〔検出状況〕I層直下のIV層上面において黒色の円形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、植物等の攪乱により上部は若干乱されている。

〔軸角〕軸方向は不明である。

〔形態・規模〕やや不整な円形を呈する。東西長1.40m、南北長1.11m、深さは39.8cmを測る。

〔埋土〕最上層は黒色シルトである。埋土下層は粘質シルトが堆積している。



第47図 土坑 (SK221・225・227・228)

〔底面〕 ほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、縄文時代の土坑である可能性が高い。

SK232土坑（第49図、写真図版44）

〔位置〕 R区東側に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のII層上面（黒色シルト）において黒色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕 長軸はほぼ北方向を指向するが、やや東に振れている。

〔形態・規模〕 溝状の平面形態を呈し、南北の両側壁は垂直、東西の両側壁は遺構上部まではほぼ垂直に立ち上がり、上端の幅が広がるロート状である。長軸3.84m、短軸0.69m、深さは72.5cmを測る。

〔埋土〕 最下層にグライ化した粘土が堆積している以外は黒色土と黒褐色土の互層である。明るい色調の堆積土は含まれない。

〔底面〕 ほぼ平滑であるが非常に狭い幅である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK233土坑（第49図、写真図版45）

〔位置〕 Q区中央やや北寄りに位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIII層上面において褐色の溝状のプランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複していないが、遠野市教育委員会の試掘調査で西側の一部が調査されている。

〔軸角〕 長軸はほぼ西方向を指向するが、やや北に振れている。

〔形態・規模〕 溝状の平面形態を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸2.81m、短軸0.47m、深さは61.1cmを測る。

〔埋土〕 最下層以外は暗い色調の堆積土が主体となっており、最下層は地山起源の堆積土である。この最下層は自然流入土であると考えられる。

〔底面〕 ほぼ平滑である。底面はやや湧水する。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

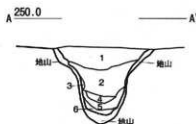
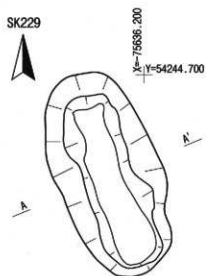
〔時期〕 出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK234土坑（第49図、写真図版45）

〔位置〕 L区北端～M区南端に位置する。

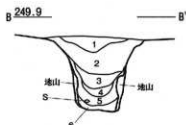
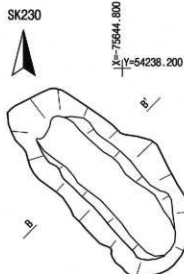
〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において褐色の溝状のプランを検出した。検出面は近現代の水田造成による切り段が顕著に認められるため、遺構南半は上段、北半は下段とそれぞれ段違いでみられる。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複していない。



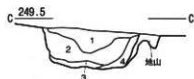
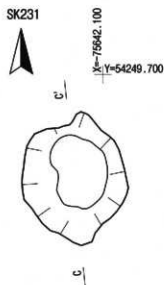
SK229

- 1 10YR2/1 黒色シルト
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト (花崗岩風化砂粒混)
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト (中粒砂混)
- 5 10YR2/3 黒褐色シルト (礫まりなし)
- 6 10YR4/1 褐灰色粘質シルト



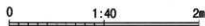
SK230

- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト (地山BL少量含む)
- 4 10YR3/4 暗褐色シルト (やや粘質、花崗岩風化砂粒含む)
- 5 10YR4/6 褐色シルト (花崗岩風化砂粒少量含む)
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト (やや粘質)



SK231

- 1 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト (中粒砂混)
- 3 10YR2/1 黒色粘質シルト
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト



第48図 土坑 (SK229-231)

〔軸角〕長軸はほぼ北方向を指向するが、やや東に振れている。

〔形態・規模〕溝状の平面形態を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸2.32m、短軸0.19m、深さは上段部で69.9cmを測り、下段部は20cm以下である。

〔埋土〕明るい色調の堆積土と暗い色調の堆積土が互層となっており、最下層は地山ブロックを微量に含む。

〔底面〕ほぼ平滑である。下段の底面はやや湧水が著しい。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、諸属性から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。

SK235土坑（第49図、写真図版45）

〔位置〕L区北東に位置する。

〔検出状況〕I層直下のⅢ層上面において褐色の不整な楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕SP232と重複しており、これに切られている。また、SK236・237が近在する。

〔軸角〕長軸はほぼ北東方向を指向する。

〔形態・規模〕楕円形の平面形態を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。長軸1.21m、短軸0.89m、深さは12.1cmを測る。

〔埋土〕締まりのない褐色シルトが主体である。

〔底面〕やや丸みを帯びている。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、縄文時代の土坑である可能性が高い。

SK236土坑（第49図、写真図版45）

〔位置〕L区北東に位置する。

〔検出状況〕I層直下のⅢ層上面において褐色の不整な楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、SK235・237が近在する。

〔軸角〕長軸はほぼ北方向を指向する。

〔形態・規模〕楕円形の平面形態を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。長軸1.11m、短軸0.81m、深さは18.5cmを測る。

〔埋土〕締まりのない褐色シルトが主体である。

〔底面〕やや丸みを帯びており、中央付近が窪む。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕出土遺物が無いため詳細な時期を特定することは困難であるが、縄文時代の土坑である可能性が高い。

SK237土坑（第49図、写真図版45）

〔位置〕L区北東に位置する。

〔検出状況〕I層直下のⅢ層上面において褐色の不整な楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していないが、SK234・235が近在する。

【軸角】長軸はほぼ北東方向を指向する。

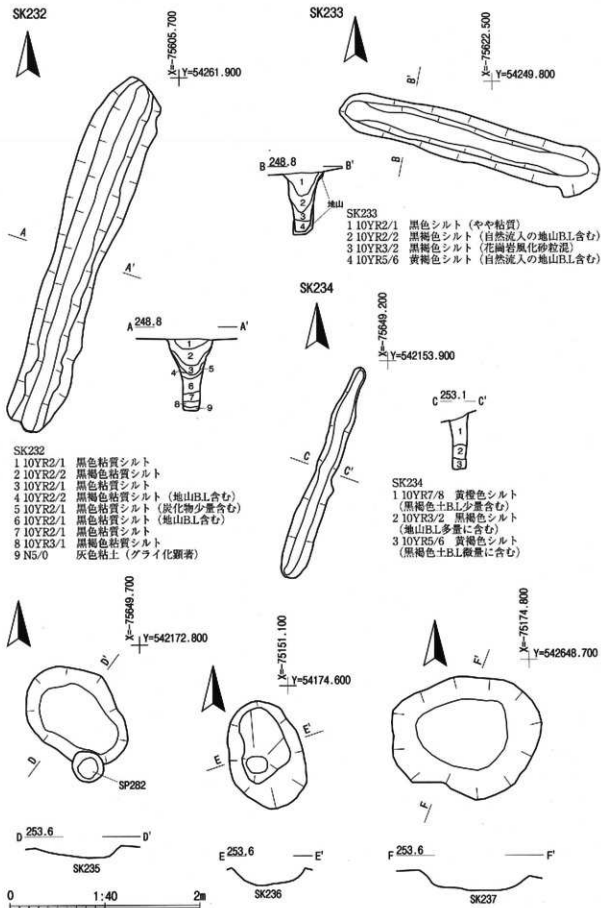
【形態・規模】楕円形の平面形態を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。長軸1.21m、短軸0.89m、深さは19.6cmを測る。

【埋土】締まりのない褐色シルトが主体である。

【底面】やや丸みを帯びている。

【出土遺物】縄文土器（前期）がまとめて出土した。

【時期】出土遺物から縄文時代前期の土坑である可能性が高い。



第49図 土坑 (SK232~237)

(4) 性格不明遺構

SX201性格不明遺構 (第50図、写真図版46)

〔位置〕 L区東側に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において褐色の楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕 SB210・212の2棟の掘立柱建物プランと重複する。これらを構成する柱穴とは直接切り合いが認められないため、新旧の判断はできない。

〔軸角〕 長軸は北東方向を指向する。

〔形態・規模〕 平面楕円形を呈する。長軸2.47m、短軸1.62m、深さは10.1cmである。

〔埋土〕 比較的締まりのある単層の褐色シルトである。

〔底面〕 ほほ平滑であり、壁に向け緩やかに立ち上がる。

〔出土遺物〕 縄文時代の石匙が埋土中より3点出土した。周辺での出土遺物は少ないが、この遺構は石器が3点も集中して出土するため、この遺構と遺物が密接に関わりを持っていると考えられる。

〔時期〕 出土遺物から縄文時代の遺構であると考えられる。

SX202性格不明遺構 (第50図、写真図版46)

〔位置〕 N区中央に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒色の円形プランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕 長軸は北西方向を指向する。

〔形態・規模〕 平面楕円形を呈する。長軸3.22m、短軸2.66m、深さは31.5cmである。

〔埋土〕 上下2層からなる黒色シルトの自然堆積層である。

〔底面〕 平坦な部分は少なく丸みを帯びた底面であり、壁に向け緩やかに立ち上がる。

〔出土遺物〕 微細な縄文土器片が埋土中より1点出土した。

〔時期〕 時期は不明である。

SX203性格不明遺構 (第50図、写真図版46)

〔位置〕 Q区北側に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒色の円形プランを検出した。

〔重複関係〕 他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕 長軸は北西方向を指向する。

〔形態・規模〕 平面楕円形を呈する。長軸1.51m、短軸1.44m、深さは12.4cmである。

〔埋土〕 単層の黒褐色シルトの自然堆積層である。

〔底面〕 平坦な底面であり、壁に向け緩やかに立ち上がる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 時期は不明である。

SX204性格不明遺構 (第50図、写真図版46)

〔位置〕 N区中央に位置する。

〔検出状況〕 I層直下のIV層上面において黒色の楕円形プランを検出した。

〔重複関係〕他の遺構とは重複していない。

〔軸角〕長軸は北西方向を指向する。

〔形態・規模〕平面楕円形を呈する。長軸1.66m、短軸1.12m、深さは20.5cmである。

〔埋土〕単層の黒褐色シルトの自然堆積層である。

〔底面〕平坦な部分は少なく丸みを帯びた底面であり、壁に向け緩やかに立ち上がる。

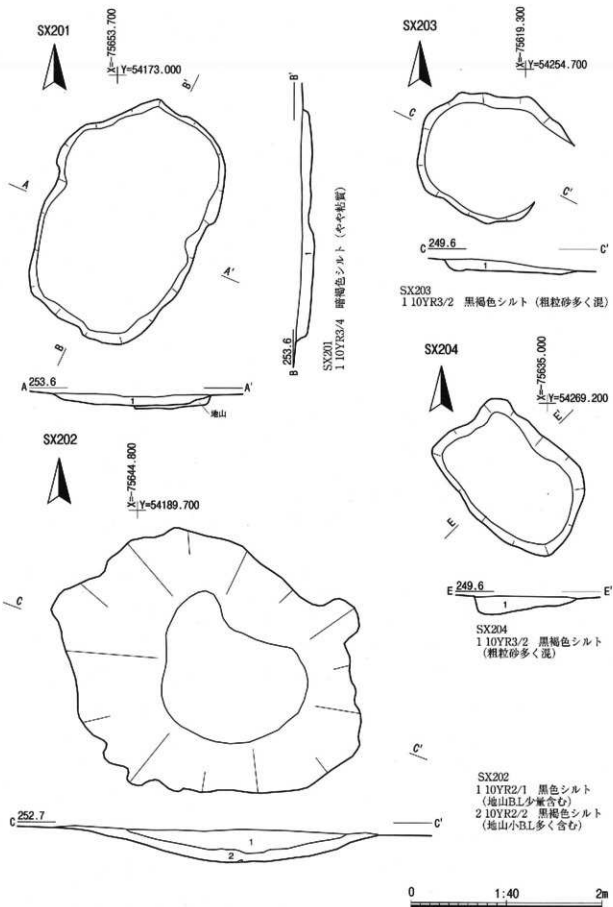
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

〔時期〕時期は不明である。

表3 近現代の遺構一覧（第2次調査）

遺構名	写真図版	位置	平面形態	規模 (cm)			埋土	底面の状況	備考
				長軸長	短軸長	深さ			
SK201	-	L区	円	136	129	35	青灰色土に様々なB.L.	平滑で桶の木質痕跡あり	水溜めあるいは肥溜め?
SK206	39	L区	不整形円	97	*91	30	黒褐色土に地山B.L.	平滑	植栽痕跡?
SK207	39	L区	円	315	*147	12	灰黄褐色土に地山B.L.	平滑	
SK208	39	L区	円	106	*90	19	黒色土に地山B.L.	平滑	
SK209	39	L区	円	111	100	9	灰黄褐色土に地山B.L.	平滑	
SK210	39	L区	円	106	103	47	青灰色土に様々なB.L.	平滑で桶の木質痕跡あり	水溜めあるいは肥溜め?
SK212	40	L区	円	96	90	19	灰黄褐色土に地山B.L.	平滑	
SK215	41	L区	円	75	*73	10	黄褐色土	細かな凹凸顯著	
SK216	41	L区	円	97	91	24	灰黄褐色土に地山B.L.	細かな凹凸顯著	
SK218	41	L区	不整形円	164	118	27	褐灰色土	細かな凹凸顯著	植物の掘込み痕跡?
SK222	42	L区	不整形円	103	65	21	黒色土に地山B.L.	小規模凹みあり	植栽痕跡?
SK223	42	L区	不整形円	92	80	27	黒色土に地山B.L.	凹凸顯著	植栽痕跡?
SD201	-	L区	直線	3277	79	19	灰黄褐色土に地山B.L.	丸みを帯びる	旧水田区画の暗きよ?

*付き数字は残存量を示す。



第50図 性格不明遺構 (SX201~204)

3 出土遺物

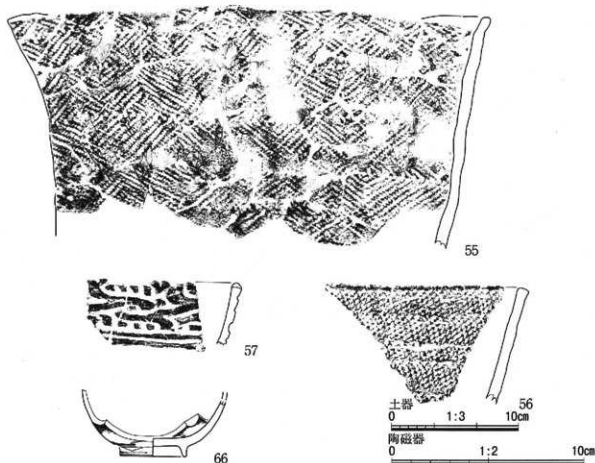
(1) 土器

縄文土器 (第51図、写真図版50)

55はSK237埋土中で割れて重なった状態で出土した深鉢である。体部上半のみの残存であるが、上半部は全周残存している。わずかに外傾する体部であるが、体部と口縁部との境界は不明瞭である。口縁部は外傾が比較的強くなり、場所によっては外反する。口縁部は器面の調整がほとんどみられず、粗雑な作りである。器形全体に歪みが大きく細部の器形は一定ではない。外面には全面的に縄文が施されており、羽状縄文となっており、胎土には繊維を含んでいる。器表面は摩滅しており、破面も丸みを帯びている。これは焼成がやや不良であることもその要因の一つであると推測される。諸属性を鑑みると縄文時代前期前葉頃に属する土器であると考えられる。

56はR区北西の調査区境、黒色土層(Ⅱ層)上面より出土した縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁部は端面を持ち、縄文が施されている。口縁端部の縄文は、体部の縄文原体と共通すると思われるが、回転施文よりも原体圧痕である可能性が高い。体部器表面には全面縄文が施されており、胎土には多量の繊維の混入が認められる。また、体部の縄文は横回転の施文方法であるとみられる。諸属性を鑑みると縄文時代前期初頭～前葉頃に属する土器であると考えられる。

57はSI201検出面より出土した縄文土器深鉢片である。遺構に直接伴う遺物ではなく、混入遺物で



第51図 第2次調査出土遺物(1)

あると考えられる。口縁部には小突起が認められ、体部の文様と連続する。体部の文様は、笠形文と半歯状文によって構成されている。胎土は精良で焼成も良好で赤褐色の色調である。縄文時代晩期大洞BC式期のものであると考えられる。

古代の土器（第52図、写真図版50・51）

58はSI203カマド付近の床面より出土した土師器坏片である。ロクロによる調整と内面に黒色処理が施されている。また、内面には横方向のミガキ調整が施されている。口縁部外面は焼成時の黒斑が広く認められる。9世紀後半～10世紀初頭頃に属する土器であると考えられる。

59はSI203カマド付近の床面より出土した土師器甕である。口縁部から体部の破片であるため全体の形状は不明である。ロクロによる調整が施されていると思われる。色調は赤みを帯びた橙色であるが、本来の色調ではない可能性も考えられる。これは器表面、特に外面に細かな単位の剥離が認められることから二次的に被熱していることも考えられるためである。底部は出土していないが、転用された支脚であった可能性も考えられる。9世紀後半～10世紀初頭頃に属する土器であると考えられる。

60はSI203を切る土坑（SI203-K2）最下層より出土した土師器である。小形の不整形形態を呈する土器である。器の形は成しているものの粗雑な作りである。調整らしい調整はみられず、内外面に多くの指頭圧痕を残している。詳細な時期および用途についても不明であるが、61・62などの土師器と併存していることを積極的評価すれば、9世紀後半～10世紀初頭に位置付けられる。

61はSI203を切る土坑（SI203-K2）最下層より出土した土師器坏である。約半分残存している。ロクロによる調整と内面に黒色処理が施されている。また、内面にはミガキ調整が施されている。ミガキの方向は放射状に縦方向施された後、上半のみ横方向のミガキが施されている。底部は回転糸切り後無調整である。胎土は非常に精良で細かい。9世紀後半～10世紀初頭頃に属する土器であると考えられる。

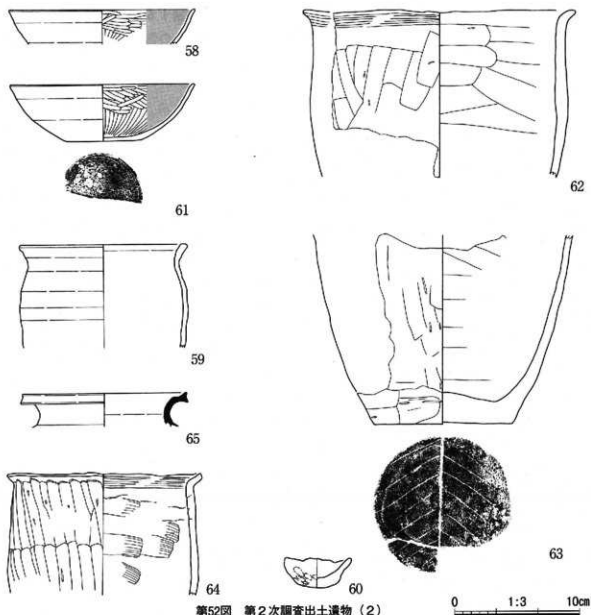
62・63はSI203を切る土坑（SI203-K2）最下層より出土した土師器甕である。両者は接点こそ認められないが、同一個体であると考えられる。器壁に厚みがあり、特に底部は非常に厚手である。調整は判然としなが、外面の器表面において砂粒が動いている点を考慮するとヘラケズリが施されているものとみられる。さらに、その調整を覆うように外面には焼成後に黄褐色を呈する泥炭状のスリップが施されている。調整にロクロは用いられていないと考えられ、底部には広葉樹の木葉痕が認められる。9世紀後半～10世紀初頭頃に属する土器であると考えられる。

64はSI204埋土出土の土師器甕である。口縁部は小さく折り曲げられているのみで、粗雑な作りである。外面は縦方向のヘラケズリが施されている。内面には粘土糺の積み上げ痕跡が明瞭に認められ、内面調整が弱く、口縁部のヨコナデもほとんど認められない。胎土は砂粒を多く含み、色調は茶褐色である。9～10世紀に属する土器であると考えられる。

65は須恵器壺の口縁部片である。口縁端部の形態は下方に垂下する形態である。調査区東端部の湿地堆積層から出土した。表面は濃い青灰色を呈し、硬く焼かれている。全体形が不明であるため詳細な時期を特定することは難しいが、9～10世紀前半頃の須恵器であると考えられる。

磁器（第51図、写真図版51）

66はSD201より出土した磁器片である。近現代のものであると考えられる。



第52図 第2次調査出土遺物(2)

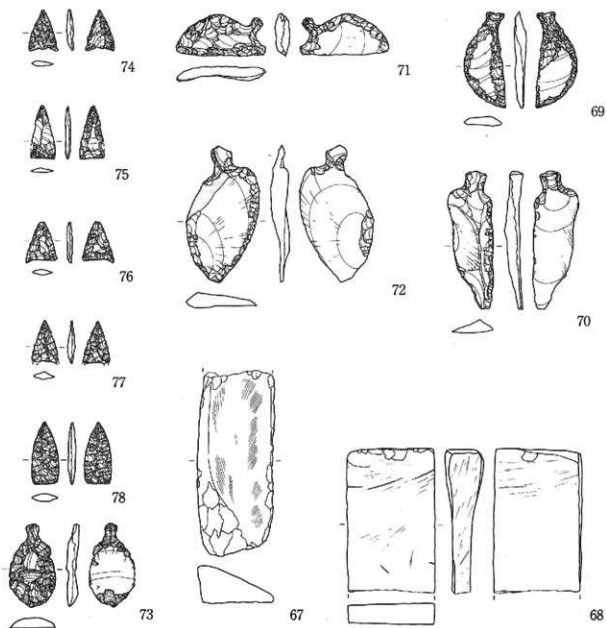
石製品 (第53図、写真図版51)

67・68は掘立柱建物の柱穴より出土した砥石である。いずれも砂岩質で磨り面は滑らかである。無数の擦痕も確認できる。時期は不明であるが、仕上げ用の砥石であると考えられる。

石器 (第53図、写真図版52)

69～73は石匙である。いずれも北上山地の頁岩製であり、71が横長形態である以外はすべて縦長形態である。69はSK232埋土上層、70・72・73はSX201埋土、71はSP425掘方埋土よりそれぞれ出土した。

74～78は石鏃である。いずれも北上山地の頁岩製であり、無茎鏃に分類できる。74はQ区南東黒色土(低地部分)、75はSX204埋土、76はQ区南暗褐色土(低地部分)、77はN区検出面、78は表土～検出面よりそれぞれ出土した。



第53圖 第2次調査出土遺物(3)

表4 掲載遺物一覧(第2次調査)

掲載No.	類別	器種	寸法 (cm)			出土遺構・出土地点	備考
			口径 /長さ	器高 /幅	底径 /厚さ		
55	縄文土器	深鉢	38.0	18.5	-	SK237 塚上	織物少量混入
56	縄文土器	深鉢	-	9.4	-	R区北内検出黒色土(Ⅱ層)	織物多量混入
57	縄文土器	不明	-	5.1	-	SI201 検出面	晚期漆形文・羊歯状文
58	土師器	杯	14.8	2.8	-	SI203 カマド付近床面直上	ロクロ調整、内面黒色処理
59	土師器	壺	13.4	8.2	-	SI203 カマド付近床面直上	ロクロ調整
60	土師器	不明	5.4	2.4	-	SI203-K2 埋土最下層	手づくねミニチュア?
61	土師器	杯	14.8	4.5	6.0	SI203-K2 埋土最下層	ロクロ調整、内面黒色処理
62	土師器	壺	21.6	13.3	-	SI203-K2 埋土最下層	63と同一個体
63	土師器	壺	-	15.1	10.8	SI203-K2 埋土最下層	62と同一個体
64	土師器	壺	16.1	9.7	-	SI202 塚上	
65	須恵器	蓋	13.0	2.9	-	調査区東端黒色土(低地部分)	
66	磁器	碗	-	5.2	5.0	L区表土	
67	石製品	砥石	9.8	4.0	2.0	SP305 埋土上層	砂岩製
68	石製品	砥石	7.6	4.7	2.1	N区水路帯表土	砂岩製
69	湖片石器	石匙	5.1	2.2	0.6	SK232 埋土上層	頁岩
70	湖片石器	石匙	7.3	2.5	1.0	SX201 埋土	頁岩
71	湖片石器	石匙	2.3	4.7	0.8	SP426 掘方埋土	頁岩
72	湖片石器	石匙	7.4	3.9	1.0	SX201 塚上	頁岩
73	湖片石器	石匙	4.4	2.4	0.6	SX202 塚上	頁岩
74	湖片石器	石鏃	2.2	1.5	0.3	Q区南東黒色土(低地部分)	頁岩
75	湖片石器	石鏃	2.9	1.3	0.3	SX204 塚土	頁岩
76	湖片石器	石鏃	2.2	1.6	0.3	Q区南端褐色土(低地部分)	頁岩
77	湖片石器	石鏃	2.3	1.4	0.5	N区検出面	頁岩
78	湖片石器	石鏃	3.3	1.4	0.4	表上～検出面	頁岩

4 K区近世・近代の墓標

第1次調査区の一部にK区とした小区画が存在する。このK区は、その他の水田区画とは異なり、墓地となっており、発掘調査事業に行政的な手続きが間に合わず、調査を実施することができなかった。その一因として、この墓地所有者の一部が所在不明であることが挙げられる。墓地には20基を数える墓石が林立、あるいは傾倒しながら存在する。これら墓石の地下に、墓壙群が存在する可能性が考えられるが、発掘調査に至っていないので墓壙の存在は不明である。しかし、墓地所有者の一人にお願いをし、墓石の採拓をおこなう許可を得た後、採拓をおこなった。墓石の銘は肉眼観察で判読可能なものもあったが、大半の墓石は風化が著しく判読困難な状況であった。詳細は表5で示した。

20基の墓石を概観すると、判読可能な最古の紀年が、墓石1・2の「天明四年」(1784年)であり、最新の紀年が墓石17の「明治十二年」(1879年)であり、江戸時代後期～近代までの墓石群であることがわかる。

(福島)

表5 K区墓石一覽

墓石No	西暦(年)	紀年誌	通巻	戒名など	通白	寸法(cm)			石質	形状	備考
						高さ	幅	厚さ			
1	1784	天明四～十一月十七～	○	素翁道光一	欠損	*34	23	7	大理石	板状	下半部欠損
2	1784	天明四庚午十一月廿六日	○	■外高麗禪定門	線刻	82	32	18～21	花崗岩	不整な舟柱状	風化顯著で下端部薄くなっている
3	1801 1835	享和元酉年天保六未年	○	寂尊照然禪定尼仁惠淨定門	陰刻	*74	41	2～28	大理石	不整な厚板状	
4	1802	享和二戌年四月十日	○	眞長體如僧士	線刻	71	30	13～14	花崗岩	板状	碑面を凹状に成形、頂部丸形、背面成形損壊
5	1806	文化三寅年六月十八日	○	亮■孫子	線刻	54	23	8～13	花崗岩	丸みを帯びた不整形	
6	1820	文政三辰年三月十六日	○	雨林妙色禪定尼	陰刻	*64	41	16～28	大理石	不整な厚板状	
7	1824	文政七申年八月十五日	○	■以皇男	線刻	71	36	7～11	花崗岩	不整形、背面舟形	「政」は異体字、風化顯著
8	1829	文政十二丑年七月十七日	○	梵海妙音禪定尼	線刻	*83	46	8	火山岩質(青灰色)	板状	
9	1832	天保三辰年十一月廿九日	○	東光明中僧士	線刻	54	31	10～12	凝灰岩質(灰白色)	板状	
10	1839	天保十年庚辰正月十七日	○	梅林妙香禪定尼	線刻	59	21	12～14	大理石	不整な厚板状	
11	1843	天保十四年五月廿九日	○	觀勝行會禪定尼	線刻	91	19	7	凝灰岩？(青灰色)	薄板状	
12	1852	嘉永五子年九月十二日	○	那光千達僧士	線刻	*70	30	16～21	花崗岩	不整な厚板状	
13	1864	元治元甲子年七月初二日	○	柳香禪定尼	線刻	54	24	18～20	火山岩質(灰白色)	不整な厚板状	
14	1871	明治四年九月十一日	○	紅山良兼善男	陰刻	63	28	14～18	凝灰岩？	丸みを帯びる	
15	1877	明治十年丑年十月十三日	○	松岩風香善男	陰刻	68	28	11～15	大理石	不整な厚板状	
16	1878	明治十一年寅年旧八月十四日	○	智園容道善男	なし	73	23	13～15	大理石	丸みを帯びる	「行年十六才 ■長吉」
17	1879	明治十二寅年六月十八日	○	得家妙林禪尼	なし	57	30	10～12	大理石	不整な厚板状	明治12年は即年「行年六十六才 ■さと？」
18	-	紀年なし	○	水室妙清禪定尼	陰刻	83	28	7～9	大理石	やや丸みを帯びる	碑面に只圓線
19	-	紀年なし	巴	一庵了性門	なし	58	24	17～19	火成岩質(灰色)	丸みを帯びる	
20	不明	天？～二月■七日	○	普治婆子	陰刻	78	49	11～16	花崗岩	不整な板状	風化顯著



第54図 K区墓石拓本集成

VI 総 括

1 旧石器・縄文時代

(1) 遺 構

今回の発掘調査では、縄文時代の陥し穴を27基検出した。陥し穴は調査区全域にわたって散在する傾向である。陥し穴は溝状の形態のものと土坑状の形態のものに分けることができ、前者は散在傾向、後者は数地点にまとまる傾向が強い。原地形が損なわれているため地形と立地の関係性については不明な点が多いが、溝状のものは、軸方向を北から西向きの45度の範囲で取まる傾向である。また、土坑状を呈するものは北から北西方向への指向が強いようである。旧地形は1次調査区西端がもっとも高位に位置し、この地点から溝状の陥し穴が検出されない。このタイプの陥し穴は比較的低位部分に立地する傾向がある。調査区は西から東へ向けて下り傾斜が想定され、それに応じて西側より東側の地点で多く検出される。また、所々沢状低地の微地形が残存しており、このような地形が残存するエリアでは溝状陥し穴が多く認められる。本来、両タイプで狩猟の対象物である野生動物の生息域や行動範囲の差が表出している可能性が考えられる。

また、1次調査でもっとも高位面で1基の貯蔵穴が検出された。これは、近隣、特にこれより調査区外北側に居住域が存在することを示唆している。出土遺物の時期は様々であるが、もっとも多いのは縄文時代前期初頭～前葉に該当するものが多い点を考慮すると居住域はこの時期に営まれた可能性が高いと考えられる。

(2) 遺 物

出土遺物の数量は少ないながらも、後期旧石器時代のナイフ形石器が1点、縄文土器は縄文時代早期末～前期初頭の尖底土器、前期前葉の土器群、少量の中期中葉の土器、後期前葉と考えられる土器、晩期の土器などが出土しており、いくつかの時代において点的に人々の活動がみられるようである。

2 古 代

(1) 遺 構

古代の遺構としては平安時代の竪穴住居が3棟検出された。いずれも2次調査区北東に位置し、縄文時代と異なり、この時代の居住域が北に延びている可能性が考えられる。これら竪穴住居はいずれも軸方向を北東に向けている。地形を考慮するとこのエリアは南東に向けて下る傾斜であることから地形を意識して建てられた可能性が高い。また、時期は9世紀後半頃が考えられるため、古代集落の調査事例の少ない緩織地区においては希少な調査事例となった。未だ不明な点が多いが、今後同一事業において調査事例が増加すれば何らかの傾向が掴める可能性がある。

(2) 遺 物

古代の遺物では土器が主体である。竪穴住居からは土師器が出土し、須恵器は出土しなかった。土師器供膳具は黒色処理された坏が中心であり、これは周辺遺跡で出土する組成と共通する。すなわ

ち、須恵器あるいは非黒色処理の土師器供膳具は少ない傾向である。この組成は、多くの集落が調査されている北上川流域との比較によるものだが、生産と供給体制が北上川流域と異なる可能性が考えられる。供膳具以外のものでもロクロを用いた甕類は比較的少ない傾向にあり、煮沸具の主力は非ロクロの土師器甕であった可能性が考えられる。

3 中世

(1) 遺構

中世の遺構としては、掘立柱建物と竪穴建物がこの時代の遺構であると想定される。2次調査区では14棟の掘立柱建物と1棟の竪穴建物がこれに該当すると考えられる。掘立柱建物は、いずれもL区で集中して検出されたことを考えると、この地点が中世の集落あるいは関連する施設の中心域である可能性が高い。これら掘立柱建物は、東西棟と南北棟に分けられ、特に建物が集中するL区西側では両者が重複して存在する。ここではどの建物とも重複しないSB204が南北棟で独立しており、これと近在し、同一軸であるSB205・203がこれと密接に関わる建物であると考えられる。SB202は梁間1間の簡単な平面プランであるが、SB203・205はいずれも下屋部分が付属していることを考えると、これら2棟が主となる建物で、SB202がこれらに付随する建物であることが想定される。また、主となるSB203・205は重複しているため建て替えられた可能性が考えられ、同時にSB202と柱位置が符合するSB205は付属するSB202と同時期であることが想定できる。東側エリアはすべて東西棟となっており、中でもSB210は少なくとも下屋が3面に取り付く形態であることから、この遺跡において突出する建物であったと考えられる。また、この建物の南に近在するSB211も東西棟であるが、SB210とは微妙に軸が異なる。この微差をどう捉えるか難しいが、両者とも身舎内部に間柱が存在することから、現段階では規模の差があるが同じ機能を有する建物の位置をずらしての建て替えと考えたい。また、掘立柱建物は調査区南側でも一部分が検出されており、調査区外南へ建物群が展開することを示唆している。

(2) 遺物

中世の遺物は確認されなかったが、過年度調査された向Ⅱ遺跡では、中世後期と考えられる瀬戸・美濃産天目茶碗が出土しており、関連が注目される。

この時代、この地域は阿曾沼氏家臣の宇夫方氏の支配領域であり、遺跡周辺には関連する居城などが存在している。

4 まとめ

今回調査した向Ⅲ遺跡は、旧石器時代から中世に至るまでの遺構・遺物が確認された。いずれも断片的で遺跡の正しい評価を下せなかったが、今後も周辺遺跡の調査がおこなわれる予定であるため、周辺遺跡の調査が進んだ段階で一定の評価を下す必要があると考えられる。

(福島)

引用・参考文献

- 福島正和¹⁴ 2010 岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第549集『向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
 小向裕明¹⁵ 2001 遠野市縄文文化財調査報告書第12集『向Ⅱ・向Ⅲ・深沢野・新田Ⅱ・間木野遺跡』

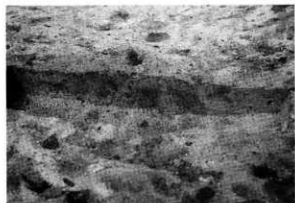
写 真 图 版



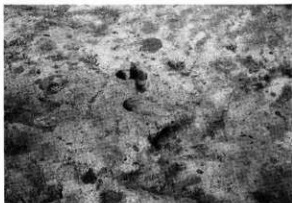
調査前現況（東から）



調査前現況（東から）



SF01焼土断面



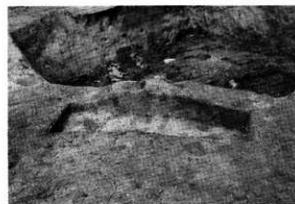
SF01焼土平面



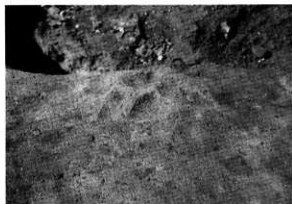
SF02焼土断面



SF02焼土平面



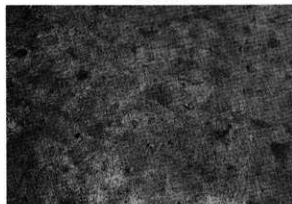
SF03焼土断面



SF03焼土平面



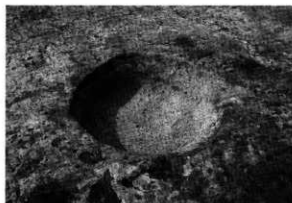
SF04焼土断面



SF04焼土平面



SK01土坑断面



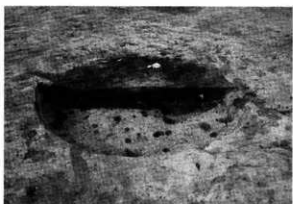
SK01土坑完掘



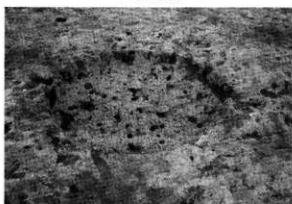
SK02土坑断面



SK02土坑完掘



SK03土坑断面



SK03土坑完掘



SK04土坑断面



SK04土坑完掘



SK05土坑断面



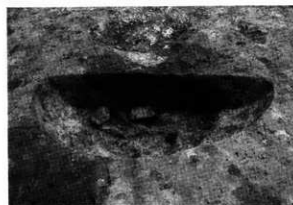
SK05土坑完掘



SK05土坑断面



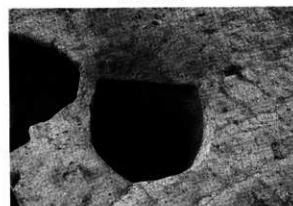
SK05土坑完掘



SK06土坑断面



SK06土坑完掘



SK07土坑断面



SK07土坑完掘

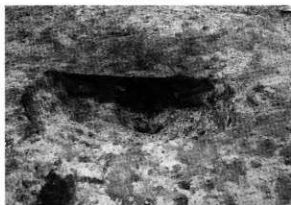
写真图版 4 土坑 (SK05~07)



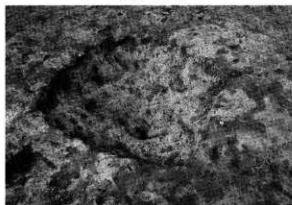
SK08土坑断面



SK08土坑完掘



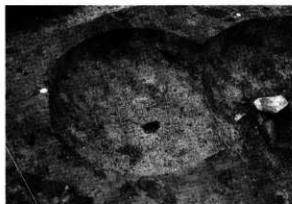
SK09土坑断面



SK09土坑完掘



SK10土坑断面



SK10土坑完掘



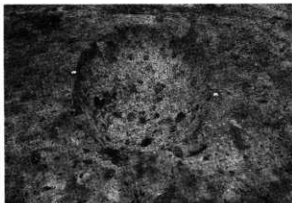
SK11土坑断面



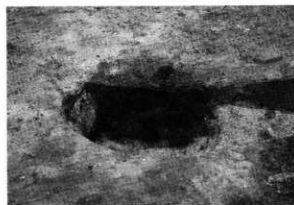
SK11土坑完掘



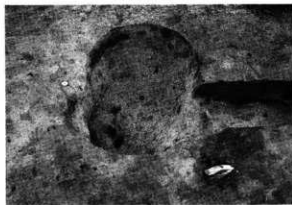
SK12土坑断面



SK12土坑完掘



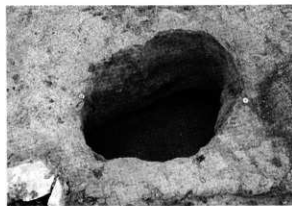
SK13土坑断面



SK13土坑完掘



SK14土坑断面



SK14土坑完掘



SK15土坑断面



SK15土坑完掘

写真図版6 土坑 (SK12~15)



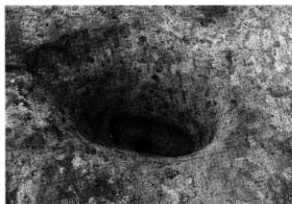
SK16土坑断面



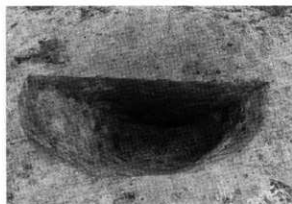
SK16土坑完掘



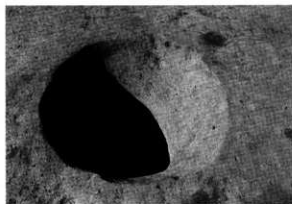
SK17土坑断面



SK17土坑完掘



SK18土坑断面



SK18土坑完掘



SK19土坑断面



SK19土坑完掘



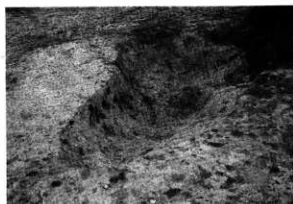
SK20土坑断面



SK20土坑完掘



SK21土坑断面



SK21土坑完掘



SK22土坑断面



SK22土坑完掘



SK23土坑断面



SK23土坑完掘

写真図版 8 土坑 (SK20~23)



SK24土坑断面



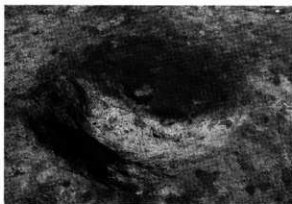
SK24土坑完掘



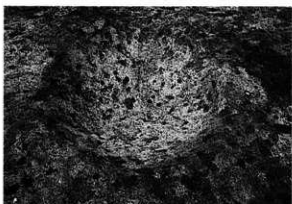
SK26土坑断面



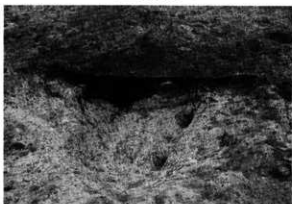
SK26土坑完掘



SK27土坑断面



SK27土坑完掘



SK29土坑断面



SK29土坑完掘



SK30土坑断面



SK30土坑完掘



SK31土坑断面



SK31土坑完掘



SK32土坑断面



SK32土坑完掘



SK33土坑断面



SK33土坑完掘



SK35土坑断面



SK35土坑完掘



SK36土坑断面



SK36土坑完掘



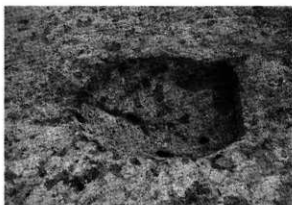
SK37土坑断面



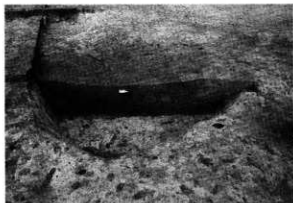
SK37土坑完掘



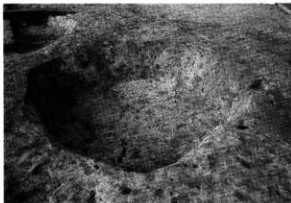
SK38土坑断面



SK38土坑完掘



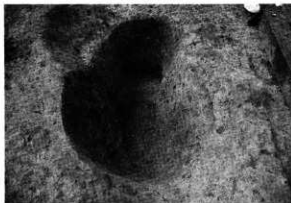
SK39土坑断面



SK39土坑完掘



SK40土坑断面



SK40土坑完掘



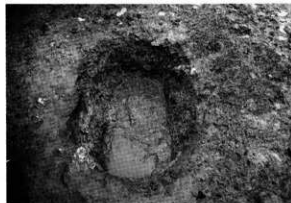
SK41土坑断面



SK41土坑完掘



SK42土坑断面



SK42土坑完掘



SK43土坑断面



SK43土坑完掘



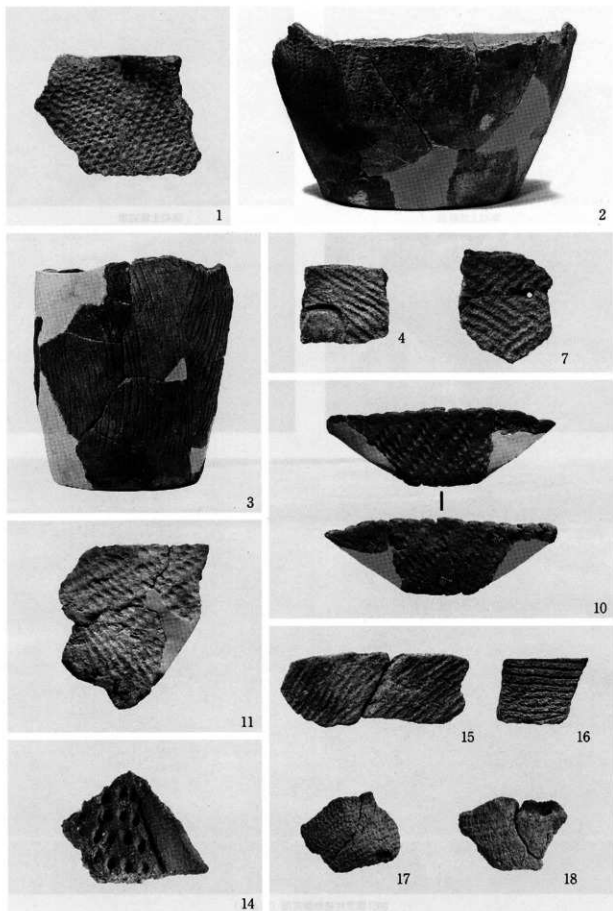
SD01溝断面



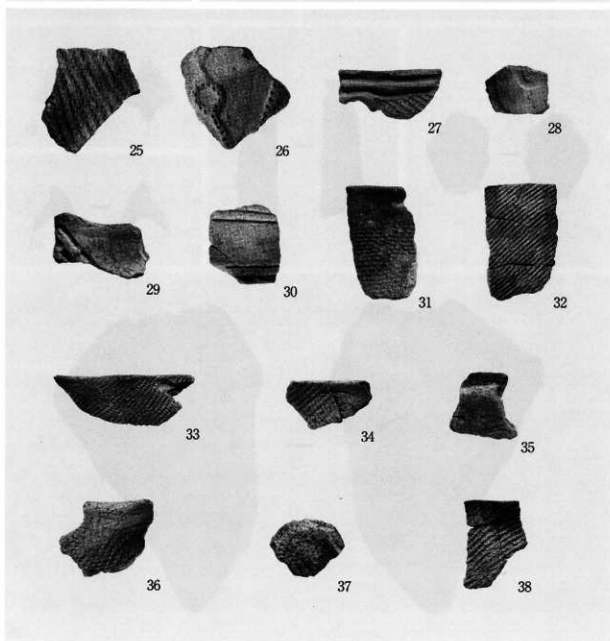
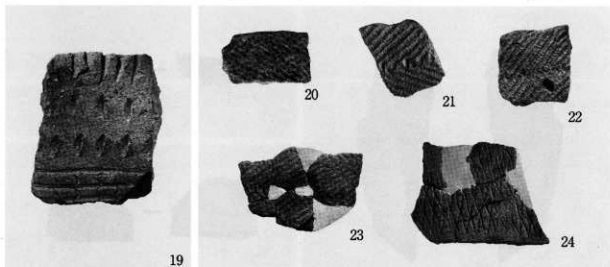
SD01溝完掘



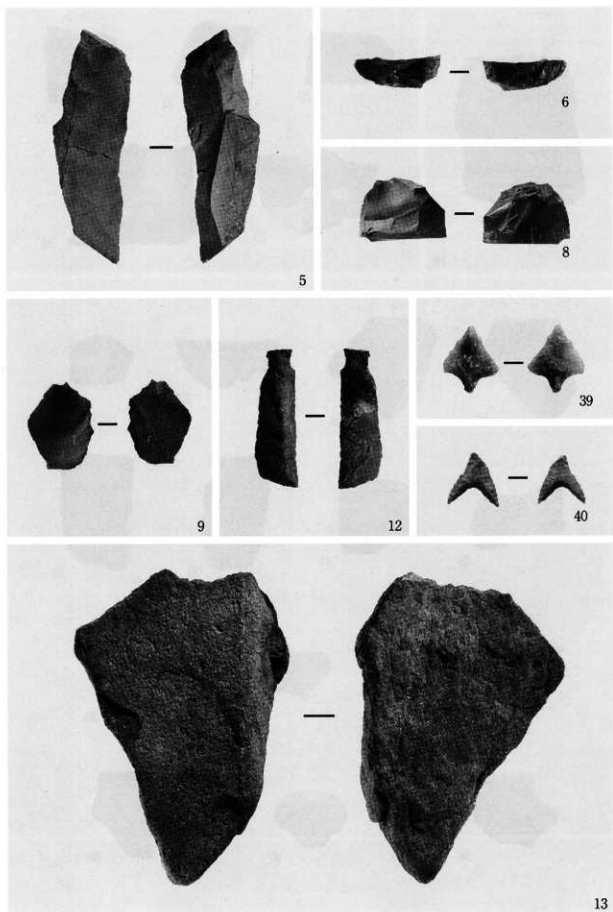
SB01掘立柱建物跡完掘(北から)



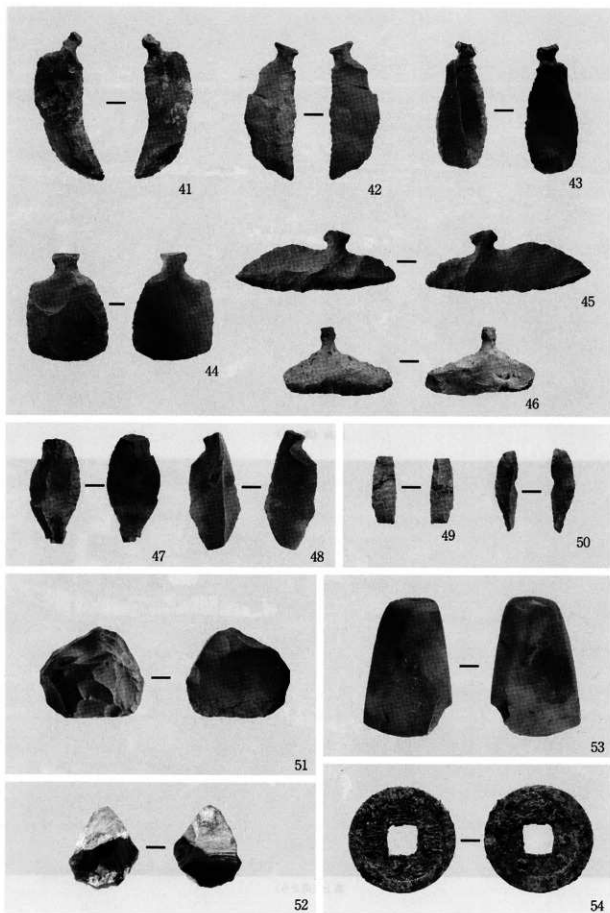
写真図版14 第1次調査出土遺物(1)



写真図版15 第1次調査出土遺物(2)



写真図版16 第1次調査出土遺物(3)



写真図版17 第1次調査出土遺物(4)



斜め（南から）



直上（南から）

写真図版18 航空写真（遠景）



斜め（北から）



直上（南から）



L区掘立柱建物群（西から）



L区東側掘立柱建物群（南から）

写真図版20 掘立柱建物群（1）



L区西側掘立柱建物群（東から）



L区東側掘立柱建物群（西から）



全景（東から）



全景（東から）

写真図版22 掘立柱建物（SB202）



S8203掘立柱建物全景（東から）



S8204掘立柱建物全景（北東から）



SB205掘立柱建物全景（東から）



SB207掘立柱建物全景（北から）



SB208掘立柱建物全景（北から）



SB209掘立柱建物全景（北から）



SB210掘立柱建物全景（西から）



SB211掘立柱建物全景（西から）



SB212掘立柱建物全景（西から）



SB213掘立柱建物全景（南から）



S8214掘立柱建物全景（東から）



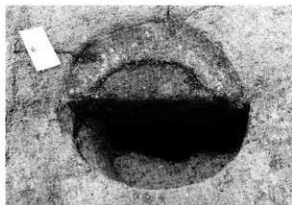
S8215掘立柱建物全景（東から）



SB202-P387・SP348



SB203-P319



SB204-P205



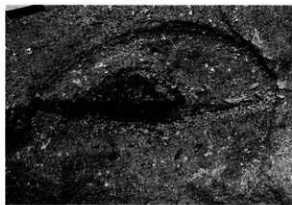
SB205-P311



SB206-P316



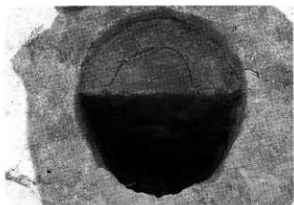
SB207-P214



SB208-P222



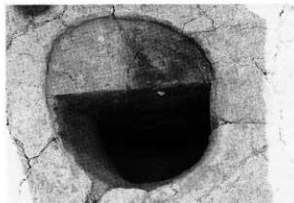
SB209-P219



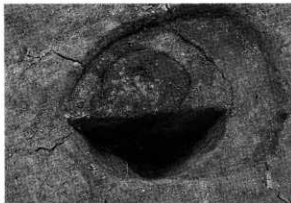
SB210-P275



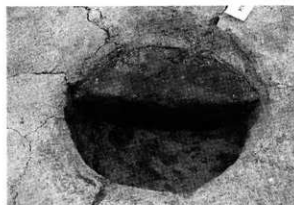
SB210-P284



SB210-P286



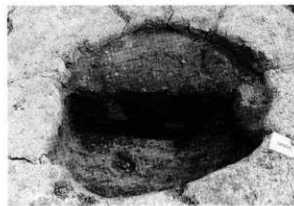
SB211-P406



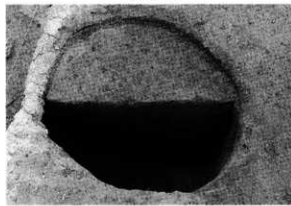
SB212-P256



SB213-P294



SB214-P322



SB215-P331

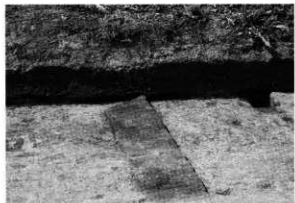
写真図版30 主要柱穴断面 (SB210~215)



検出状況 (南から)



発掘状況 (西から)



東西断面（南から）



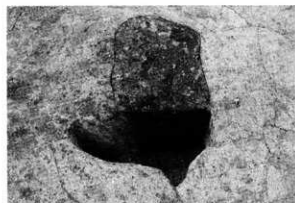
南北断面（東から）



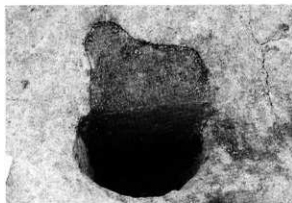
SI201-P（柱穴）1



SI201-P（柱穴）2



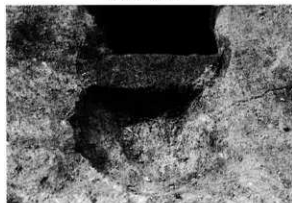
SI201-P（柱穴）3



SI201-P（柱穴）4



SI201-P（柱穴）5



SI201-P（柱穴）6



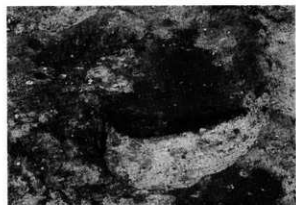
完掘状況 (南西から)



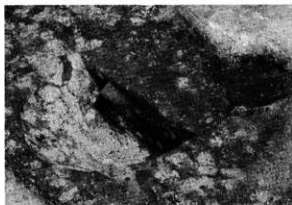
埋土断面 (南東から)



貼床断面（南東から）



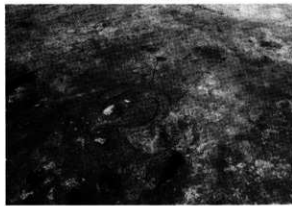
S1202-K1（南から）



S1202-K2（西から）

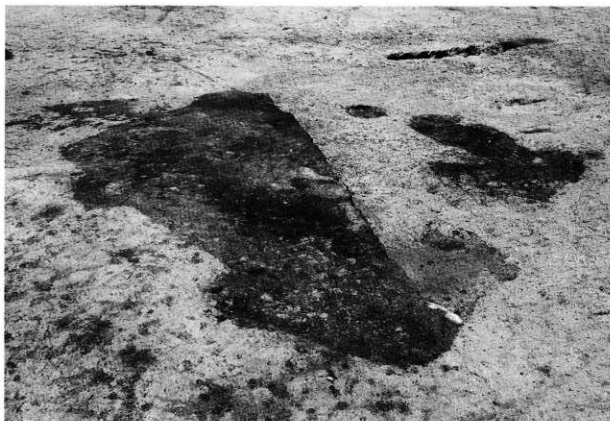


S1202-F1 断面（南から）

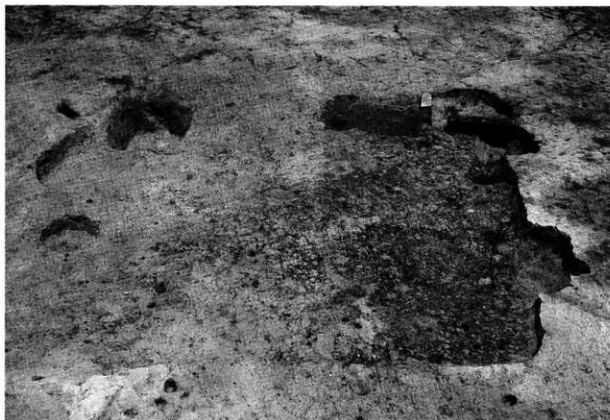


S1202-F1 検出（南から）

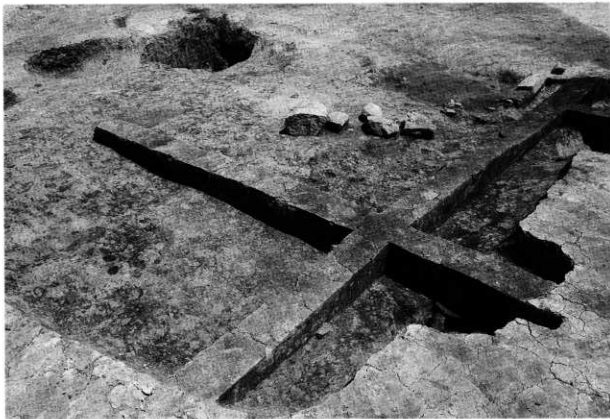
写真図版34 竪穴住居（S1202）付属施設



検出状況（南から）



実態状況（西から）



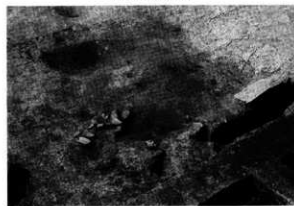
住居埋土 (南西から)



貼床 (南東から)



S1203-K1 (西から)



S1203-F1 (西から)



S1203-F1 断面 (南西から)

写真図版36 雙穴住居 (S1203) 付属施設



検出状況（南東から）



完掘状況（南東から）



SK202土坑完掘 (南から)



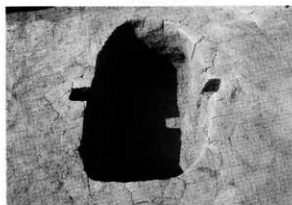
SK202土坑断面 (南から)



SK203土坑完掘 (南から)



SK203土坑断面 (南から)



SK204土坑完掘 (南から)



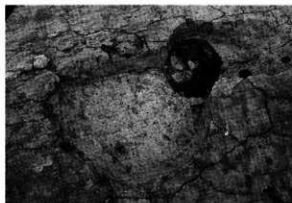
SK204土坑断面 (南から)



SK205土坑完掘 (南東から)



SK205土坑断面 (南東から)



SK206土坑完掘（南から）



SK206土坑断面（東から）



SK207~209土坑断面（東から）



SK210土坑完掘（南から）



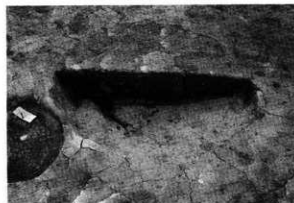
SK210土坑断面（西から）



SK211土坑完掘 (南東から)



SK211土坑断面 (南東から)



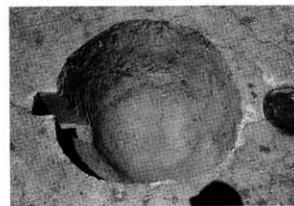
SK212土坑断面 (南東から)



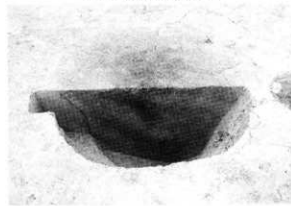
SK213土坑断面 (南東から)



SK213土坑完掘 (南東から)

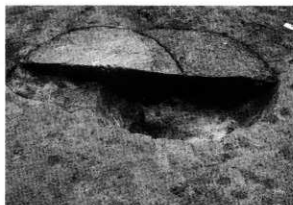


SK214土坑完掘 (南から)



SK214土坑断面 (南から)

写真図版40 土坑 (SK211~214)



SK215・216土坑断面（東から）



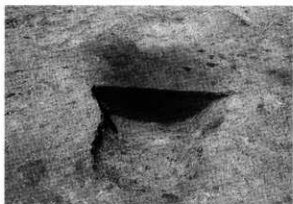
SK217土坑断面（東から）



SK218土坑断面（南から）



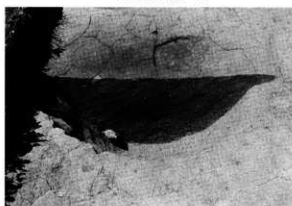
SK217土坑完掘（東から）



SK219・220土坑断面（南東から）



SK221土坑完掘（南から）



SK221土坑断面（東から）



SK222・223土坑完掘 (南から)



SK222・223土坑断面 (南から)



SK224土坑完掘 (南から)



SK226土坑完掘 (南から)



SK224土坑断面 (南から)



SK226土坑断面 (南から)



SK225土坑完掘 (南から)



SK225土坑断面 (南から)



SK227土坑完掘 (南東から)



SK227土坑断面 (南東から)



SK228土坑完掘 (南から)



SK228土坑断面 (南から)



SK229土坑完掘 (南から)



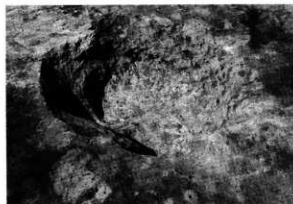
SK229土坑断面 (南から)



SK230土坑完掘（東から）



SK230土坑断面（南東から）



SK231土坑完掘（南から）



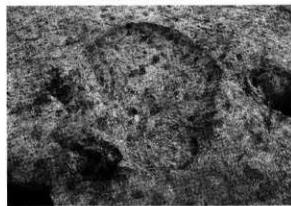
SK231土坑断面（南東から）



SK232土坑完掘（南から）



SK232土坑断面（南から）



SK235土坑完掘（南から）



SK233土坑完掘（東から）



SK233土坑断面（東から）



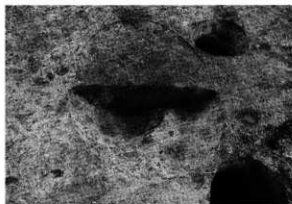
SK234土坑完掘（南から）



SK234土坑断面（北から）



SK236土坑完掘（南から）



SK236土坑断面（北から）



SK237土坑完掘（南から）



SK237土坑断面（南から）



SX201断面 (南から)



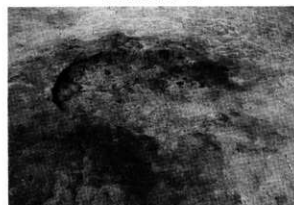
SX201断面 (西から)



SX202断面 (西から)



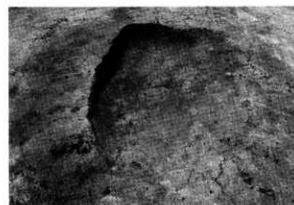
SX202断面 (南から)



SX203完掘 (南から)



SX203断面 (南から)



SX204完掘 (東から)



SX204断面 (東から)

写真図版46 性格不明遺構 (SX201~204)



墓石群全景 (東から)



墓石1



墓石2



墓石3



墓石4



墓石5



墓石6



墓石7



墓石8



墓石9



墓石10



墓石11



墓石12



墓石13



墓石14



墓石15



墓石16



墓石17



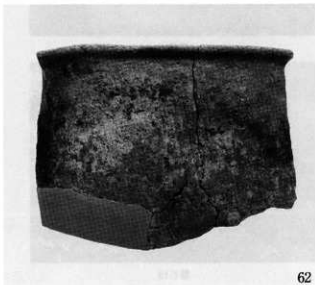
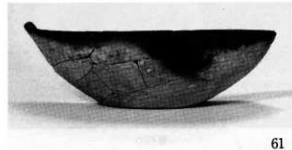
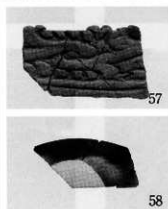
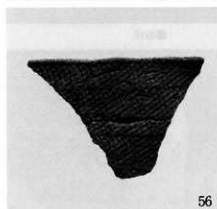
墓石18



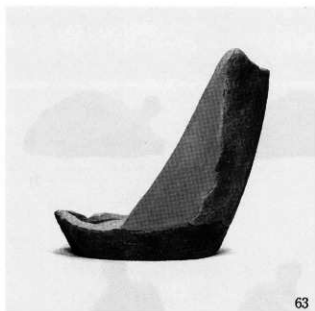
墓石19



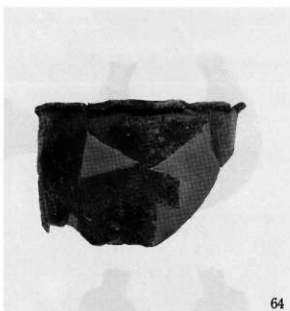
墓石20



写真図版50 第2次調査出土遺物(1)



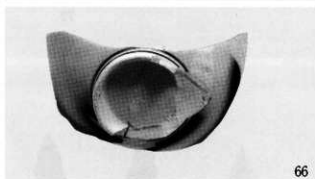
63



64



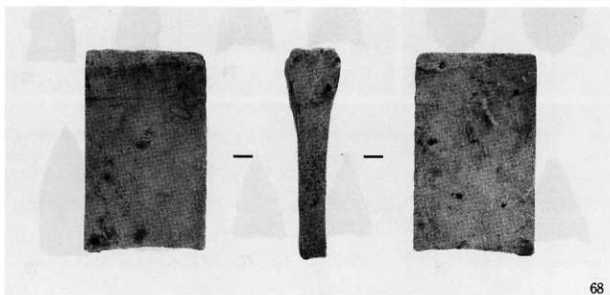
65



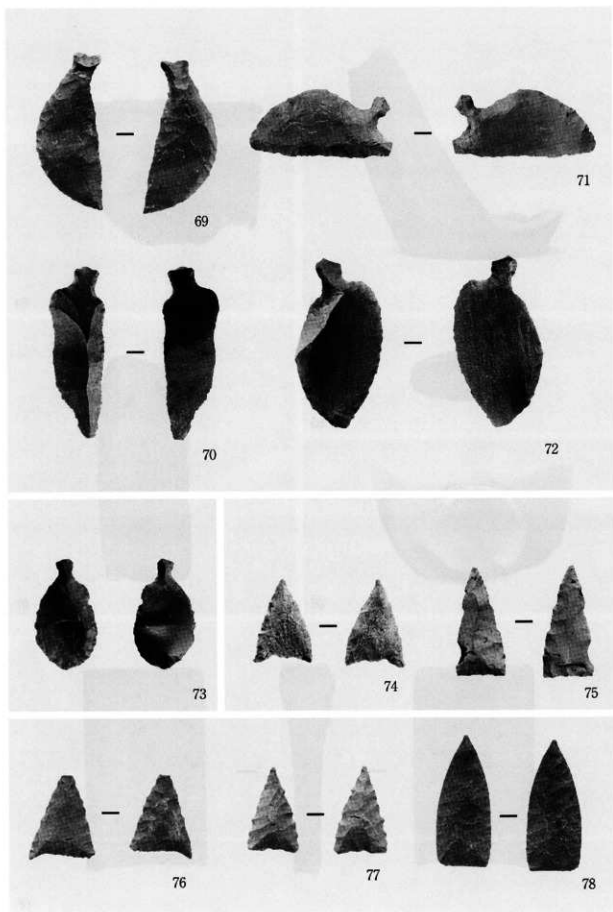
66



67



68



写真図版52 第2次調査出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	むかい3いせきだいいち・にじはくつちようさほうこくしょ							
書名	向Ⅲ遺跡第1・2次発掘調査報告書							
副書名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第591集							
編著者名	晴山雅光・福島正和							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2012年2月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかい3いせき 向Ⅲ遺跡 (第1次)	むかい3いせき 遠野市綾織 町下綾織第 31地割149- 17ほか	03208	MF53-1206	39度 18分 59秒	141度 18分 59秒	2009.07.13 ～ 2009.10.29	8,750㎡	東北横断 自動車道 釜石秋田 線新直轄 事業
むかい3いせき 向Ⅲ遺跡 (第2次)	むかい3いせき 遠野市綾織 町上綾織第 31地割102 ほか 地内ほか			39度 19分 00秒	141度 27分 52秒	2010.04.08 ～ 2010.06.30	7,213㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
向Ⅲ遺跡 (第1次)	集落遺跡	旧石器時代 縄文時代 近世 時期不明	焼土遺構4、土坑40 (陥し穴10、貯蔵穴 1含む) 掘立柱建物2、溝1		ナイフ形石器 縄文土器(早期・前 期・中期・後期・晩 期)、石器 銭貨			
向Ⅲ遺跡 (第2次)	集落遺跡	縄文時代 平安時代 中世 近現代	土坑25(陥し穴18 含む) 竪穴住居3 掘立柱建物12 竪穴建物1 土坑12		縄文土器(前期・晩 期)・石器 土師器・須恵器			
要 約	遠野市綾織町に所在する向Ⅲ遺跡は、猿ヶ石川南岸の段丘上に立地する。第1次および第2次調査を通じて、縄文時代には狩猟域として利用されていたことが判明した。また、平安時代の竪穴住居が第2次調査でみられたことから、この時代においては集落が形成されていたものと考えられる。第2次調査において検出した中世に属すると考えられる掘立柱建物や竪穴建物の存在から居住域であった可能性が高い。出土遺物は縄文土器(早期～晩期)や平安時代の土器が出土した。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 591 集
向Ⅲ遺跡第 1・2 次発掘調査報告書
東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成 24 年 2 月 15 日

発行 平成 24 年 2 月 20 日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
〒020-0066 岩手県盛岡市上田四丁目2番2号
電話 (019) 624-3195
(公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 株式会社モノグラム社
〒024-0034 岩手県北上市諏訪町一丁目3-21
電話 (0197) 65-3315

